

神戸大学 文学部・大学院人文学研究科

2015 年度（平成 27 年）度

年 次 報 告 書

神戸大学文学部・大学院人文学研究科 評価委員会編

2015 年（平成 27 年）

目 次

はじめに	1
------	---

第 1 部

I. 教育（文学部）	2
I-1. 文学部の教育目的と特徴	2
I-2. 教育の実施体制	5
I-3. 教育内容・方法	9
I-4. 教育方法	15
I-5. 学業の成果	20
I-6. 進路・就職の状況	26
II. 教育（人文学研究科）	28
II-1. 人文学研究科の教育目的と特徴	28
II-2. 教育の実施体制	31
II-3. 教育内容・方法	35
II-4. 教育方法	42
II-5. 学業の成果	49
II-6. 進路・就職の状況	54
III. 研究（文学部・人文学研究科）	57
III-1. 文学部・人文学研究科の研究目的と特徴	57
III-2. 研究活動の状況	60
III-3. 競争的外部資金の獲得状況	61

第 2 部

I. 外部資金による教育研究プログラム等の活動	68
I-1. 科学研究費補助金基盤研究（S）（研究代表者：奥村弘、課題番号：26220403） 「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—」	68
I-2. グローバル人材育成推進事業（平成 26 年度より「スーパーグローバル大学 等事業 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に改称）	78

I-3. 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「国際共同による日本研究の革新－海外の日本研究機関との連携による若手研究者養成」	84
II. 部局内センター等の活動	97
II-1. 海港都市研究センター	97
II-2. 地域連携センター	99
II-3. 倫理創成プロジェクト	105
II-4. 日本文化社会インスティテュート	110
II-5. ESD コース（持続可能な開発のための教育コース）	112
第3部	
I. 外部評価	117
I-1. 外部評価委員会	117
II-2. 外部評価報告書	118
あとながき	122

はじめに

大学院人文学研究科長・文学部長
増本 浩子

本年度は、第2期中期目標・中期計画（平成22年度～平成27年度）の最終年度に当たります。これまでと同様に、基本的には第1期の6年間全体にわたる年次報告書の体裁にのっとりながら、平成27年度を中心にして、人文学研究科および文学部の教育研究活動に関する基礎資料を収集して自己評価を行っています。ただし、昨年度は外部評価でさまざまな指摘をいただきましたので、今回はいくつかの点を改善しました。全体としては特に、正確なデータを掲載することと、学外者にもわかりやすい記述にすることに努めています。

報告書は全3部と教員プロフィールから構成されています。第1部は人文学研究科および文学部の教育と研究、第2部は外部資金による教育研究プログラム等の活動と、部局内センターおよびインスティテュートの活動、第3部は外部評価委員による評価です。さらに加えて、各教員の教育・研究・社会貢献等に関わるプロフィールを附しています。

人文学研究科の教育目的は、「人類がこれまで蓄積してきた人間および社会に関する古典的な文献の原理的研究並びにフィールドワークを重視した社会文化の動態的分析を通じ、新たな社会的規範および文化の形成に寄与する」ことにあります。また、文学部の教育目的は、「広い知識を授けるとともに、言葉および文化、人間の行動並びに歴史および社会に関する教育研究を行い、人間文化および現代社会に対する深い教養、専門的知識、柔軟な思考力並びに豊かな表現能力を有する人材を養成すること」にあります。また平成25年度に実施されたミッションの再定義にもとづいて、平成26年度からは人文学研究科・文学部の教育研究の新たな展開が始まっています。

このような目的やミッションを達成するために、従来からの伝統的な学問分野の高い専門性を追求しながら、同時に総合性・応用性も確保するべく、さまざまなプログラムを実施しています。今回の報告書の作成とそれをふまえた評価にもとづいて、現在の教育・研究状況を把握して検証し、課題を解決することにより、人文学研究科・文学部の一層の充実と発展を期したいと考えています。

第1部

I. 教育（文学部）

I-1. 文学部の教育目的と特徴

文学部は、人類の長い歴史の中で培われてきた豊かな知的遺産に学びつつ、現代世界で生起するさまざまな現象にも新鮮な関心を持ち、両者の相互参照を通じて新しい世界認識の基盤を構築することを目指す「場」である。以下に本学部の実教育目的、組織構成、教育上の特徴について述べる。

I-1-1. 教育目的

- 1 文学部は、広い知識を授けると共に、言葉と文化、人間の行動、歴史や社会に関する教育研究を行い、人間文化および現代社会に対する深い教養、専門的知識、柔軟な思考能力、豊かな表現能力を有する人材の育成を目的とする。そして、こうした人材が、磨かれ鍛えられた能力を十分に生かして、積極的に社会に貢献することを目指している。
- 2 このような教育目的を達成するために、現行の中期目標では、「教育憲章」に掲げた、「人間性」、「創造性」、「国際性」及び「専門性」を身に付けた個性輝く人材を養成し、「豊富な研究成果を活かして、社会の変化を先導し、個人と国際社会が進むべき道を切り拓く高度な知識・能力を有する、次世代の研究者をはじめとした多様な人材の養成に努め、教育の更なる高みを目指す」ことを定めている。
- 3 神戸大学全学のディプロマ・ポリシー（DP）を踏まえ、人材育成の基本となる文学部 DP およびカリキュラム・ポリシー（CP）を平成23年度に作成し、公開した《資料1》。

《資料1：神戸大学文学部ディプロマ・ポリシー（DP）》

神戸大学文学部ディプロマ・ポリシー

神戸大学文学部は、人類の文化的営み営みの蓄積としての人文学を、古典をとおして深く理解するとともに、社会的対話によりそれを実践していくことのできる人材を育成することを教育上の目的としている。また、徹底した少人数教育により、個々の学生の好奇心に応え、自ら問題を設定し、解決するスキルを学生に伝授することを目指している。

この目標達成に向け、文学部では、以下に示した方針に従って学位を授与する。

○ 学位授与に関する方針

文学部の学生は、所定の単位（卒業論文を含む）を修得しなければならない。卒業論文の単位修得のためには、指定の期日までに卒業論文を提出し、卒業論文試験に合格することを要する。

○ 達成目標

- ・各自の好奇心を学問的に問題化し検証する訓練を積むことで、人文学の幅広い知識と深い洞察力を身につける。
- ・人文学共通の問題・課題を、人類の知的営みの蓄積である古典を通じて理解する。
- ・文化・言葉・学域の壁を越えた意思疎通および連携を可能にする社会的対話力を身につける。

I-1-2. 組織構成

上記のような教育目的を実現するために、文学部は《資料2》のような組織構成をとっている。人文学の古典的な学問領域である哲学、文学、史学を学ぶ3講座と人間的知識と感性をシステムとして捉える知識システム講座、社会文化に関わる問題をフィールドワークをとおして深めていくことを目指す社会文化講座を置き、徹底した少人数教育によって専門的能力を陶冶することに重点を置いた教育課程を編成している。

《資料2：組織構成》

学 科	講 座	専 修
人文学科	哲学	哲学
	文学	国文学、中国文学、英米文学、ドイツ文学、フランス文学
	史学	日本史学、東洋史学、西洋史学
	知識システム	心理学、言語学、芸術学
	社会文化	社会学、美術史学、地理学

I-1-3. 教育上の特徴

- 文学部では、① 初年次に大学における人文学の基礎を学び、② それを踏まえて《資料2》の15専修から1つを選び、その専修において徹底した少人数教育によって専門的能力を鍛え、③ 各専修のなかに複数ある専門分野で自身の関心を絞り込み、卒業論文を書きあげる。文学部では特に、学部教育の集大成として卒業論文の作成を重視し、1～2年間の指導期間を設定している。
- 文学部は、少人数教育による課題探究能力の開発を重視している。具体的には、個別の主題を掘り下げる「特殊講義」などのほか、数人から十数人で行う「演習」が専修毎に豊富に用意されている。「実験」やフィールドワークを含む「実習」も同じく少人数で実施される。これらの授業において、共通の文献や資料を精読し、さらに自分で選択したテーマについて研究報告を行い、互いに議論を戦わせ深め合うことで、学生は各専門の研究姿勢・基礎知識・研究方法および研究倫理等を習得する。またそれと同時に、自ら課題を発見し、解決する能力を磨くことができる。
- 文学部は、平成23年3月にオックスフォード大学東洋学部と学術交流協定を締結し、「神戸オックスフォード日本学プログラム」（略称 KOJSP=Kobe-Oxford Japanese Studies Program）として、平成24年10月からオックスフォード大学東洋学部日本学科2年生全員を受入れている《資料3》（<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/graduate/kojsp.html>）。これはユニット受入れ型のプログラムであり、文学部とオックスフォード大学東洋学部との間の綿密な連絡・連携のもとに実施されており、派遣元からも極めて高い評価を得ている《資料4》。オックスフォード大学生は午前中に日本語の授業を受講し、午後は文学部の様々な授業を他の学生と一緒に受けている。全員が参加する「KOJSP 演習」では、各自が自由に課題を選び、指導教員や学生チューターと共に日本の諸相についての研究を進め、その成果をプログラム修了時の発表会で披露することになっている。「KOJSP 演習」で選んだ課題をオックスフォード大学での卒業論文とする学生も少

なくない。彼らの学習・生活面でのサポートを文学部の学生チューターが担うなど、世界最高レベルの学生と共に勉学し、学生生活を送ることで、文学部の日本人学生に対しても大きな影響を与えており、勉学に対する意識を高め、国際的な視野を獲得することに貢献している《資料5》。平成25年度からはハートフォード・カレッジにて夏季英語講習が神戸大学文学部と共同で実施されており、毎回20名前後の神戸大学生がオックスフォード大学で学んでいる。また、平成24年度からはじまった文部科学省グローバル人材育成推進事業「問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成」の一環として「グローバル人文学プログラム」を実施している(<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~global/index.html>)。これらの事業を中心に、文学部ではグローバル教育の一層の活性化を図っている。

《資料3：神戸オックスフォード日本学プログラム留学生数》

年 度	所属大学名	出身国	奨学金	期 間
平成 24～27 年度	オックスフォード 大学 (12名)	連合王国 (11名) ルーマニア (11名)	JASSO	24年10月1日～25年7月31日
	オックスフォード 大学 (12名)	連合王国 (9名) 連合王国・日本 (1名) ドイツ (1名) チェコ (1名)	神戸大学 基金	25年10月1日～26年7月31日
	オックスフォード 大学 (10名)	連合王国 (6名) 連合王国・タイ (1名) 日本・連合王国 (1名) タイ (1名) ハンガリー (1名)	JASSO 及び 神戸大学 基金	26年10月1日～27年7月31日
	オックスフォード 大学 (10名)	連合王国 (6名) 連合王国・ギリシャ (1名) 連合王国・カナダ (1名) スペイン (1名) ベルギー・ロシア (1名)	JASSO	27年10月1日～28年7月31日

《資料4：オックスフォード大学東洋学部からの極めて高い評価》

神戸大学HPに掲載されたニュースから抜粋：

○「懇談の冒頭で、ハミルトン学長から「神戸オックスフォード日本学プログラム」は大変素晴らしく、神戸大学で学んだ学生から非常に有意義な時間を過ごしたとの報告を受けており、深く御礼を申し上げたい、との言葉がありました。また、是非とも今後も「神戸オックスフォード日本学プログラム」を継続して実施したい、との意向も示されました。」

(参照：http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/topics/t2013_10_17_01.html)

○「フレズビック教授は、神戸オックスフォード日本学プログラムの実施状況がきわめて順調であり、現在このプログラムに参加しているオックスフォード大学日本学専攻学生10名の満足度も非常に高いことに対して感謝の意を表した後、オックスフォード大学と神戸大学の学術交流をますます盛んにするため、ヨーロッパ日本研究協会(European Association for Japanese Studies)の会長として2016年の国際大会を神戸大学で開催したい旨を述べ、武田学長もそれに協力することを約束しました。」

(参照：http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2015_06_30_02.html)

《資料5：KOJSPに関するオックスフォード大学生及び本学部チューターの声》

神戸大学文学部HPから抜粋（<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/let2016/report.html>）：

○オックスフォード大学生：「私が日本に来たのはこれが初めてだったので、留学生活がいったいどんなものになるのか、全くわかりませんでした。初めは緊張していましたが、神戸大学に来てから、いろいろと援助してもらったおかげで、本当に楽しく過ごせています。特にスーパーバイザー（同じ学部の先生）とチューター（同じ学部の方々）にはお世話になりました。」

○KOJSPチューター：「同世代で共通点も多いですが、やはり文化差は存在します。特に差別に対する感覚や考え方については日本とイギリスではかなり違うので、私たち日本人が意図せずに彼らを傷つけてしまうこともあります。そういう時は親身になって彼らの話を聞き、相互理解を深めるのがチューターの役目です。」

I-2. 教育の実施体制

I-2-1. 基本的組織の編成

文学部では、学生1人1人の好奇心を、現代の人文科学の学問的状況に即して問題化し検証する訓練を積むことで、人間文化に対する幅広い知識と深い洞察力を身につけた社会人及び研究者を育成するという目的を達成するために、1学科（人文学科）を設け、その下に学問分野の観点から5大講座を置いている《資料2（3頁）》。教育組織の編成については、社会動向及び学問動向を勘案した上で専門性に応じた適切な教育を実施するために適宜見直しており、現行の1学科制は平成13年度に3学科（哲学科、史学科、文学科）から再編統合して新たに設置したものである。

教員の配置状況は、《資料6》及び《資料7》のとおりである。教育の単位となる15の専修にはそれぞれ2名以上の専任教員が配属され、演習・特殊講義・概論・入門・人文学基礎といった主要な科目を担当している。非常勤講師に担当を依頼している授業は、各専修の専任教員でカバーしきれない分野と、学芸員・教員などの免許・資格に関するものに限定されている。115名の入学定員に対し専任教員は54名であり、大学設置基準が要求する専任教員数を十分に確保している。

《資料6：教員の配置状況：平成27年5月1日現在》

学科	収容定員	専任教員数（現員）											助手		非常勤教員数	
		教授		准教授		講師		助教		計						
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	総計	男	女	男	女
人文学科	460	23	1	21	9	1	0	0	1	45	11	56	0	0	24	8

《資料7：専修別教員数》

専修	教授	准教授	講師	専修	教授	准教授	講師	専修	教授	准教授	講師
哲学	2	4	0	フランス文学	1	1	0	言語学	2	1	0
国文学	3	3	0	日本史学	2	2	0	芸術学	1	0	0
中国文学	2	1	0	東洋史学	1	3	0	社会学	3	2	0
英米文学	2	3	0	西洋史学	1	3	0	美術史学	1	1	0
ドイツ文学	1	0	1	心理学	1	4	0	地理学	1	2	0

入学者の選抜については、全学的な理念を踏まえながら文学部として求める学生像（アドミッション・ポリシー）を定め《資料8》、大学入試センター試験利用による基礎学力判断の後、個別学力試験では「国語」「外国語」「数学」（前期）、「外国語」「小論文」（後期）を課すことにより、理解力、読解力、語学力、問題解決能力、論理的思考力、表現能力などを総合的に判定することとしている。

学生定員と現員の状況については《資料9》、専修別の学生数（平成27年度）は《資料10》のとおりである。在籍学生数は毎年学生定員を若干超過しているが、その数は、標準卒業年限を超える学生を含めて学生定員の15%以下であり、適正範囲であると考ええる。

《資料8：求める学生像（アドミッション・ポリシー）》

神戸大学が求める学生像

神戸大学は、世界に開かれた国際都市神戸に立地する大学として、国際的で先端的な研究・教育の拠点になることを目指しています。

これまで人類が築いてきた学問を継承するとともに、不断の努力を傾注して新しい知を創造し、人類社会の発展に貢献しようとする次のような学生を求めています。

1. 進取の気性に富み、人間と自然を愛する学生
2. 旺盛な学習意欲をもち、新しい課題に積極的に取り組もうとする学生
3. 常に視野を広め、主体的に考える姿勢をもった学生
4. コミュニケーション能力を高め、異なる考え方や文化を尊重する学生

文学部が求める学生像

文学部では、人間がつくり上げてきた文化に対する好奇心を高め、多様な角度から人間存在の深みに光をあてる教育研究を行っています。各自の好奇心を学問的に問題化し検証する訓練を積むことで、人文学の幅広い知識と深い洞察力を身につけた人材を育成することを目標にしています。そのために、次のような学生を求めています。

文学部の求める学生像

1. みずみずしい感受性と想像力を持っている学生
2. 言葉や文化、人間の行動、歴史や社会に対する幅広い関心と好奇心を持っている学生
3. 基礎学力、とりわけ論理的思考力、日本語および外国語の読解力・表現力、情報リテラシーを備えている学生
4. 既成の価値観にとらわれることなく、自分で問題を発見し、探求していくことができる学生

以上のような学生を選抜するために、文学部では、大学入試センター試験により総合的な基礎学力を測り、個別学力検査では「国語」「外国語」「数学」（後期日程にあつては、「外国語」「小論文」）を課すことにより、理解力、読解力、語学力、課題解決能力、論理的思考力、表現能力等を測ります。

《資料9：学生定員（収容定員）と現員の現況：各年度12月1日現在》

学科	年度	収容定員	現員	定員充足率 (年)	定員充足率 (中期)
人文学科	平成22年度	460	529	115%	113.6%
	平成23年度	460	529	115%	
	平成24年度	460	519	113%	
	平成25年度	460	524	114%	
	平成26年度	460	514	112%	
	平成27年度	460	520	113%	

《資料10：専修別の学生数（平成27年度）》

専修	2年	3年	4年	専修	2年	3年	4年	専修	2年	3年	4年
哲学	2	6	12	フランス文学	5	5	4	言語学	8	9	10
国文学	15	19	20	日本史学	9	12	13	芸術学	8	7	9
中国文学	1	2	4	東洋史学	2	6	6	社会学	18	15	21
英米文学	9	5	22	西洋史学	10	5	4	美術史学	8	7	9
ドイツ文学	5	6	5	心理学	12	12	14	地理学	6	4	4

I-2-2. 教育内容、教育方法の改善に向けた取組み

文学部では、1年次を対象として、少人数ゼミ、オムニバス形式の講義、専門分野ごとの入門科目を開講しており、専門的知識の習得と共に、広い人文科学的な視座の獲得が可能となっている。

このような教育の実施体制を点検し改善していくため、評価委員会を置き、授業評価アンケートの実施など、教育に関わる評価作業を行うだけでなく、教員の教育方法及び技術の向上を図るためにファカルティ・ディベロップメント（以下、「FD」と略称）を開催している。文学部のFDは、平成23年度からは評価委員会が中心となり、教務・学生の2委員会の協力を得て行っている。また、定期的な学生による授業評価アンケート、教員相互の授業参観・評価（ピアレビュー）も実施し、その結果は、FDにおいて評価委員長から報告され、今後のカリキュラム編成や授業方法の改善のために活用するとともに、中期目標の実現に向けた教育課程の改善が図られている《資料11》《資料12》。さらに、毎年度、評価報告書を作成し、独自に外部評価を受け、達成点と改善点を的確に把握し、それを教員・職員間で共有することに努めている《資料13》。

こうした活動をとおして、個々の科目の授業内容を改善することはもちろん、カリキュラム構成や授業方法等の改善も頻繁になされており、たとえば、「グローバル人文学プログラム」を実施したことに加えて、神戸オックスフォード日本学プログラムで受け入れているオックスフォード大学の学生が受講する授業などでもグローバル化に配慮した授業内容が展開されつつある。

《資料11：平成26・27年度のFD実施状況》

開催日	テーマ	参加者数
平成26年1月15日	グローバルFD講演会「イタリアにおける日本語教育の組織と実践」	30
平成26年6月25日	FD懇談会「「ミッションの再定義」をどう読むか」	45
平成26年7月23日	FD講演会「LMSの紹介－ICTを用いた授業の支援」	45
平成26年11月26日	グローバルFD講演会「Facts and Fictions: On New Education in Poland」	46
平成27年2月18日	FD講演会「本学の教育改革について」	53
平成27年3月6日	FD講演会「平成26年度ピアレビュー結果の検討」	44
平成27年7月22日	神戸大学学修管理システム(BEEF)について	54
平成27年9月2日	初年次セミナー・アクティブラーニングに関するFD	47
平成28年1月13日	教員評価について	41
平成28年1月27日	グローバルFD講演会「This, That, or the Other? On Japanese Studies in Romania」	49

平成28年2月2日	グローバルFD講演会「ヤゲウォ大学における国際化戦略」	41
平成28年2月17日	障害者差別解消法と来年度からの神戸大学の体制について	46
平成28年3月7日	平成27年度ピアレビュー結果の検討及び授業評価アンケートの結果について	53

《資料12：平成27年度 ピアレビュー実施結果 抜粋》

(1) 実施期間 前期 平成27年6月22日(月)～7月3日(金)	
(2) 授業参観を行った教員数 31名 ※ 58%の参加率(休職中の教員を除く全教員数：53名)	
(3) 参観を受けた授業数 1名の参観者：12 2名の参観者：8 3名以上の参観者：1 ※ 講義科目のみを授業参観の対象科目としている。	
(4) 授業参観レポートの集計結果	
1. 授業改善上、参考になった項目(複数回答)	
○ 説明のしかた・・・・・・・・・・	26
○ 配布資料・板書などの視覚資料・・・・・	24
○ 学生とのインタラクション・・・・・・・・	11
○ TAの使い方・・・・・・・・・・	2
2. 自由な感想の主な内容(特に参考になった点)	
○ PPTのスライドに穴埋めの箇所を作って印刷・配布し、学生に書き込み作業を行わせていた点が参考になった。	
○ 前回の授業で提示した設問に答えるところから授業をはじめ、議論を展開し、さらに新たな設問を提示して次回につなげる授業を行っていた。	
○ 前回の作業レポートをもとに授業を組み立て、作業の再提出につなげるという学生との相互交流を重視する授業が印象に残った。	
○ 配布資料が工夫されていた。大・中・小の項目に分かれていて、「今何を話しているのか」が非常にクリアであった。	
○ 授業の本題に入る前に、関連する情報を話し、学生の理解を助けていた。	
○ 3Dメガネを用いて写真を立体的に浮かび上がらせる趣向など、受講生が主体的に講義に参加している工夫が随所に施されていた。	
○ 私語を続ける学生への注意の仕方、学生との対話型授業など参考になる点が多かった。	
○ TAが授業前に配布資料の準備やホワイトボードのマーカーの補充を行い、授業が円滑に進行するよう配慮が行き届いていた。	

《資料13：平成22～27年の外部評価実施状況》

実施日	外部評価委員
平成22年5月14日	井上健(東京大学教授)、柳教烈(韓国海洋大学教授)
平成23年5月18日	小田部胤久(東京大学教授)
平成24年4月27日	山本弘明(名古屋文理大学教授・名古屋大学名誉教授、元名古屋大学文学研究科長)
平成25年7月6日	三角洋一(大正大学特任教授・東京大学名誉教授)
平成26年6月28日	深澤克巳(東京大学教授)
平成27年6月27日	立花政夫(東京大学名誉教授、元東京大学人文社会系研究科長)

I-3. 教育内容・方法

I-3-1. 教育課程の編成

文学部では、ディプロマポリシーにおいて、学生が修了までに達成を目指す目標として、次の3点を挙げている。1) 各自の好奇心を学問的に問題化し検証する訓練を積むことで、人文学の幅広い知識と深い洞察力を身につける、2) 人文学共通の問題・課題を、人類の知的営みの蓄積である古典を通じて理解する、3) 文化・言葉・学域の壁を越えた意思疎通および連携を可能にする社会的対話力を身につける。これを実現するために、以下のような教育課程を組んでいる。

教育課程は、「専門科目」及び「専門科目以外の科目」で構成されている。「専門科目以外の科目」は、「全学共通科目」である教養原論、外国語科目、情報科目、健康・スポーツ科目及び「資格免許のための科目」から成り、多様な授業科目を開講すると共に教育職員免許及び学芸員資格を取得するために必要な授業科目を提供している。「専門科目」は、演習と講義形式による概論、特殊講義を中心に構成され、多彩な研究領域に対応する多様な内容、形態の授業科目が置かれている。また、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、中国語、韓国語、ラテン語、古典ギリシア語の外国語科目のほか、専門科目を学ぶにあたって必要となる語学力を涵養する授業も開講されている。以上の形で、幅広い知識と深い洞察力を身につけることができるようにしている。

文学部では、新入生全員を対象とした導入教育として、1年次前期に5つの講座がそれぞれ入門の講義を行うと共に、「人文学導入演習」を複数開講し、今後の教育に必要とされる基本的な視座や研究・学習方法の基礎を実践的に身につけさせている。また1年次後期には15の専修がそれぞれ開講する「人文学基礎」においてより具体的かつ専門的な研究内容を学ぶ授業を提供している。文学部の学生は、このようにして人文学の基礎を学び、人文学共通の問題と課題を理解し、それを踏まえて15専修の中から1専修を自ら選び、その専修において、徹底した少人数教育をとおして専門的能力を陶冶し、さらに、各専修内に複数ある専門分野の中で自身の関心を絞り込んで卒業論文を作成することになっている。

「専門科目」の内容としては、例えば、「哲学演習」では、ドイツ語論文を精読することで文献読解力の向上をはかると共に学生間の議論をとおして問題探求能力を高めることを目指した。このような授業は古典理解をとおして人文学的課題を考える良い例である。

文学部の教育方針を明確化するため、平成18年度には履修モデルケースを専修毎に作成し提示した。また平成26年度から取り組んできた開講科目すべてに固有のナンバーを割当てて作業（ナンバリング）が完了し、それぞれの学年・専修において必要とされる科目が平成28年度から明確化されることになる。

I-3-2. 学生や社会からの要請への対応

文学部では、グローバル化が進む現代社会における諸問題に対応し、また社会からの要請に応えるため、教育課程の編成やそれらに配慮した取組みを以下のとおり実践している。

1. 他学部科目の履修

文学部では、他学部の専門科目を文学部開講専門科目の自由選択科目と同等に扱い、卒業要件単位として認めている。学生は、一定の要件のもとで、文学部の専門科目と他学部の専門科目から30単位を自由選択科目として修得し、卒業に必要な単位とすることができる。また、文学部、発達科学部、経済学部、農学部、国際文化学部、工学部及び医学部が共同で実施する「神戸大学 ESD コース」(Education for Sustainable Development : 持続可能な開発のための教育) が設定されており、関係学部の授業を体系的に履修することができるようになった。ESD コースを修了しようとする学生は修了要件《資料14》の定めるところに従い、14単位以上を修得しなければならない。

《資料14 : ESD コース修了要件 (学生便覧2015年度 p. 58)》

別表第2 修了要件

授業科目区分等	授業科目名	単位数	必要単位数	備 考
基礎科目	ESD基礎 (持続可能な社会づくり)	2	2	
	実践農学入門	2		
	ESD論 (持続可能な社会づくり2)	2	2	
関連科目	生涯スポーツ論	2	6	自学部開講科目及び他学部開講科目2単位以上を修得
	子どもの発達	2		
	自然教育論	2		
	健康行動科学	2		
	場所の文化史	2		
	生活空間計画論1	2		
	生活環境緑化論1	2		
	感性表現論2	2		
	国際開発論	2		
	環境植物生態学	2		
	エコロジー論	2		
	メディア論	2		
	生涯発達心理学	2		
	環境人文学講義Ⅰ	2		
	環境人文学講義Ⅱ	2		
	環境NP0実践論	2		
	社会コミュニケーション入門	2		
	経済地理学	2		
	農と植物医科学入門	2		
	熱帯有用植物学	2		
	森林環境学入門	2		
	食料生産管理学	2		
	森林生態学	2		
	植物栄養学	2		
	森林保護学	2		
	ガバナンス論	2		
	バイオエシックス	2		
	地球環境論	2		
	水文学	2		
	国際関係論	2		
	都市地域計画	2		
	合意形成論	2		
	国際保健	2		
	災害保健	2		
	阪神・淡路大震災	2		
	総合科目Ⅰ (ボランティアと社会貢献活動)	2		
総合実践科目	ESD実践論	2		フィールド演習科目4単位修得者が対象
フィールド演習科目	ESD演習Ⅰ (環境発達学)	2	4	
	ESD演習Ⅰ (環境人文学)	2		
	ESD演習Ⅰ (環境経済学Ⅰ)	2		
	ESD演習Ⅰ (兵庫県農業環境論)	2		
	ESD演習Ⅱ (環境発達学)	2		
	ESD演習Ⅱ (環境人文学)	2		
	ESD演習Ⅱ (環境経済学Ⅱ)	2		
	ESD演習Ⅱ (実践農学)	2		
	ESD演習Ⅰ (初期体験実習)	2		
	ESD演習Ⅱ (IPW統合演習)	2		
			14	

修了が認定された者には修了認定書が授与される。「神戸大学 ESD コース」の授業科目として、文学部では「環境人文学」を開講し、広く環境問題に関わるアクションリサーチ型演習と講義を行っている。持続可能な社会のためには、特に市民・住民によるイニシアチブが重要であることを踏まえ、ボランティア活動やNPO 活動といった事例を積極的に講義で扱っている。（「ESD コース」については、「第2部 II-5. ESD コース」114～113 頁を参照。）

2. 海外協定校との単位互換

文学部は全学協定及び部局間協定に基づき海外の大学と単位互換協定を締結している《資料15》。この制度に基づく平成22～27年度の学生交換の実績は、受け入れ49名《資料16》、派遣23名である《資料17》。交換留学等によりこれら海外の協定校で取得した単位のうち60単位までを卒業に必要な単位として認定することで、より積極的な留学を支援している。

《資料15：単位互換協定を締結している海外の大学 平成28年3月現在》

協定校	国名	大学間協定	部局間協定
ヤゲヴォ大学	ポーランド		○
山東大学	中華人民共和国	○	
中山大學	中華人民共和国	○	
木浦大学校	大韓民国	○	
成均館大学校	大韓民国	○	
ワシントン大学	アメリカ合衆国	○	
バーミンガム大学	連合王国	○	
韓国海洋大学校	大韓民国	○	
パリ第10（ナンテール）大学	フランス	○	
鄭州大学	中華人民共和国		○
グラーツ大学	オーストリア	○	
中国海洋大学	中華人民共和国	○	
西オーストラリア大学	オーストラリア	○	
南オーストラリア大学	オーストラリア	○	
カレル大学	チェコ	○	
浙江大学	中華人民共和国		○
ロンドン大学東洋アフリカ研究学院	連合王国	○	
復旦大学	中華人民共和国	○	
香港大学	中華人民共和国		○
ハンブルク大学	ドイツ		○
北京外国語大学	中華人民共和国	○	
武漢大学	中華人民共和国	○	
リヨン高等師範学校	フランス	○	
ソウル国立大学校	大韓民国	○	
上海交通大学	中華人民共和国	○	
清華大学	中華人民共和国	○	

ライデン大学	オランダ	○	
クイーンズランド大学	オーストラリア	○	
ピッツバーグ大学	アメリカ合衆国	○	
国立台湾大学	台湾	○	
パリ第7（ドニ・ディドロ）大学	フランス	○	
サウスフロリダ大学	アメリカ合衆国	○	
オックスフォード大学	連合王国	○	
ヴェネツィア大学	イタリア	○	
華東師範大学	中華人民共和国		○
ソフィア大学	ブルガリア	○	
パリ第2（パンテオン・アサス）大学	フランス	○	
オタワ大学	カナダ	○	
トリーア大学	ドイツ	○	

《資料16：交換留学（受入）実績》

年度	所属大学名	出身国	奨学金	期 間
平成 22年度	成均館大学	大韓民国		22年4月1日～23年3月31日
	ピッツバーグ大学	アメリカ合衆国		22年10月1日～23年3月31日
	木浦大学校	大韓民国	HUMAP	22年10月1日～23年9月30日
	中山大学	中華人民共和国	JASSO	22年10月1日～23年9月30日
	韓国海洋大学校（2名）	大韓民国		22年10月1日～23年3月31日
平成 23年度	北京外国語大学	中華人民共和国	JASSO	23年10月1日～24年3月31日
	北京外国語大学	中華人民共和国	JASSO	23年10月1日～24年9月30日
	木浦大学校	大韓民国	HUMAP	23年10月1日～24年9月30日
	韓国海洋大学校	大韓民国	JENESYS	23年10月1日～24年3月31日
	カレル大学	チェコ		23年10月1日～24年3月31日
	ワシントン大学	アメリカ合衆国	JASSO	23年10月1日～24年9月30日
平成 24年度	オックスフォード大学	連合王国		24年10月1日～25年9月30日
	カレル大学	チェコ		24年4月1日～24年9月30日
	上海交通大学	中華人民共和国		24年4月1日～25年3月31日
	清華大学	中華人民共和国	JASSO	24年10月1日～25年3月31日
	清華大学	中華人民共和国		24年10月1日～25年3月31日
	ソウル国立大学校	大韓民国	JASSO	24年10月1日～25年3月31日
	ピッツバーグ大学	アメリカ合衆国		24年10月1日～25年3月31日
	西オーストラリア大学	オーストラリア		24年10月1日～25年3月31日
	西オーストラリア大学	オーストラリア		24年10月1日～25年3月31日
	パリ第7大学	フランス		24年10月1日～25年9月30日
	カレル大学	チェコ		24年10月1日～25年9月30日
	木浦大学校	大韓民国		24年10月1日～25年9月30日
平成 25年度	上海交通大学	中華人民共和国		25年4月1日～26年3月31日
	成均館大学	大韓民国		25年4月1日～25年9月31日
	北京外国語大学	中華人民共和国		25年4月1日～26年3月31日

	パリ第7大学	フランス		25 年10 月1 日～26 年9 月30日
平成 26年度	北京外国語大学	中華人民共和国	JASSO	26 年4 月1 日～27 年3 月31 日
	武漢大学	中華人民共和国	JASSO	26 年4 月1 日～27 年3 月31 日
	武漢大学	中華人民共和国	JASSO	26 年10 月1 日～27 年9 月30日
	上海交通大学	中華人民共和国	JASSO	26 年4 月1 日～27 年3 月31 日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	26 年10 月1 日～27 年9 月30日
	国立台湾大学	台湾	JASSO	26 年10 月1 日～27 年3 月31日
	山東大学	中華人民共和国	JASSO	26 年10 月1 日～27 年9 月30日
	SOAS	連合王国	JASSO	26 年10 月1 日～27 年9 月30日
	成均館大学	大韓民国	HUMAP	26 年10 月1 日～27 年3 月31日
	カレル大学	チェコ	JASSO	26 年10 月1 日～27 年9 月30日
	木浦大学校	大韓民国	HUMAP	26 年10 月1 日～27 年9 月30日
	ワシントン大学	アメリカ合衆国	JASSO	26 年10 月1 日～27 年9 月30日
	清華大学	中華人民共和国		26 年10 月1 日～27 年3 月31日
平成 27年度	武漢大学	中国	JASSO	27年4 月1 日～28年3 月31日
	グラーツ大学	オーストリア		27年4 月1 日～27年9 月30日
	中山大学	中国	HUMAP	27年10月1 日～28年3月31日
	ピッツバーグ大学	アメリカ		27年10月1 日～28年9 月30日
	西オーストラリア大学	オーストラリア		27年10月1 日～28年3月31日
	グラーツ大学	オーストラリア	JASSO	27年10月1 日～28年9 月30日
	SOAS	英国	JASSO	27年10月1 日～28年9 月30日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	27年10月1 日～28年9 月30日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	27年10月1 日～28年9 月30日

※HUMAP：兵庫・アジア太平洋大学間交流ネットワーク、JASSO：日本学生支援機構、JENESYS 日韓文化交流基金

《資料17：交換留学（派遣）実績》

年度	派遣大学名	派遣国	奨学金	期 間
平成 22年度	グラーツ大学	オーストラリア	JASSO	22年9 月3 日～23年7 月1 日
	カレル大学	チェコ	神戸大学基金	22年9 月29日～23年7 月1 日
	パリ第10大学	フランス		22年9 月6 日～23年7 月10日
平成 23年度	パリ第10大学	フランス		23年9 月1 日～24年2 月1 日
平成 24年度	ワシントン大学	アメリカ合衆国	神戸大学基金	24年9 月11日～25年6 月7 日
	オックスフォード大学	連合王国	神戸大学基金	24年7 月25日～25年3 月21日
平成 25年度	ハンブルク大学	ドイツ		25年8 月1 日～26年7 月31日
	ワシントン大学	アメリカ合衆国	JASSO	25年9 月25日～26年6 月14日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	25年9 月1 日～26年6 月30日
	グラーツ大学	オーストリア	JASSO	25年9 月5 日～26年7 月5 日
平成 26年度	バーミンガム大学	連合王国	JASSO	26年9 月22日～26年12月12日
	パリ第10大学	フランス	JASSO	26年9 月4 日～27年7 月10日
	ワシントン大学	アメリカ合衆国	JASSO	26年9 月24日～27年6 月12日

	SOAS	連合王国	JASSO	26年7月28日～27年6月12日
	西オーストラリア大学	オーストラリア	JASSO	26年2月23日～27年11月21日
平成 27年度	ハンブルク大学	ドイツ	JASSO	27年10月1日～28年9月30日
	バーミンガム大学	英国	JASSO	27年9月21日～28年6月17日
	ヴェネツィア大学	イタリア	JASSO	27年9月7日～28年6月18日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	27年9月1日～28年6月30日
	グラーツ大学	オーストリア	JASSO	27年10月1日～28年7月1日
	ピッツバーグ大学	アメリカ	JASSO	27年8月31日～28年12月19日
	SOAS	イギリス	JASSO	27年7月27日～28年6月10日
	復旦大学	中国		28年2月26日～29年1月13日

3. グローバル教育への取り組み

平成20年度からは、語学科目以外に全てを英語で行なう授業科目を開講し、アカデミックかつ実践的な英語能力の涵養を目指している。具体的には、英米文学及び言語学関係の外国人教員による授業（「比較現代日本文化論特殊研究」「アカデミック・ライティング」等）を平成23年度から継続的に行なっている。また、社会学分野では平成24年度から、英語による専門授業を開講している。語学学習への多様な支援としては、平成24年度から本学部の全学年に TOEFL itp の無料受験を実現し、海外留学や国際交流への意識向上を図っている。また、英語のスキル向上のために、希望者には「英語アフタースクール」を実施し、能力や志向に応じた細やかな語学学習が可能となっている。

文学部では、神戸オックスフォード日本学プログラムなどによって、国際的な場で活躍できる学生を育成してきたが、平成24年度文部科学省「グローバル人材育成推進事業（タイプ B 特色型）」に採択された「問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成」プログラム（平成26年度より「スーパーグローバル大学等事業 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に名称変更）に基づき、「グローバル人文学プログラム」を実施してグローバル教育を積極的に推進している。人文学をグローバルな視点で学ぶことにより、高度な国際感覚を育成するための外国語授業科目群（グローバル人文学科目群）、そしてオックスフォード大学ハートフォード・カレッジにおける3週間の短期留学プログラムである「オックスフォード夏季プログラム」など、グローバル社会で活躍できる優れた外国語能力とコミュニケーション能力を育成するための授業科目群（グローバル対話力育成科目群）からなる「グローバル人文学プログラム」を実施している。このプログラムは、すべて外国語で授業が行われており、所定の単位を取得し、「外国語力スタンダード」（TOEFL 等の外国語試験における所定のスコア）を達成した者には、修了時に「グローバル人文学プログラム修了証」を授与している。その結果、本プログラムが目的として掲げる「人文学的課題をグローバルな視点から考察し、日本文化の深い理解を基に異文化との対話を重ねながら、現代社会における諸問題を解決に導いていくリーダーシップとコミュニケーション能力を持った人材」が育ちつつある。（「グローバル人材育成推進事業」については、「第2部 2-2. グローバル人材育成推進事業」78-80頁を参照。）

4. 地域との連携による新たな教育研究の開発

地域歴史遺産の活用を図る地域リーダーの養成を目的とした「地域歴史遺産保全活用基礎論 A・B」「地域歴史遺産保全活用演習 A・B」を文学部専門科目として開講し、史料の保全と活用を通じて、地域との有機的な交流がなされている。なお、この事業は、平成22～24年度の間、文部科学省より特別経費（特別研究プロジェクト事業「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」）を受けながら推進された。

I-4. 教育方法

I-4-1. 授業形態の組合せと学習指導法上の工夫

授業形態は、主として講義・演習からなり、平成27年度の開講科目数は講義科目が215（約46%）、演習・実習科目等が249（約54%）となっており、おおむね例年並みである《資料18》。

演習科目が多いのは、人文学の学問の根幹をなす文献読解能力、資料調査分析能力、表現力の鍛錬に重点を置き、研究の集大成として卒業論文を重視する、文学部の教育目的に沿う措置による。演習の質は学生の研究報告によって担保される。そのため、文学部では1年次生を対象とする各講座の入門講義によって人文学の全体像を俯瞰させるとともに、各専修が人文学導入演習や人文学基礎の少人数教育を開講することによって、人文学の研究手法や調査技法について丁寧に訓練を行い、専門教育への円滑な導入を図っている。演習の授業は同時に研究倫理教育の実践的な場でもあり、盗用などの研究不正について各専修で適切な指導が行われている。

平成27年度は、25の講義、78の演習、10の実習科目に対してティーチング・アシスタント（TA）を配置し、授業運営の補助や受講者のための事前学習・事後学習のフォローを適宜行わせ、少人数教育の一助としている《資料19》。TA に対しては各学期始めにガイダンスを行い、TA ハンドブック等による指導をしている。また業務終了後には実施報告書を提出してもらい、その分析・検討及びTA に対するフィードバックを行っている。

《資料18：平成27年度の授業形態》

授業形態	講義	演習	実習	実技	研究指導
授業数	215	238	7	2	2

《資料19：平成22～27年度の TA の配置状況》

授業形態	TA 配置人数					
	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
講義	44	38	36	32	34	25
演習	87	83	83	59	53	78
実習	5	5	9	9	13	10
実技	0	0	0	0	0	0

教育を展開する上での指導法の工夫として、本学部ではフィールド型授業も重視している。「地域

歴史遺産保全活用演習 B」では、事前指導で古文書・絵図等の取扱いを学んだ後、実際の地域歴史遺産資料を用いた実習を行うことで、地域遺産の保全と活用に関する実践的な知識・技能を得ることを目指している《資料20》。

《資料20：「地域歴史遺産保全活用演習 B」シラバス》

開講科目名	地域歴史遺産保全活用演習 B		
担当教員	奥村 弘	開講区分	単位数
		後期	2.0単位
授業のテーマと到達目標			
地域歴史遺産のうち、とくに古文書・絵図等の地域史料に直接触れ、その解読と整理、さらにその指導方法について学ぶ。これを通じて受講生が、今後、それぞれの職場や居住地などにおいて、地域遺産の保全と 活用に関する実践的・応用的な知識・技能を得られるよう努力する。			
授業の概要と計画			
2月中下旬に、まず学内で事前指導をおこない、その後に合宿形式で集中的に古文書の取り扱い方について実習する(学外、1泊2日予定)。 事前指導と合宿の日取り等の詳細については、後日掲示板にて発表するので注意しておくこと。なお、合宿経費・交通費等はすべて受講生負担となるので、受講を希望する学生はその旨を了解しておくこと。			
成績評価と基準			
出席点と合宿後のレポートによる。事前指導と合宿日程すべてに参加しなければ、単位取得は認めないので注意すること。			
履修上の注意(準備学習・復習、関連科目情報等を含む)			
受講生は、古文書の読解と整理についての基礎的な技能を身に付けていることが望ましく、その上に立ってそれらの指導方法を学ぶように努めてほしい。			
オフィスアワー・連絡先			
人文学研究科A棟315研究室 月曜12:30-13:20			
学生へのメッセージ			
地域歴史遺産の専門的素養を身につけるべく努力して下さい。			
今年度の工夫			
教科書			
指定しません。			
参考書・参考資料等			
授業中に適宜紹介します。			
授業における使用言語			
日本語			
キーワード			
日本史 古文書 古地図 地域歴史遺産			

また、「グローバル・アクティヴ・ラーニング」として、他大学の学生らと共に学外のワークショップに参加し、より開かれた場での討論に参加し、公開成果発表会でプレゼンテーションを行うことで、受講生にさらに積極的な学びの場を提供している《資料21》。

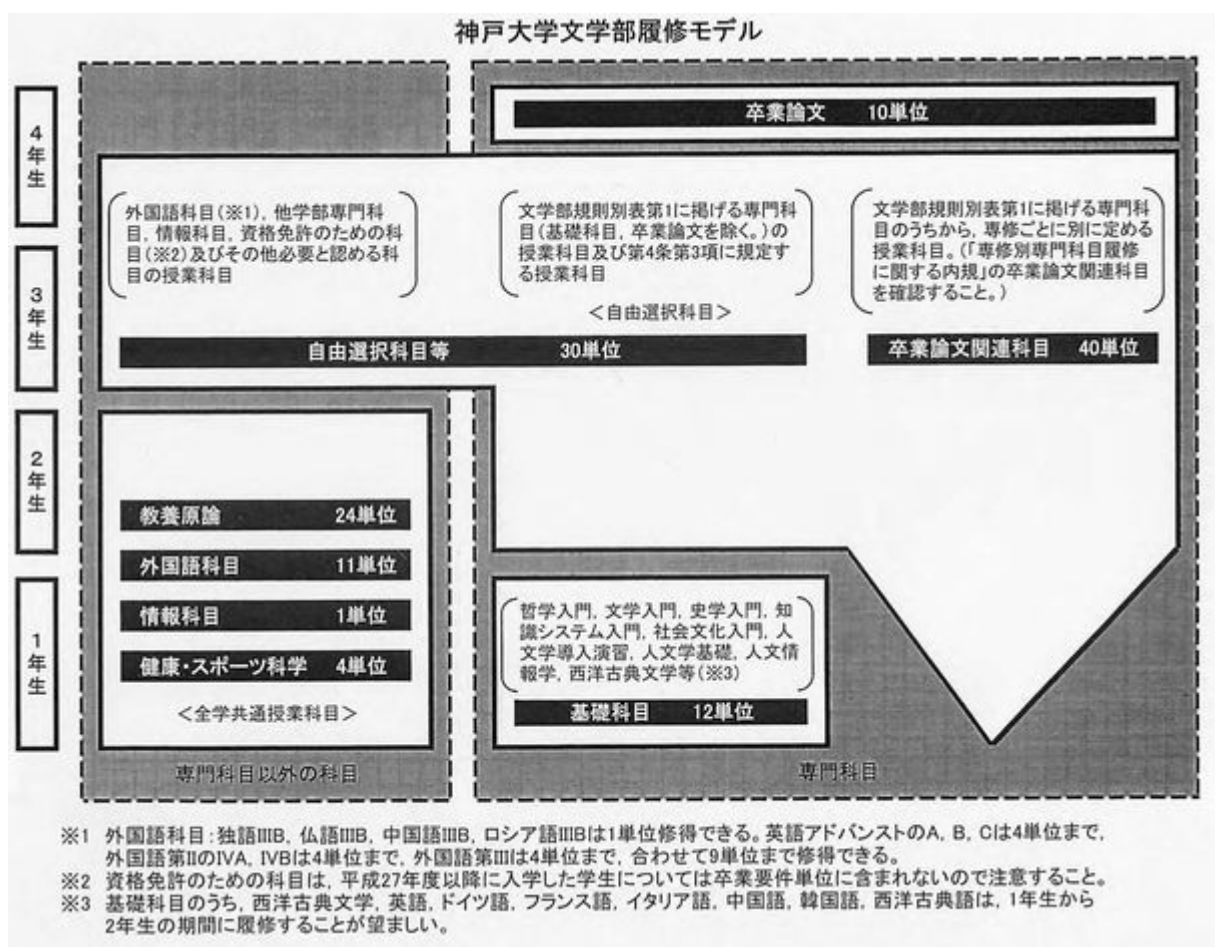
《資料21：「グローバル・アクティヴ・ラーニング」シラバス》

開講科目名	グローバル・アクティヴ・ラーニング【GH】（グローバル専門科目）		
担当教員	山本 秀行、嘉指 信雄、増本 浩子	開講区分	単位数
		後期	1.0単位
授業のテーマと到達目標			
「ヒロシマから考える戦争と平和―被爆70周年に際して」 被爆70周年に際して広島で開かれる会議・ワークショップに、留学生や現地大学生とともに参加し、核問題を中心とした「戦争と平和」をめぐる諸問題に関する理解を深めるとともに、自らの考えを日本語と英語で表現し、議論する力を伸ばす。			
授業の概要と計画			
・11月上旬〜中旬：3コマ程度の事前学習を行い、「戦争と平和」、とりわけ核問題に関する基礎的な事項及び英語表現を学習する。（開催日時は、別途指示する。） ・広島での集中セッションは、11月20日（金）21（土）22日（日）に開催する。（高速バスで金曜日の午後出発し、日曜日の夜、神戸に戻る予定。） 21日は、広島国際会議場で開催される「世界核被害者フォーラム」を聴講し、その後、現地大学生も交えたワークショップに参加し、意見交換する。 ・12月上旬、神戸大学文学部において開く公開成果発表会において、グループまたは個人でプレゼンテーションを行う。			
成績評価と基準			
出席点の他、プレゼンテーションの点数を総合的に判断する。			
履修上の注意（準備学習・復習、関連科目情報等を含む）			
・人社系6学部および人文学研究科・経済学研究科博士前期課程の学生を対象とする。ただし、留学生の受講は不可。 ・広島でのワークショップ参加に必要な費用（往復の高速バス8,000円、宿泊費用一泊約3,000円、食費など）は自己負担。			
オフィスアワー・連絡先			
By appointment. 連絡先／嘉指：nkazashi(at)gmail.com			
学生へのメッセージ			
具体的な問題場面へのエクスポージャーを通じた「アクティヴ・ラーニング」の貴重な機会を積極的に活かしてほしい。			
今年度の工夫			
被爆70周年記念「世界核被害者フォーラム」に参加し、グローバル・ヒバクシャの実態を学ぶ。			
教科書			
特になし。参考テキストなど、適時指示する。			
参考書・参考資料等			
『新・平和学の現在』（2009）／岡本三夫・横山正樹編：,ISBN: 『ヒロシマ』（増補新版、2014）／ジョン・ハーシー：,ISBN: 『ヒロシマ・モナムール』（新訳、2014）／マルグリット・デュラス：,ISBN: 『トラウマへの探究―証言の不可能性と可能性』（2005）／キャシー・カルース：,ISBN:			
授業における使用言語			
日本語及び英語			
キーワード			
戦争、平和、核問題、ヒロシマ、ナガサキ			

シラバスは、すべてウェブサイト上に公開しており、学習の便宜を図っている《16頁の資料20、17頁の資料21》。

「履修要項」には履修モデルを提示しているが、平成27年度版の履修要項には最新のモデルを提示した《資料22》。加えて、入学時、1年次の後期開始時、専修配属決定後の12月に合計3回のガイダンスを行うことによって、学生が適切な履修計画を立てられるように配慮している。単位が不足する学生等に対してはこれまでも各教員・各専修で適切に対応してきたが、教務学生係及び教務委員と連携してより手厚い就学指導を行うことのできる体制を平成27年度に整えた。

《資料22：文学部履修モデル》



ハラスメント対策として、専修配属が決定した2年生に対して毎年、「ハラスメントセミナー」を開催している。

I-4-2. 主体的な学習を促す取組

自主学習を促すために、《資料23》のように制度面・環境面の整備を行ってきた。例えば、学生が授業時間以外にも教員から勉学上の指導を受けることができるように、オフィスアワーが各教員のシラバスに明記され、周知が図られている《16頁の資料20、17頁の資料21》。また、本学部同窓会がレポートコンテストにより「文窓賞」を授与し、勉学や課外活動に対する意欲の向上を図って

いる。平成25年には、人文科学図書館に神戸大学では初のラーニングコモンズが設置され、グループ学習、外国人教員との自由な英語会話、協働作業を中心とした新しいタイプの授業などで活用されている。

《資料23：制度面および環境面での整備項目》

項 目	内 容
制 度 面	オフィスアワー 学生は授業時間以外にも教員から勉学上の指導を受けることが容易である。オフィスアワーは平成20年度からはシラバスに記入され、周知されている。また、外国人教員による英語を主としたオフィスアワーを週4日（月、火、水、金）ラーニングコモンズにおいて開催し、留学等について相談したり、外国語能力向上のためのアドバイスを気軽に受けることができるようにしている。
	キャップ制の免除 単位の実質化を図るためにキャップ制（1年間に履修できる単位数の上限：文学部は54単位）を設けるとともに、さらに学生の学習意欲を高めるために、成績優秀な学生に対しては、キャップ制の適応を免除する優遇措置を与えている。
	表彰制度 平成19年度から本学部同窓会がレポートコンテストにより「文窓賞」を授与している。
環 境 面	図書館 （日本文化資料コーナー） 文学部の人文科学図書館は書籍約30万冊を有し、毎年確実に蔵書数を増やしている。授業期間中は、平日（8時45分～20時）および土曜日（10～18時）、試験期間中は、平日の夜間（21時まで）および日祝日も開館している（10～18時）。 「日本文化資料コーナー」を設けて資料、貴重図書、レファランス類を集中的に配架し、複数の辞書類・資料を同時に縦覧する必要がある歴史・文学系等の学生の利便を図っている。可能な限り具体的な活用状況を入れる。
	学生用共同研究室 学生が個人あるいはグループで調査・研究するために使用できる「共同研究室」を教育研究分野ごとに設置し、学生の自主学習へ配慮している。共同研究室には辞書や専門書等も整備されており、学生はここで授業の予習や復習、研究発表のための資料作成などを行うことができる。
	コモンルーム 学生がグループ学習や研究会などのために自由に使用することのできる「コモンルーム」を3カ所設置し、学生の自主学習へ配慮している。ホワイトボードを使つての議論の場として活用したり、研究発表や面接の練習などさまざまな形で使われている。
	共同談話室 教員と学生が共同研究、読書会など行うために使用することができる「共同談話室」を5カ所設置し、自由な共同学習や演習等の授業に活用している。各種の読書会、研究会の会合などが活発に行われている。
	情報機器 学生が利用できるパーソナル・コンピューターを「情報処理室」（平成22年度 B 棟に移転・拡充）に48台、人文科学図書館に18台を設置するとともに、各専修の共同研究室や実験室などにも適宜配置している。可能な限り具体的な活用状況を入れる。
	教育機器 視聴覚機材を平成21～23年度 B 棟に、平成24年度 C 棟に設置し、ほとんどの教室で視聴覚機材（プロジェクター、スクリーン、DVD など）を使った授業ができるようになった。パワーポイントを用いた授業も多くなされている他、インターネットに繋いでパソコンによる具体的な資料検索・資料収集の方法を実践してみせたりすることも可能である。
	ラーニングコモンズ 自由に机と椅子を組み合わせ、図書館資料を自由に使用し、グループで話し合いながら学習を進めることができるスペースとして、「ラーニングコモンズ」が人文科学図書館に設置された。他学部にも広く開かれた文学部のラーニングコモンズは、平成25年度の運用開始以来、アクティブラーニングや演習、自主学習、グループ学習、留学報告会等、さまざまな形で活用され、大きな学習成果を挙げている《資料22》

I-5. 学業の成果

I-5-1. 学生が身に付けた学力や資質・能力

最近5年間の本学部学生の卒業状況は、《資料24》のとおりである。本学部学生の卒業率（入学
者総数に対する既卒業者の比率）は平成19年度入学者以降、平均92.1%という良好な数字を保って
いる。また、標準修業年限で卒業した学生（4年間で卒業した学生）の比率も平成19年度入学者以
降、平均79%以上の数字を維持し、4分の3以上の学部生が、4年間で卒業している。なお、学部
生の場合、卒業以前に留年・休学して海外留学を経験する者も多い。また、卒業論文は文学部にお
ける学びの集大成となるものだが、平成27年度卒業生が提出した卒業論文の題目一覧は《資料25》
に揚げたとおりである。

《資料24：修業年限内の卒業率 平成27年3月現在》

入学年度 (標準修業年度)	入学者総数 (a)	既卒業者数 (b)	既卒業率 (b/a)	標準年限内 卒業生数 (c)	標準年限内 卒業率 (c/a)
平成19年(平成22年)	123	118	95.9%	94	76.4%
平成20年(平成23年)	120	115	95.8%	88	73.3%
平成21年(平成24年)	120	111	92.5%	89	74.2%
平成22年(平成25年)	121	99	81.8%	99	81.8%
平成23年(平成26年)	117	113	96.6%	99	84.6%
平成24年(平成27年)	119	107	89.9%	103	86.6%

《資料25：平成28年3月卒業生の卒業論文題目一覧表》

専 修	論文題目
哲学	音楽と表現
哲学	日本の道徳教育再考ー ジョン・ロールズとマイケル・サンデルの正義論の立場からー
哲学	母子関係をめぐってー ウィニコット再考ー
哲学	差別と社会的カテゴリーー シュッツ、ゴッフマン、アーレントを中心にー
哲学	デイヴィッドソンの言語観についてー 個人言語の優先性の観点からー
哲学	「脳死者」との関係性の諸相ー 「脳死」無き臓器摘出の正当化は可能かー
哲学	プラトン『パルメニデス』における第三人間論をめぐって
哲学	プラトンとアリストテレスの感情論ー 感情教育をめぐってー
国文学	中島敦におけるオノマトペ
国文学	日本語動詞の連用形転成名詞に関する考察
国文学	大岡昇平『野火』論ー 『武蔵野夫人』を比較対象としてー
国文学	『心学早染草』論
国文学	源氏物語に関する考察
国文学	日野啓三『夢の島』論ー 時間設定と空間のリンクー
国文学	江戸の怪談に関する一考察
国文学	開高健『輝ける闇』ー 開高文学におけるタブーの解禁ー
国文学	日本語における漢語の受容についてー 「一切」を対象にー
国文学	中世における縁起についての研究

国文学	現代日本語の敬語使用に関する考察
国文学	徳田秋声「あらくれ」論
国文学	家庭はなぜ崩壊しないのか ― 庄野潤三「夕べの雲」論 ―
国文学	現代日本語における格助詞「に」のはたらき
国文学	坂口安吾研究 ― 「白痴」における「ふるさと」 ―
国文学	源氏物語論
国文学	東北で使用されているあいづち「だから」について
中国文学	謝靈運詩についての一考察 ― 「風景」を中心にして ―
中国文学	二十世紀中国文学テキストにおける音楽についての一考察―白先勇『遊園驚夢』を中心に―
中国文学	第二次世界大戦における台湾先住民の思想・生き方についての研究―鍾肇政《馬黒坡風雲》が伝える「霧社事件」と「女性」たち―
中国文学	魯迅作品における色彩表現の効果に関する研究― 魯迅の「赤」イメージ―
英米文学	Tim O' Brien, <i>The Things They Carried</i> におけるトラウマとナラティブ
英米文学	Toni Morrison 研究
英米文学	ジェーン・オースティン『マンスフィールドパーク』―ノリス夫人の人物像に込められた意図―
英米文学	J. D. Salinger 研究
英米文学	A Study of <i>Nights at the Circus</i> : Angela Carter's Utopia for Women
英米文学	A Study on <i>To the Lighthouse</i> : Lily's Picture and Feelings
英米文学	「アルジャーノンに花束を」におけるトレードオフの関係
英米文学	<i>The Great Gatsby</i> 研究
英米文学	James Joyce の <i>Dubliners</i> 研究 ― 教養がもつ意味やイメージについて
英米文学	シェイクスピア『真夏の夜の夢』の翻案映画研究―『さんかく山のマジルー』における書き換え―
英米文学	Civilised and Uncivilised : Colonialism in <i>Little Dorrit</i>
英米文学	『エマ』における喜劇性と悲劇性について
英米文学	トルーマン・カポーティ「ティファニーで朝食を」研究
英米文学	J. D. サリンジャー研究
英米文学	Ford Madox Ford の <i>The Good Soldier</i> について
英米文学	宝塚歌劇版『ロミオとジュリエット』の分析
ドイツ文学	物語の力あるいは記憶の継承―アーダルベルト・シュティフターの『石さまさま』について
ドイツ文学	ケストナーのユーモアの精神―『ほらふき男爵の冒険』について―
ドイツ文学	ミヒャエル・エンデ『モモ』が読者にもたらす「意識の変化」
フランス文学	アンリ・ド・レニエ研究 ― レニエ作品における「二重」について
フランス文学	マルグリット・デュラス研究 ― 語りと欲望について
日本史学	「昭和の大合併」における非合併自治体の研究―兵庫県加古郡阿閩村を事例に―
日本史学	享保期江戸における出版統制体制の確立
日本史学	明治三十年代奈良県による神苑構想についての一考察―― 敵火神苑会の成立と展開 ―
日本史学	一八八〇年代前半における海軍軍拡計画の一考察 ―海軍卿川村純義を中心に
日本史学	奈良坂・清水坂両宿非人抗争の再検討
日本史学	維新时期における草莽 ―多田隊を事例に―

日本史学	天保四年加古川筋の騒動に関する一考察
日本史学	大正期の朝鮮総督府官制改正に関する一考察―― 三・一独立運動と憲兵警察制度の評価をめぐって――
日本史学	一九三〇年代前半の日本における対ソ政策形成過程―北満鉄道譲渡交渉をめぐる外務省と陸軍―
日本史学	明治初期における地方学習結社に関する一考察―京都府北部「天橋義塾」を事例に―
日本史学	近代日本における高等女学校教育に関する一考察―公立名門高等女学校の女学生を事例に―
日本史学	古代出雲における地域社会編成の基礎的研究
東洋史学	13世紀後半におけるルーム・セルジューク朝スルタンの支配の正統性
東洋史学	アブデュルハミト二世期（1876-1908年）におけるミュルキエ校
東洋史学	18世紀-19世紀前半におけるオスマン帝国の遣欧使節
西洋史学	19世紀チェコ女性の活動の考察― チェコ社会との関係性―
西洋史学	19世紀オーストリアにおけるカトリック教会と初等教育
西洋史学	ナチス政権下における美術の弾圧―帝国文化院の経済改革と芸術家を巡る状況―
心理学	物への潜在的評価における choice overload effect の検討
心理学	審美判断に関わる脳内メカニズムについて ― 反復抑制を用いた検討
心理学	化粧の印象に対人志向性が与える影響
心理学	主観的社会的地位による時間割引への影響
心理学	自己罰についての実験的研究
心理学	低頻度経頭蓋交流電気刺激（tACS）が視覚認識に与える影響
心理学	規範の共有性が怒りに与える影響
心理学	社会的注意が親密度に与える影響について
心理学	運動準備中における主観時間の非線形的な歪み
心理学	歩行中の下視野測定実験
言語学	移動を表す擬態語の意味分析
言語学	集合類別詞の用法
言語学	発話行為と引用動詞に関する考察
言語学	日本語の意味分析における動画実験調査の有用性について
言語学	日本語音韻における二重母音の特殊モーラの振る舞いについて
言語学	和語・漢語と外来語をペアに持つ類義語の意味の差異について
言語学	日本語におけるドイツ語由来借用語の長母音受入に関わる制約について
言語学	オノマトペにおける有声・無声の対立
言語学	大阪方言における韻律の変化
芸術学	観覧車の美学
芸術学	初音ミクの魅力を探る
芸術学	ピーター・シェーファー『アマデウス』研究―「凡庸の神」となったサリエリ―
芸術学	『コッペリア』における「人形振り」をめぐる考察
芸術学	映画『ファニーゲーム』における悲劇的結末の変容
芸術学	エンターテインメント化する和太鼓

芸術学	「ぼくとぼく」セカイ系が描く自意識－佐藤友哉の作品分析をとおして
社会学	若者と「沖縄」問題
社会学	地域社会における商店街の役割
社会学	家庭環境が子供の教育に与える影響
社会学	マルチ・エスニックの人々の文化間移動とアイデンティティ形成
社会学	「心の専門家」に関する社会学的考察
社会学	若者のアイデンティティの変容
社会学	構築主義から見たモンスターペアレント問題分析
社会学	クールジャパン・ツーリズムと観光のまなざし
社会学	隔離された高齢者ケア
社会学	アメリカンフットボールの発展と教育
社会学	現代社会におけるテーマパーク的空間の考察
社会学	セクシャル・マイノリティ差別における沈黙効果と当事者性
社会学	神戸市における「個人的エスニック・ビジネス」
社会学	ラジオの受容とその変化について
社会学	「普通」の若者の生きづらさ
社会学	学校における道德教育の在り方
社会学	アニメヒロインの変容と現代女性の生き方
美術史	曾我蕭白研究 ― 群仙図屏風について ―
美術史	ヒエロニムス・ボス研究－《快樂の園》について－
美術史	ゴヤ研究
美術史	長澤蘆雪虎図考－無量時「虎図」襖絵をめぐる－
美術史	春日曼茶羅と神鹿の表現について
美術史	長谷川等伯研究－「松林図屏風」に関する考察－
美術史	ホガース《放蕩息子一代記》の研究
美術史	アングル研究 《グランド・オダリスク》についての考察
地理学	造船企業の立地の変動とそれに伴う地域の変容
地理学	鉄道会社の郊外開発による遊興空間の創出と地域の変容
地理学	温泉地の観光化と交通手段の変容
地理学	飲食業における京都イメージの活用

卒業生の中には、在学中に教育職員免許（中学校教員一種・高等学校教員一種）、学芸員資格、社会調査士資格等を取得する者が多く、その内訳は《資料26》のとおりである。これらのうち、高等学校教員一種の資格取得者が多いのは例年の傾向であるが、平成26年度の40名は、ここ数年では驚異的な数字として注目される。約35%の学生が取得している計算となり、団塊の世代が退職して採用数が増え、採用の道が相対的に広がっていることの反映と言えよう。その意味で平成26年度は、就職に向けた解禁日が遅くなったものの、あくまで経団連所属の大企業への適用のみであり、教育実習期間に中小企業の面接が入るなどで実習辞退者が出るといった影響もみられ、今後に残している。

《資料26：平成22～27年度資格取得者一覧》

年 度	資格取得者数			
	教育職員免許		学芸員資格	社会調査士 資格
	中学校一種	高等学校一種		
平成22年度	21	32	13	2
平成23年度	16	23	9	8
平成24年度	15	19	15	3
平成25年度	22	30	6	1
平成26年度	26	40	16	5
平成27年度	15	28	14	0

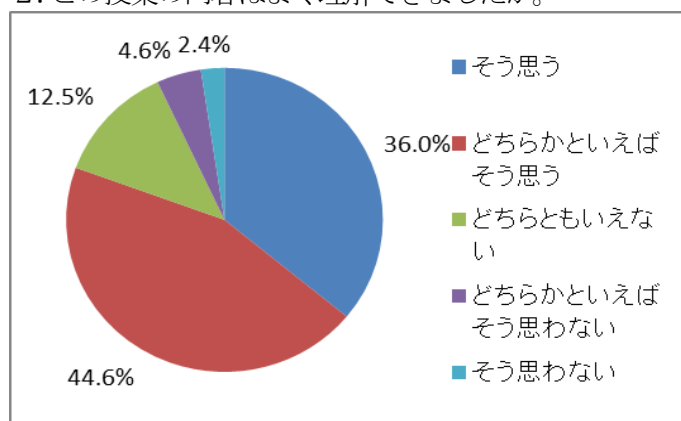
I-5-2. 学業の成果に関する学生の評価

在学生を対象とした「授業振り返りアンケート」平成27年度後期の結果では、教育の成果や効果に関する質問項目の「2. この授業の内容はよく理解できましたか。」「3. シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか。」のうち、2については最上点及び次点の回答者が80.6%、3については最上点及び次点の回答者が64.3%といずれも良好な結果が得られており《資料27》、例年、同様の傾向となっている。

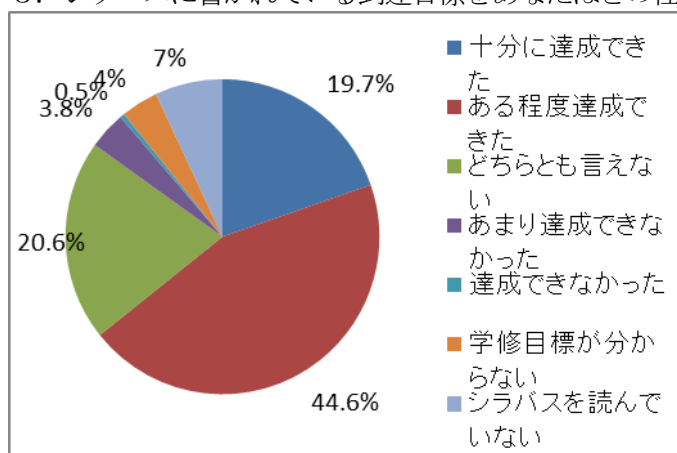
また、平成26年度の卒業時アンケートでは、幅広い教養と深い専門知識の双方で、概ね身についたという回答が得られた。また、課題を設定して解決する能力も身につけていることがわかった。その理由として、各専修における少人数教育や様々な分野の専修における専門知識に触れる機会が与えられていることなどが挙げられた《資料28》。

《資料27：「平成27年度後期授業振り返りアンケート」結果（抜粋）》

2. この授業の内容はよく理解できましたか。

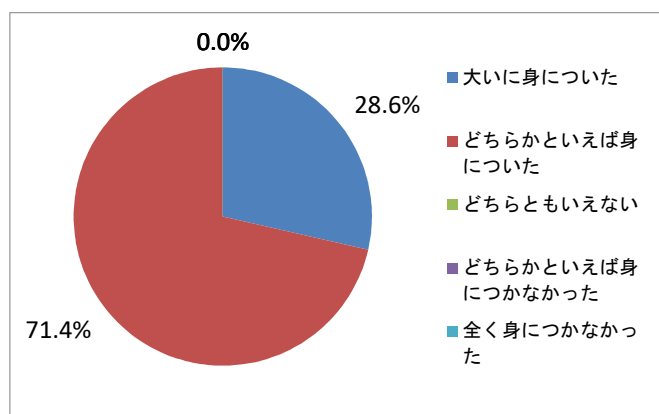


3. シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか

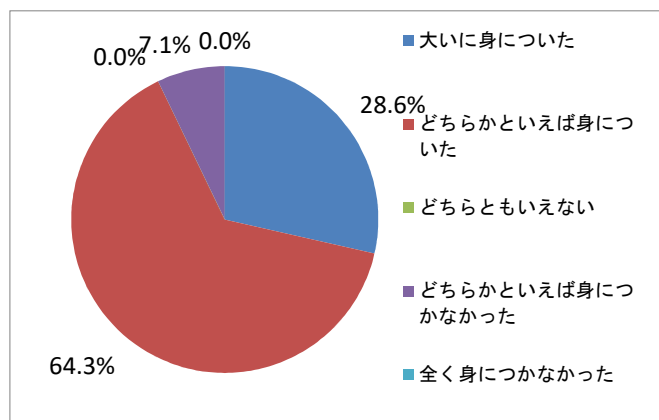


《資料28：「平成26年度文学部卒業時アンケート」結果（抜粋）》

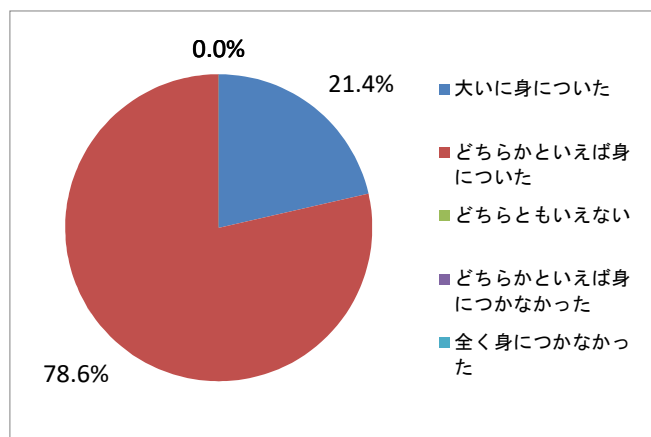
1. 「幅広い教養」について、あなたは4年間の学士課程において、どの程度身についたと思いますか



3. 「深い専門知識・技能」について、あなたは4年間の学士課程において、どの程度身についたと思いますか



11. 「課題を設定し解決していく能力」について、あなたは4年間の学士課程において、どの程度身についたと思いますか



32. 神戸大学で受けた教育に満足している理由

(事例1) 様々な分野の学問に触れることで、幅広い教養及び自己の価値観を養うことができた。
 (事例2) 所属専修が少人数であったため
 (事例3) 高い専門性を備えた教授の講義を生で聴いたり、時には直接指導していただく機会を得られたことで、自分一人では絶対に見つけられなかったであろう考え方や視点へと目を向けることができたから

I-6. 進路・就職の状況

I-6-1. 卒業後の進路の状況

本学部卒業生の就職率及び進学率については、《資料29》のとおりであり、この状況はここ数年安定している。平成22～27年度の本学部における卒業生の進路は、《資料30》のとおりである。教員・公務員・メディア関係など、本学部での教育成果を利用しうる職種のみならず、金融・保険業、製造業、情報・通信業、公務員など、幅広い業種にわたっていることがわかる。

大学院進学者が10～15%という状況は、「専門的知識」を有する人材の育成を目的の一つに掲げている本学部の教育方針に合致しており、同時に社会からの期待にも適ったものと判断できる。また、就職状況は良好であり、本学部の教育が概ね良好な効果を挙げているといえることができる。

《資料29：本学部卒業生の就職率及び進学率》

卒業年度	卒業者数	進学者	就職者	就職希望者	進学率	就職希望者の就職率
平成22年度	117	17	87	100	14.5%	87.0%
平成23年度	120	15	78	105	12.5%	74.3%
平成24年度	117	11	80	106	9.4%	75.5%
平成25年度	131	12	94	119	9.2%	79.0%
平成26年度	113	19	88	95	16.8%	92.6%
平成27年度	121	16	94	105	13.2%	89.5%

《資料30：本学部卒業生の進路状況》

卒業年度	製造業	情報・ 通信産業	卸売・ 小売業	金融・ 保険業	学校教育 ・その他 教育	国家公務 員・地方公 務員	その他の 業種
平成22年度	9	17	9	14	10	16	12
平成23年度	14	12	8	10	12	12	10
平成24年度	9	16	8	12	10	12	13
平成25年度	13	11	12	15	12	11	20
平成26年度	15	10	10	12	18	9	14
平成27年度	11	6	4	21	10	19	23

Ⅱ. 教育（人文学研究科）

Ⅱ-1. 人文学研究科の教育目的と特徴

人文学研究科は、大学院文学研究科（修士課程）及び文化学研究科（独立研究科：後期3年博士課程）の改組・統合により平成19年4月に新たに設置された研究科である。

本研究科は、人文学すなわち人間と文化に関わる学問を扱い、哲学・文学・史学・行動科学などの人文系諸科学の教育を包括している。以下に本研究科の教育目的、組織構成、教育上の特徴及び想定する関係者とその期待について述べる。

Ⅱ-1-1. 教育目的

- 1 人文学研究科は、人類がこれまで蓄積してきた人間及び社会に関する古典的な文献の原理論的研究に関する教育並びにフィールドワークを重視した社会文化の動態的分析に関する教育を行い、新たな社会的規範及び文化の形成に寄与する教育研究を行うことを目的としている。
- 2 このような教育目的を達成するため、現行の中期目標では「教育憲章」に掲げた、「人間性」、「創造性」、「国際性」及び「専門性」を身に付けた個性輝く人材を養成するため、国際的に魅力ある教育を学部・大学院において展開する。また、豊富な研究成果を活かして、社会の変化を先導し、個人と国際社会が進むべき道を切り拓く高度な知識・能力を有する、次世代の研究者をはじめとした多様な人材の養成に努め、教育の更なる高みを目指す」ことを定めている。
- 3 本研究科のディプロマ・ポリシー（DP）およびカリキュラム・ポリシー（CP）はそれぞれ《資料1》、《資料2》のとおりである。これら DP、CP に基づき、本研究科は専攻ごとに、以下のような人材の養成を目指している。文化構造専攻の前期課程では、人文学の基礎的な方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことのできる基礎的能力を備え、人文学を知識基盤社会に活かすことのできる人材を養成し、後期課程では、人文学の高度な研究方法を継承しつつ、新たな社会的規範及び文化の形成に寄与できる能力並びに共同研究を企画し、組織する能力を持つ人材を養成する。社会動態専攻の前期課程では、社会文化の動態的分析の基礎的な能力を備え、人文学を知識基盤社会に活かすことのできる人材を養成し、後期課程では、社会文化の高度な動態的分析能力を備え、新たな社会規範及び文化の形成に寄与できる能力並びに共同研究を企画し、組織する能力を持つ人材を養成する。この目的や人材養成は、現行の中期目標において、「高度な専門的知識を習得させ、個人と社会が進むべき道を切り拓く能力を涵養すること」とされている点を達成することと大いに対応している。

《資料1：人文学研究科ディプロマ・ポリシー（DP）》

博士課程前期課程ディプロマ・ポリシー

神戸大学大学院人文学研究科博士課程前期課程の目標は、人文学の高い専門性を追求すると同時に、総合性を高めることによって、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会に対応する人材を養成することである。

この目標達成に向け、人文学研究科博士課程前期課程では、以下のふたつの方針に従って学位を授与する。

○ 本研究科博士課程前期課程に2年以上在学し、研究科共通科目、選択科目、修士論文指導演習に関してそれぞれ所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文または特定の課題についての研究の成果の審査及び最終試験に合格する。

○ 本研究科博士課程前期課程に在籍する学生が修了までに達成を目指す目標は、次のとおりとする。

〈文化構造専攻〉

- ・人類がこれまで蓄積してきた人間と社会に関する古典的な文献の原理的研究という人文学の基礎的な方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことができる。
- ・研究者としての基礎能力を備えるとともに、人文学を知識基盤社会に生かすことができる。

〈社会動態専攻〉

- ・古典研究を踏まえて、フィールドワークを重視した社会文化の動態的分析能力を持ち、新たな社会的規範や文化の形成に寄与できる。
- ・研究者としての基礎能力を備えるとともに、人文学を知識基盤社会に生かすことができる。

博士課程後期課程ディプロマ・ポリシー

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程の目標は、人文学の高い専門性を追求すると同時に、総合性を高めることによって、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会に対応する人材を養成することである。

この目標達成に向け、人文学研究科博士課程後期課程では、以下のふたつの方針に従って学位を授与する。

○ 本研究科博士課程後期課程に3年以上在学し、研究科共通科目、博士論文指導演習に関してそれぞれ所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査および最終試験に合格する。

○ 本研究科博士課程後期課程に在籍する学生が修了までに達成を目指す目標は、次のとおりとする。

〈文化構造専攻〉

- ・人文学の高い専門性を追求すると同時に、総合性を高めることによって、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会に対応する能力を身につける。
- ・人類がこれまで蓄積してきた人間と社会に関する古典的な文献の現理論的研究という人文学の基礎的な方法を継承しつつ、個々の文化現象の現代的意味を問うことができる。
- ・研究を企画し、組織できる能力を併せ持つ自立した研究者になる。

〈社会動態専攻〉

- ・人文学の高い専門性を追求すると同時に、総合性を高めることによって、人文学の古典的な役割を継承しながら、現代社会に対応する能力を身につける。
- ・古典研究を踏まえて、フィールドワークを重視した社会文化の動態的分析能力を持ち、新たな社会的規範や文化の形成に寄与できる。
- ・研究を企画し、組織できる能力を併せ持つ自立した研究者になる。

《資料2：人文学研究科カリキュラム・ポリシー（CP）》

人文学研究科 カリキュラム・ポリシー

人文学研究科は授業科目を特殊研究、演習、論文指導演習、研究科共通科目で構成する。

①特殊研究は各分野の高度に専門的なテーマについて講義をし、研究の範を示す。

②演習は専門分野の研究に必要なスキルと語学の修得を図るものとして、少人数で展開される。

③論文指導演習は、指導教員による論文作成のための教育研究指導である。

④研究科共通科目は人文学の総合性と社会的意義を自覚させる授業として展開される。

博士課程前期課程では特殊研究と演習を20 単位以上選択履修し、修士論文指導演習8 単位の他に研究科共通科目2 単位以上を必修とする。

博士課程後期課程では、博士論文指導演習8 単位および研究科共通科目2 単位以上を必修とする。

Ⅱ-1-2. 組織構成

これらの目的を実現するため、本研究科では、《資料3》のような組織構成をとっている。

《資料3：組織構成》

専攻	コース	教育研究分野
文化構造	哲学	哲学、倫理学
	文学	国文学（国語学を含む）、中国・韓国文学、英米文学、ヨーロッパ文学
社会動態	史学	日本史学、東洋史学、西洋史学
	知識システム論	心理学、言語学（英語学を含む）、芸術学
	社会文化論	社会学、美術史学、地理学、文化資源論（連携講座：後期課程のみ）

Ⅱ-1-3. 教育上の特徴

- 人文学研究科は、学生が明確な目的意識をもって専門分野の研究を深めるようにするため、一貫性のある明確なプログラムに従って学修・指導を進めている。また、年次ごとのプログラムを明確に定めることにより、後期課程からの編入生も、他大学院の前期課程（修士課程）で学修した成果を本研究科での学修にスムーズに移行できるようにしている。
- 人文学研究科は、次のような指導体制を構築して、学生の研究教育を支援している。①教育研究分野ごとに、各年次で学修する内容を具体的に定め、その修得を学生に徹底している。② 学生1名に対して3名からなる指導教員チームを編成している。また、このチームには必ず他専攻の教員が1名参加し、学生が高い専門性ととともに幅広い学問的視野を獲得できるように配慮している。③学生ごとに履修カルテを作成し、これによって指導教員チームは学生の学修に関する情報を共有している。この履修カルテは、指導プロセスの透明化にも役立てられている。さらに、学修プロセス委員会を設置し、指導方法を常に検証・改善する仕組みをとっている。
- 学域全体における研究の位置付けを見失うことなく、研究の社会的意義に対する省察を行うため、本研究科は、教育プログラムとして研究科共通科目を設定し、これを必修としている。研究科共通科目は本研究科内の共同研究教育組織（海港都市研究センター、地域連携センター、倫理創成プロジェクト、日本文化社会インスティテュート）の支援のもとで実施されている。
- 本研究科は、《資料4》のような文部科学省等の推進する各種の教育改革プログラムに採択されており、これらとの連携のもとで教育改革を積極的に推進してきた。

《資料4：採択されたプログラム一覧》

プログラム名		採択課題名	期間
日本学術振興会	大学院教育改革プログラム	古典力と対話力を核とする人文学教育—学域横断的教育システムに基づくフュージョンプログラムの開発	平成20～22年度
日本学術振興会	若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム	東アジアの共生社会構築のための多極的教育研究プログラム	平成20～24年度
日本学術振興会	組織的な若手研究者等海外派遣プログラム	国際連携プラットフォームによる東アジアの未来を担う若手人文研究者等の育成	平成21～24年度

文部科学省	国際共同に基づく日本研究推進事業	日本サブカルチャー研究の世界的展開	平成22～24年度
文部科学省	グローバル人材育成推進事業（タイプB 特色型）※1	問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成 ※2	平成24～28年度
日本学術振興会	頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム※3	国際共同による日本研究の革新－海外の日本研究機関との連携による若手研究者養成	平成25～27年度

※1 平成26年度より、「スーパーグローバル大学等事業 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に改称。

※2 国際文化学部を代表部局とし、文学部・人文学研究科、発達科学部、法学部、経済学部・経済学研究科、経営学部の共同のプログラムを推進してきた。

※3 平成26年度より、「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」に改称。

II-2. 教育の実施体制

II-2-1. 基本的組織の編成

本研究科は、上記（28-29頁）の教育目的を達成するため、前期課程（修士課程）、後期課程（博士課程）ともに一貫性のある明確なプログラムの下に文化構造専攻と社会動態専攻の二つの専攻を設けている。各専攻は哲学、文学（以上、文化構造専攻）、史学、知識システム論、社会文化論（以上、文化動態専攻）のコースに分かれている。後期課程社会動態専攻に奈良国立博物館及び大和文華館との連携講座（文化資源論）を置いている《30頁の資料3》。

教員の配置状況は、《資料5》および《資料6》のとおりである。授業の根幹をなす演習と研究指導及び研究科共通科目の授業は、いずれも専任教員が担当している。専任教員の多くは博士号を有している。また、入学定員が前期課程50名（平成27年度より44名）、後期課程20名であるのに対し、専任教員は60名であり、質量ともに必要な教員が確保されている。

《資料5：教員の配置状況 平成27年5月1日現在》

専攻	課程	収容 定員	専任教員数（現員）											助手		非常勤 教員数	
			教授		准教授		講師		助教		計						
			男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	総計	男	女	男	女
文化 構造	前期	37	13	2	8	4	1	0	0	0	22	6	28	0	0	3	1
	後期	24															
社会 動態	前期	57	14		13	6	0	0	0	1	27	7	34	0	0	9	1
	後期	36															

《資料6：教育研究分野別教員現員数 平成27年5月1日現在》

教育研究分野	教授	准教授	講師	教育研究分野	教授	准教授	講師	教育研究分野	教授	准教授	講師
哲学	1	3	0	ヨーロッパ文学	3	1	1	言語学	3	1	0
倫理学	1	1	0	日本史学	2	2	0	芸術学	1	0	0
国文学	5	3	0	東洋史学	1	3	0	社会学	3	3	0
中国・韓国文学	3	1	0	西洋史学	1	3	0	美術史学	1	1	0

英米文学	2	3	0	心理学	1	4	0	地理学	1	3	0
------	---	---	---	-----	---	---	---	-----	---	---	---

※特任教員、兼務教員を含み、文化資源論 教授1名、准教授1名を除く。

入学者の選抜については、全学及び人文学研究科として求める学生像（アドミッション・ポリシー）を定め《資料7》、これに基づき、前期課程における一般学生、外国人特別学生を対象とするⅠ期およびⅡ期、並びに特別入試（平成26年度より導入）、後期課程における一般学生、外国人特別学生を対象とする入試など多様な選抜を実施している。

学生定員と現員の状況については、《資料8》、及び教育研究分野別の学生数（平成27年度）の《資料9》のとおりである。

《資料7：求める学生像（アドミッション・ポリシー）》

神戸大学が求める学生像 神戸大学は、世界に開かれた国際都市神戸に立地する大学として、国際的で先端的な研究・教育の拠点になることを目指しています。 これまで人類が築いてきた学問を継承するとともに、不断の努力を傾注して新しい知を創造し、人類社会の発展に貢献しようとする次のような学生を求めています。 1. 進取の気性に富み、人間と自然を愛する学生 2. 旺盛な学習意欲をもち、新しい課題に積極的に取り組もうとする学生 3. 常に視野を広め、主体的に考える姿勢をもった学生 4. コミュニケーション能力を高め、異なる考え方や文化を尊重する学生
人文学研究科が求める学生像 大学院博士課程前期課程 人文学研究科は博士課程前期課程に次のような学生を求めています。 ●人文学諸分野に関心を持ち、既成の価値観にとらわれることなく、自分で問題を発見し、追究していく情熱を持っている人。 ●自ら選んだ専門分野の研究を深め、その学術的展開を志す人。 ●社会の一員としての自覚を持って、自らの学術研究を社会との係わりで展開していく意欲を持っている人。 大学院博士課程後期課程 人文学研究科は博士課程後期課程に次のような学生を求めています。 ●人文学諸分野に関心を持ち、既成の価値観にとらわれることなく、自分で問題を発見し、追究していく情熱を持っている人。 ●自ら選んだ専門分野の研究を深め、その学術的展開を行って研究者を志す人。 ●研究者としての自覚をそなえ、自らの学術研究を学際的かつ国際的な幅広い視野のなかで展開していく意欲を持っている人。

《資料8：学生定員（収容定員）と現員の状況 各年5月1日現在》

人文学研究科博士課程前期課程

専攻	年度	収容定員	現員	定員充足率 (年)	定員充足率 (中期)
文化構造	平成22年度	40	48	120%	116%
	平成23年度	40	55	138%	
	平成24年度	40	49	123%	
	平成25年度	40	41	103%	
	平成26年度	40	38	95%	
	平成27年度	37	44	119%	

社会動態	平成22年度	60	70	117%	111%
	平成23年度	60	64	107%	
	平成24年度	60	65	108%	
	平成25年度	60	67	112%	
	平成26年度	60	58	97%	
	平成27年度	57	72	126%	

※平成27年度より、入学定員が、文化構造専攻は20名から17名、社会動態専攻は30名から27名に変更となった。

人文学研究科博士後期課程

専攻	年度	収容定員	現員	定員充足率 (年)	定員充足率 (中期)
文化構造	平成22年度	24	30	125%	116%
	平成23年度	24	33	138%	
	平成24年度	24	24	100%	
	平成25年度	24	24	100%	
	平成26年度	24	26	108%	
	平成27年度	24	30	125%	
社会動態	平成22年度	36	58	161%	161%
	平成23年度	36	60	167%	
	平成24年度	36	60	167%	
	平成25年度	36	55	153%	
	平成26年度	36	56	156%	
	平成27年度	36	58	161%	

《資料9：教育研究分野別の学生数 平成27年4月1日現在》

人文学研究科

専攻	博士課程前期課程		博士課程後期課程	
	教育研究分野	学生数	教育研究分野	学生数
文化構造	哲学	2	哲学	6
	倫理学	6	倫理学	6
	国文学	20	国文学	7
	中国・韓国文学	2	中国・韓国文学	5
	英米文学	7	英米文学	2
	ヨーロッパ文学	7	ヨーロッパ文学	4
社会動態	日本史学	15	日本史学	12
	東洋史学	2	東洋史学	1
	西洋史学	7	西洋史学	4
	心理学	7	心理学	5
	言語学	10	言語学	7
	芸術学	4	芸術学	4
	社会学	12	社会学	8
	美術史学	12	美術史学	12

	地理学	3	地理学	2
			文化資源論	3
	合計	116	合計	88

Ⅱ-2-2. 教育内容、教育方法の改善に向けた取組み

人文学研究科評価委員会は、授業評価アンケートの実施など、教育に関わる評価作業を行うとともに、教員の教育方法および技術の向上を図るためにファカルティ・ディベロップメント（FD）を開催している。人文学研究科のFDは、評価委員会が中心となり実施している。学生による授業評価アンケート、教員相互の授業参観・評価（ピアレビュー）を定期的に行い、その結果は、FDにおいて報告され、カリキュラム編成や授業方法の改善に活用され、中期目標の実現に向けた教育課程の改善が図られている《資料10》。さらに、毎年度、評価報告書を作成し、独自に外部評価を受けて、FDの達成点と改善点を的確に把握し、それを教員・職員間で共有している《資料11》。

こうした活動が個々の科目の授業内容に反映されることはもちろん、カリキュラム構成や授業方法等の改善も頻繁に行っており、たとえば、人文学に必須の古典力を強化することやグローバル人材を育成することなどを目的として、前期課程の研究科共通科目の充実を行った《資料12》。

《資料10：平成26・27年度のFD実施状況》

開催日	テーマ	参加者数
平成26年1月15日	グローバルFD講演会「イタリアにおける日本語教育の組織と実践」	30
平成26年6月25日	FD懇談会「「ミッションの再定義」をどう読むか」	45
平成26年7月23日	FD講演会「LMSの紹介—ICTを用いた授業の支援」	45
平成26年11月26日	グローバルFD講演会「Facts and Fictions: On New Education in Poland」	46
平成27年2月18日	FD講演会「本学の教育改革について」	53
平成27年3月6日	FD講演会「平成26年度ピアレビュー結果の検討」	44
平成27年7月22日	神戸大学学修管理システム(BEEF)について	54
平成27年9月2日	初年次セミナー・アクティブラーニングに関するFD	47
平成28年1月13日	FD講演会「教員評価について」	41
平成28年1月27日	グローバルFD講演会「This, That, or the Other? On Japanese Studies in Romania」	49
平成28年2月2日	グローバルFD講演会「ヤゲウォ大学における国際化戦略」	41
平成28年2月17日	障害者差別解消法と来年度からの神戸大学の体制について	46
平成28年3月7日	平成27年度ピアレビュー結果の検討及び授業評価アンケートの結果について	53

《資料11：平成22～27年の外部評価実施状況》

実施日	外部評価委員
平成22年5月14日	井上健（東京大学教授）、柳教烈（韓国海洋大学教授）
平成23年5月18日	小田部胤久（東京大学教授）
平成24年4月27日	山本弘明（名古屋文理大学教授・名古屋大学名誉教授、元名古屋大学文学研究科長）
平成25年7月6日	三角洋一（大正大学特任教授・東京大学名誉教授）

平成26年 6 月28日	深澤克巳（東京大学教授）
平成27年 6 月27日	立花政夫（東京大学名誉教授、元東京大学人文社会系研究科長）

《資料12：平成22年度と平成27年度の人文学研究科博士課程前期課程研究科共通科目の比較》

平成22年度 研究科共通科目	平成27年度 研究科共通科目
海港都市研究交流演習 海港都市研究 地域歴史遺産活用演習 地域歴史遺産活用研究 倫理創成論研究 倫理創成論演習 日本語日本文化教育演習 多文化理解演習 日本語教育研究Ⅰ・Ⅱ 日本語教育内容論Ⅰ・Ⅱ 日本語教育方法論Ⅰ・Ⅱ 日本語研究 日本社会文化演習Ⅰ・Ⅱ	古典力基盤研究 海港都市研究交流演習 海港都市研究 地域歴史遺産活用演習 地域歴史遺産活用研究 倫理創成論研究 倫理創成論演習 日本語日本文化教育演習 多文化理解演習 日本語教育研究Ⅰ・Ⅱ 日本語教育内容論Ⅰ・Ⅱ 日本語教育方法論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 日本語研究 日本社会文化演習Ⅰ・Ⅱ グローバル人文学特殊研究 比較現代日本論特殊研究 比較日本文化産業論特殊研究 グローバル対話力演習Ⅰ・Ⅱ アカデミック・ライティングⅠ・Ⅱ オックスフォード夏季プログラム

Ⅱ-3. 教育内容・方法

Ⅱ-3-1. 教育課程の編成

前期課程の教育課程は、「研究科共通科目」「専門科目」及び「修士論文指導演習」、後期課程の教育課程は、「研究科共通科目」及び「博士論文指導演習」から構成されている。

前期課程・後期課程の研究科共通科目として、古典力・海港都市・地域歴史遺産・倫理創成・日本語日本文化教育等に関わる授業科目を設け、個別の研究や学域を越えた幅広い視野のもとに自らの研究の社会的意義を自覚させるように配慮している。なお、平成24年度の文部科学省グローバル人材育成推進事業への採択を受け、翌年度から実践的な英語能力の育成を目的とする科目を加えた《本頁の資料12》。

前期課程の「専門科目」は、演習と講義形式による特殊研究からなる。科目数は演習科目（「修士論文指導演習」を含む）と特殊研究科目がほぼ同数となっている。人文学における研究の根幹をなす文献読解能力、資料調査分析能力、表現力の養成には演習がふさわしく、前期課程に多くの演習科目が開講されているのはそのためである。修士論文の作成は、これらの演習を受講することで初めて可能となる。後期課程の授業形態は、研究科共通科目・博士論文指導演習ともに演習が基本となる。「修士論文指導演習」および「博士論文指導演習」は、学位論文の作成に特化した演習であり、指導教員3名が、学修カルテ《資料13》を参照しながら、連携して指導に当たる

《資料13：学修カルテ（博士課程前期課程）》

人文学研究科大学院生学修カルテ【博士課程前期課程】			
学籍番号		氏 名	
専 攻		教育研究分野	
指導教員	主)	副)	副)
博士前期 1年次 4月20日 <u>前期課程指導教員・研究テーマ届提出</u> 5月20日 <u>修士論文研究計画書提出</u> 2年次 4月10日 <u>修士準備論文を1部提出</u> 6月第3水曜日 前期課程公開研究報告会 6月第4金曜日 主指導教員は前期課程公開研究報告会 終了報告書を提出 11月16日まで <u>修士論文題目を提出</u> 1月16日まで <u>修士論文を1部提出</u> 2月中旬 最終試験 3月上旬 博士課程前期課程修了判定 3月下旬 学位記授与式			実施状況チェック

○このカードは個人情報保護の観点から取扱に注意が必要です。

具体的な研究・研究論文テーマ 関心のある関連領域
将来の希望・就職
修学上の留意点
単位取得状況 共通科目 専門科目

○このカードは個人情報保護の観点から取扱に注意が必要です。

指導履歴

年月日	指導内容

○このカードは個人情報保護の観点から取扱に注意が必要です。

発表論文など

年月日	論文名	学会名、雑誌名など
記入例①（学術雑誌等での論文発表） 2012年6月	論文名、著者名（共著の場合には、学生本人に下線を付けてください。）を記入してください。	掲載誌名、発行所等、巻（号）、最初と最後の頁、査読の有無
記入例②（学会等での論文発表） 2012年8月	論文名、発表者名（共同発表の場合には、学生本人に下線を付けてください。）を記入してください。	学会名、開催場所
記入例③（研究費獲得の場合）	研究費獲得：科研（特別研究員奨励費）、平成22年度 50万円、平成23年度 70万円	
記入例④（受賞歴、新聞記事掲載等） 2012年5月	学会賞等受賞名や新聞雑誌等掲載事項	

○ このカードは個人情報保護の観点から取扱に注意が必要です。

○ 発表論文等の記載内容は、人文学研究科における、大型補助金獲得や年次報告書作成時に利用することがありますので、以下の点を明記願います。

※ 学術雑誌等への発表論文は、査読の有無を記入のこと

※ 学会、シンポジウム等での発表論文は開催場所を記入のこと本研究科では、学生の多様なニーズ、社会からの要請に対応した教育課程の編成に配慮した次のような取組を実施している。

Ⅱ-3-2. 学生や社会からの要請への対応

人文学研究科では、グローバル化が進む現代社会における諸問題に対応し、また社会からの要請に応えるため、教育課程の編成やそれらに配慮した取組みを以下のとおり実践している。

1. 他研究科の授業科目の履修

本研究科では、他研究科の授業科目を本研究科での専門科目と同等に扱い、修了に必要な単位として認めている。

2. 他大学との単位互換

本研究科は、国内では奈良女子大学大学院人間文化研究科、大阪大学大学院文学研究科、神戸松蔭女子学院大学大学院文学研究科、神戸市外国語大学大学院外国語学研究科と交流協定を締結しており、これらの授業科目中10単位を上限として修了に必要な単位として認めている。

海外では、全学協定及び部局間協定に基づき、単位互換協定を締結している《資料14》。

《資料14：単位互換協定を締結している海外の大学 平成28年3月現在》

協定校	国名	大学間協定	部局間協定
ヤゲヴォ大学	ポーランド		○
山東大学	中華人民共和国	○	
中山大学	中華人民共和国	○	
木浦大学校	大韓民国	○	
成均館大学校	大韓民国	○	
ワシントン大学	アメリカ合衆国	○	
バーミンガム大学	連合王国	○	
韓国海洋大学校	大韓民国	○	
パリ第10（ナンテール）大学	フランス	○	
鄭州大学	中華人民共和国		○
グラーツ大学	オーストリア	○	
中国海洋大学	中華人民共和国	○	
西オーストラリア大学	オーストラリア	○	
南オーストラリア大学	オーストラリア	○	
カレル大学	チェコ	○	
浙江大学	中華人民共和国		○
ロンドン大学東洋アフリカ研究学院	連合王国	○	
復旦大学	中華人民共和国	○	
香港大学	中華人民共和国		○
ハンブルク大学	ドイツ		○
北京外国語大学	中華人民共和国	○	
武漢大学	中華人民共和国	○	
リヨン高等師範学校	フランス	○	
ソウル国立大学校	大韓民国	○	

上海交通大学	中華人民共和国	○	
清華大学	中華人民共和国	○	
ライデン大学	オランダ	○	
クイーンズランド大学	オーストラリア	○	
ピッツバーグ大学	アメリカ合衆国	○	
国立台湾大学	台湾	○	
パリ第7（ドニ・ディドロ）大学	フランス	○	
サウスフロリダ大学	アメリカ合衆国	○	
オックスフォード大学	連合王国	○	
ヴェネツィア大学	イタリア	○	
華東師範大学	中華人民共和国		○
ソフィア大学	ブルガリア	○	
パリ第2（パンテオン・アサス）大学	フランス	○	
オタワ大学	カナダ	○	
トリーア大学	ドイツ	○	

この制度に基づき、平成22年度から平成27年度の6年間に、協定校との間で受け入れ20名、派遣19名の留学生交換実績がある。交換留学生（受け入れ）実績は《資料15》、留学生在籍者数は《資料16》のとおりである。

《資料15：交換留学生（受入）実績》

年 度	所属大学名	出身国		期 間
平成 22 年度	山東大学	中国		22 年 10 月～23 年 3 月 31 日
	国立台湾大学	台湾		22年10月 1 日～23年 9 月30日
平成 23 年度	山東大学	中国	交流協会	23 年 10 月 1 日～24 年 9 月 30 日
	中山大學	中国	JASSO	23年10月 1 日～24年 9 月30日
	カレル大学	チェコ	HUMAP	23年10月 1 日～24年 3 月31日
	グラーツ大学	オーストリア		23年10月 1 日～24年 9 月30日
平成 24 年度	グラーツ大学	オーストリア		24 年 4 月 1 日～24 年 9 月 30 日
	北京外国語大学	中国		24年 4 月 1 日～25年 3 月31日
平成 25 年度	国立台湾大学	台湾	交流協会	25 年 4 月 1 日～25 年 9 月 30 日
	北京外国語大学	中国		25年 4 月 1 日～25年 9 月30日
	中山大學	中国	HUMAP	25年10月 1 日～26年 9 月30日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	25年10月 1 日～26年 9 月30日
平成 26 年度	北京外国語大学	中国		26 年 4 月 1 日～26 年 9 月 30 日
	中山大學	中国	HUMAP	26年10月 1 日～27年 9 月30日
	ヴェネツィア大学	イタリア	JASSO	26年10月 1 日～27年 9 月30日
	ヴェネツィア大学	イタリア	JASSO	26年10月 1 日～27年 9 月30日
	パリ第7大学	フランス	JASSO	26年10月 1 日～27年 9 月30日
平成 27 年度	ヤゲヴォ大学	ポーランド	JASSO	26 年 10 月 1 日～27 年 9 月 30 日
	北京外国語大学	中国	神戸大学基金	27年 4 月 1 日～27年 9 月30日
	北京外国語大学	中国	神戸大学基金	27年 4 月 1 日～27年 9 月30日

	山東大学	中国	神戸大学基金	27年10月1日～28年9月30日
--	------	----	--------	-------------------

※HUMAP：兵庫・アジア太平洋大学間交流ネットワーク、JASSO：日本学生支援機構

《資料16：交換留学（派遣）実績》

年度	派遣大学名	派遣国	奨学金	期 間
平成 22年度	中山大學	中国	HUMAP	22年9月～23年7月
平成 24年度	ヴェネツィア大学	イタリア		24年9月1日～25年6月15日
平成 25年度	グラーツ大学	オーストリア	JASSO	25年8月30日～26年7月15日
	ヴェネツィア大学	イタリア		25年9月～26年6月7日
	オックスフォード大学	英国	神戸大学基金	25年10月～25年12月
平成 26年度	オックスフォード大学	英国	JASSO	26年10月6日～27年3月14日
	グラーツ大学	オーストリア	JASSO	26年10月1日～27年7月3日
	SOAS	英国	JASSO	26年7月28日～27年6月20日
	国立台湾大学	台湾	JASSO	26年9月1日～27年1月31日
	パリディドロ第7大学	フランス	JASSO	26年9月1日～27年6月30日
平成 27年度	バーミンガム大学	英国		27年9月21日～28年6月17日
	中山大學	中国		27年9月20日～28年1月23日

3. ダブルディグリー・プログラム

平成27年度より、北京外国語大学北京日本学研究中心との間でダブルディグリー・プログラムを開始している。これは、博士前期課程の学生が、本研究科在籍中に派遣先大学に最低1年間留学し、所定の単位を修得し、派遣先大学と本研究科にそれぞれ修士論文を提出することによって、最短2年間で2つの学位を取得できるプログラムである。平成27～28年度に1名を派遣しており、平成28年度には2名の受け入れが決定している。

4. 連携講座

本研究科では、博士後期課程社会動態専攻に文化資源論講座を置いて、奈良国立博物館及び大和文華館と連携し、文化財学、文化資源学に関する教育を行い、博物館、美術館及び自治体において、文化財保全、文化財行政を担当できる高度な知識を持った人材を養成している。

5. 日本語日本文化教育の取組

本研究科では、学生が専攻する専門分野の特性を活かしながら、非日本語母語話者に対する日本語日本文化教育を行うための知識と能力を身につけることを目指す「日本語日本文化教育プログラム」《資料17》を平成20年度から博士課程前期課程の教育課程に組み入れて実施している。平成22年度以降毎年度、主にこのプログラムの修了者を対象にして、海外の大学での日本語日本文化教育インターシップを実施している《資料18》。

《資料17：日本語日本文化教育プログラム授業科目》

別表 授業科目および必要修得単位数

	授業科目	単位数		合計単位数
必修	日本語日本文化教育演習	2		12
Ⅰ群	多文化理解演習	4	2	
	日本語教育研究Ⅰ			
	日本語教育研究Ⅱ			
	日本語教育内容論Ⅰ			
	日本語教育内容論Ⅱ			
	日本語教育方法論Ⅰ			
	日本語教育方法論Ⅱ			
	日本語教育方法論Ⅲ			
Ⅱ群	日本語研究	2		
	国語学特殊研究Ⅰ			
	国語学特殊研究Ⅱ			
	国語学特殊研究Ⅲ			
	国語学特殊研究Ⅳ			
	国語学特殊研究Ⅴ			
	日本語学特殊研究			
	応用言語学特殊研究			
	認知言語学特殊研究Ⅰ			
	認知言語学特殊研究Ⅱ			
	音声学特殊研究Ⅰ			
	音声学特殊研究Ⅱ			
Ⅲ群	日本社会文化演習Ⅰ	2		
	日本社会文化演習Ⅱ			
	国文学特殊研究Ⅰ			
	国文学特殊研究Ⅱ			
	国文学特殊研究Ⅲ			
	国文学特殊研究Ⅳ			
	国文学特殊研究Ⅴ			
	国文学特殊研究Ⅵ			
	日本古代中世史特殊研究Ⅰ			
	日本古代中世史特殊研究Ⅱ			
	日本中世史特殊研究Ⅰ			
	日本中世史特殊研究Ⅱ			
	日本近代史特殊研究Ⅰ			
	日本近代史特殊研究Ⅱ			
	日本現代史特殊研究Ⅰ			
	日本現代史特殊研究Ⅱ			
	Ⅳ群			

(国際文化 学研究科科 目)	日本語教育方法論特殊講義			
	言語コミュニケーション論演習 [齊藤・川上] ※			

※言語コミュニケーション論演習は齊藤・川上担当のものに限る。

[日本語日本文化教育演習] を2単位、Ⅰ群から4単位、Ⅱ群・Ⅲ群から各2単位、及びⅠ群・Ⅱ群・Ⅲ群・Ⅳ群のいずれかから2単位、合計12単位を必要修得単位数とする。

《資料18：日本語日本文化教育インターンシップ派遣実績》

年度	派遣先機関	派遣国	期 間
平成22年度	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日文学科	ドイツ	22年10月4日～22年11月22日
平成23年度	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日文学科	ドイツ	23年10月14日～23年11月13日
平成24年度	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日文学科	ドイツ	24年10月15日～25年12月13日
平成25年度	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日文学科	ドイツ	26年3月26日～27年3月25日
平成26年度	ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日文学科	ドイツ	27年3月15日～28年3月7日
平成27年度	トリニア大学日文学科	ドイツ	28年1月23日～28年2月7日
	オックスフォード大学東洋学部日文学科	連合王国	28年2月20日～28年3月20日
	北京外国語大学日本語学科	中国	28年2月28日～28年3月26日

6. グローバル教育への取組

人文学研究科では、文部科学省、日本学術振興会によって採択された教育研究プログラムを通じて、国際的な場で活躍できる学生の育成をはかってきた。この目的を達成するため、研究科共通科目にグローバル教育のための科目を新たに設置するなど、教育課程を充実させてきた。平成24年度に文部科学省グローバル人材育成推進事業等に採択された「問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成」プログラムに基づき、人文学研究科博士課程前期課程では、高度な国際感覚を育成するための外国語授業科目群（グローバル人文学科目群）と、「アカデミック・ライティング」など優れた外国語能力とコミュニケーション能力を育成するための授業科目群（グローバル対話力育成科目群）とからなる、「グローバル人文学プログラム」を実施している。このプログラムは、すべて外国語で授業が行われており、所定の単位を取得し、「外国語力スタンダード」（TOEFL等の外国語資格試験等における所定のスコア）を達成した者には、修了時に「グローバル人文学プログラム修了証」を授与している。

その結果、本プログラムが目的として掲げる「人文学的課題をグローバルな視点から考察し、日本文化の深い理解を基に異文化との対話を重ねながら、現代社会における諸問題を解決に導いていくリーダーシップとコミュニケーション能力を持った人材」が育ちつつある。（「グローバル人文学プログラム」については、「第2部 2-2. グローバル人材育成推進事業」78-80頁を参照。）

Ⅱ-4. 教育方法

Ⅱ-4-1. 授業形態の組合せと学習指導法上の工夫

教育を展開する上での指導法の工夫として、例えば景観文化財の現地保存について北野の伝建地

区に赴くなど、フィールド型授業も重要視している《資料19》。

《資料19：「歴史地理学特殊研究Ⅰ」シラバス》

開講科目名	歴史地理学特殊研究I		
担当教員	菊地 真	開講区分	単位数
		後期	2.0単位

授業のテーマと到達目標

《テーマ》景観および文化財の保存活用
《目標》景観および文化財を現地でどのように保存するのか。文化財学的観点から、景観文化財の現地保存や現代生活の場としての活用といった課題について考察する。受講生が基礎的知識を得た上で、実際に現地に自ら赴き、調べ、考察する文化財への興味関心を持つのが目標である。

授業の概要と計画

※神戸大学 LMS（学修管理システム BEEF）掲載内容も事前に確認すること。
景観とは何でしょう。景観とは形態に着目した概念で、地表面上にある任意の空間断片を指します。空間であるがゆえに、その取扱いはさまざまです。
文化財との関連では、文化財保護法の1975年改正により町並みが、2005年改正により文化的景観が保護の対象に加えられました。文化財は長い歴史のなかで生まれ、伝え、残されてきた私たちの財産です。景観は歴史的な形成物であり、文化財の一部とする観点、“景観文化財”学もここに成立すると言えます。
今回は北野の伝建地区など幾つかの具体的な事例を取り上げながら、景観文化財の現地での保存活用について考えます。授業は講義に野外巡検やディスカッションなど、演習の要素を加えて進めていきます。巡検については受講生と相談し、景観文化財について理解の徹底を図っていきます。出来れば積み上げ式で景観文化財の調査・検討を全員で行い、成果を最終的に取りまとめ公表したい。

成績評価と基準

平常点による。課題レポートや授業、巡検ほか（調査や討議等）への参加度合いから評価する。

履修上の注意（準備学習・復習、関連科目情報等を含む）

履修希望者は最下段の「受講の手引き」PDFを事前に熟読し初日に臨むこと。国による景観や町並みの保護制度等について、参考図書ほかで講義と並行して学習を進めると予習復習に役立つ。

オフィスアワー・連絡先

人文学研究科C棟5階 C566室（火曜・12:20-13:00）

学生へのメッセージ

講義は、学生のみなさんが自ら考える糸口を提供するものです。上記のレポート等は、みなさんの考察結果を知る意味も持ちます。今年度は伝統的建造物群や歴史的町並みを題材に考えます。景観文化財は私たちが何気なく見ている風景の中にあります。巡検では歴史的な景観を実際に見て、触れて、景観文化財を成立させるのは何か、未来へと守り伝える手段は何かを各自でよく考えてください。

今年度の工夫

学修管理システムBEEFを導入。10月より公開するのであわせて利用のこと。<https://beef.center.kobe-u.ac.jp/>

教科書

教科書としては購入を要しないが、講義との関連性のより強い図書を下記に掲げる。
文化的景観 / 日本経済新聞出版社, 2012, ISBN:
日本の町並み250 / 山と溪谷社, 2013, ISBN:
異人館のある町並み北野・山本 / 神戸市教育委員会, 2000, ISBN:
地域に生きる歴史の町並み・伝統的建造物群保存地区制度35周年記念シンポジウムの記録 / 全国伝統的建造物群保存地区協議会, 2011, ISBN:
誇れる郷土ガイド 日本の伝統的建造物群保存地区編 ふるさとシリーズ / 世界遺産総合研究所 古田陽久 古田真美: シンクタンクせとうち総合研究機構, 2005, ISBN:

参考書・参考資料等

講義との関連性の順に、教科書・参考書に図書一覧を示した。その他、附属図書館KULIPにまとめた
保存原論 日本の伝統建築を守る / 鈴木博之: 市ヶ谷出版社, 2013, ISBN:
日本の文化的景観 / 同成社, 2005, ISBN:
歴史遺産と環境 / 文化財保存修復学会編: クバプロ, 2002, ISBN:
歴史的遺産の保存・活用とまちづくり / 大河直躬, 三船康道編著: 学芸出版社, 2006, ISBN:
文化財の価値を評価する: 景観・観光・まちづくり / 垣内恵美子編著: 水曜社, 2011, ISBN:

授業における使用言語

日本語

キーワード

景観 文化財 文化的景観 町並み 地図 伝統的建造物 博物館 防災

また実社会に応用できる能力を身につけることを目的として、実習型の授業も重視している。例

えば、日本語教育に関連する基礎的知識を習得した上で、3週間にわたって実施される「神戸大学夏期日本語日本文化研修プログラム」等において実習を行うことで、異文化交流と日本語教育の実体験ができる授業を行っている《資料20》。

《資料20：「日本語日本文化教育演習」シラバス》

開講科目名	日本語日本文化教育演習		
担当教員	Harrison Richard	開講区分	単位数
		前期	2.0単位
授業のテーマと到達目標			
日本語教育に関連する教授法、日本語学、日本文化・日本事情、異文化交流などの基礎的知識を習得し、7月末から3週間にわたって実施される「神戸大学夏期日本語日本文化研修プログラム」を中心とする各種のプログラムにおいて実習を行う(実習は必修)。日本語や日本文化を他言語・他文化の視点から相対的に見る力を養い、同年代の外国人との共同作業を通して、異文化交流と日本語教育の実体験ができる授業を目指す。			
授業の概要と計画			
開講期間は5月18日(月)から8月6日(木)とする。講師は留学生センターの専任教員がリレー式で担当し、教員毎に授業テーマを設定する。日本語や日本文化を外から見る、発想の転換を促す授業を目指す。4月13日(月) 20日(月)ともに5時限の2回、オリエンテーションを実施する。定員は40名程度。受講希望者が多い場合は、受講動機のレポートを課し、その評価により受講者を決定する。			
成績評価と基準			
出席率、講義および実習での参加状況、レポートを総合的に判断する。			
履修上の注意(準備学習・復習、関連科目情報等を含む)			
必ず4月13日(月)、20日(月)のいずれかにオリエンテーションに参加すること。夏期プログラムでは、グループ活動の事前準備を求める。			
オフィスアワー・連絡先			
リチャード・ハリソン TEL:803-5275 e-mail:harrison@kobe-u.ac.jp			
学生へのメッセージ			
今年度の工夫			
教科書			
ハンドアウトを配布する。			
参考書・参考資料等			
授業における使用言語			
日本語			

学生に対する指導体制は、前期課程、後期課程ともに入学時から主指導教員が履修状況をチェックし、個別に指導を行う一方、他専攻の教員1名を含む副指導教員2名を置き、あわせて3名の指導教員が協力して指導に当たっている。学生は『学生便覧』に明記されている学修プロセスに従って修士論文研究計画書、博士論文作成計画書などを提出する《資料21》。また、正副研究科長、正副大学院委員と各教育研究分野の代表で構成される学修プロセス委員会は、学位論文作成に向けて指導が適切に行われているかを検証するとともに、学修プロセスの見直しを行っている。

平成27年度も、学修プロセスにしたがって前期課程公開研究報告会（前期課程2年次）、後期課程公開研究報告会（後期課程2年次）、博士予備論文公開審査（後期課程3年次）が実施され、該当する学生のその時点における研究成果を踏まえて指導が行われた。

《資料21：学修プロセスフロー》

人文学研究科学生の学修プロセスフロー図		
年 次	時 期	事 項
【博士課程前期課程】		
1 年次	4 月 20 日	■「 <u>前期課程指導教員・研究テーマ届</u> 」提出
	5 月 20 日	■「 <u>修士論文研究計画書</u> 」提出
2 年次	4 月 10 日	■ <u>修士準備論文を 1 部提出</u>
	6 月第 3 水曜日	前期課程公開研究報告会
	前期課程公開研究報告会の翌週の金曜日	■主指導教員は「前期課程公開研究報告会終了報告書」を提出
	11 月 16 日まで	■「 <u>修士論文題目</u> 」提出
	1 月 16 日まで	■ <u>修士論文を 1 部提出</u>
	2 月中旬	最終試験
	3 月上旬	博士課程前期課程修了判定
	3 月下旬	学位記授与式
【博士課程後期課程】		
1 年次	4 月 20 日	■「 <u>後期課程指導教員・研究テーマ届</u> 」提出
	5 月 31 日	■「 <u>博士論文作成計画書</u> 」提出
2 年次	7 月 1 日	■主指導教員は指導学生の後期課程公開研究報告会発表題目を提出
	9 月 30 日	後期課程公開研究報告会
	10 月 10 日	■主指導教員は「後期課程公開研究報告会終了報告書」を提出
3 年次	5 月 31 日	■ <u>博士予備論文を 3 部提出</u>
	6 月最終水曜日または 7 月第 1 水曜日	博士予備論文公開審査
	博士予備論文公開審査の翌週の金曜日	■主指導教員は「博士予備論文公開審査報告書」を提出
	12 月 1 日～12 月 10 日	■ <u>博士論文を 5 部提出</u>
	1 月～2 月	最終試験
	3 月上旬	博士課程後期課程修了者（学位授与）認定
	3 月下旬	博士学位授与
備考：_____は、学生が提出するもの。		
■は教務学生係に提出するもの。		

博士課程前期課程 9 月修了者の修士論文題目は 5 月 15 日まで、修士論文提出は 7 月 15 日まで。
博士課程後期課程 9 月修了者の博士論文提出は、7 月 1 日から 7 月 10 日まで。
(注) 時期が休日にあたる時は、その前日とします。ただし、修士論文提出については、その翌日とします。
各年度の時期については、前年度の 12 月に掲示により通知します。

学位論文の提出条件、作成要領は、人文学研究科博士課程後期課程の一期生が学位論文を提出するのに合わせて、平成 21 年度に「学位論文受理条件（申し合わせ）」および「学位論文等作成要領」を作成して明文化し、学生に周知した《資料 22》《資料 23》。

《資料 22：学位論文受理条件（申し合わせ）》

論文博士 [2009 年 11 月より適用]

原則として、出版されている研究書あるいは出版が内約されている研究書であること。出版が予定されていない場合には、2 本以上の査読誌掲載論文を含んでいること。その場合、学位取得後 1 年以内に電子媒体サービス等を利用して刊行すること。

課程博士 [2010 年 4 月入学者より適用]

- (1) 学位論文の内容を、査読誌ないしはそれに準ずる研究誌に刊行していること（採択済みも含む）、なお、教員が所属している教育研究分野でしかるべき規定を設けている場合には、この規定に加えて、当該教育研究分野の規定を尊重する。
- (2) 特段の理由がない限り、電子媒体サービス等を利用して、学位論文を学位取得後 1 年以内に刊行すること。

《資料 23：学位論文等作成要領》

学 位 論 文 等 作 成 要 領

学位論文の審査を願い出る者は、この作成要領に従って書類を整備すること。

1 申請書類について

次に掲げる書類等を主指導教員を経て研究科長に提出するものとする。ただし、提出にあたっては、必ず主指導教員及び教務学生係の点検を受けること。

- | | |
|--------------------------------|---------|
| (1) 学位論文審査願 | 1 部 |
| (2) 学位論文提出承認書 | 1 通 |
| (3) 論文目録 | 1 部 |
| (4) 学位論文 | 1 編 5 部 |
| (5) 論文内容の要旨 (4,000 字程度、日本語による) | 7 部 |
| (6) 履歴書 | 1 部 |
| (7) 参考論文 | 1 部 |

2 学位論文について

- ・ 永久保存に耐え得るタイプ印刷とし、製本すること。
- ・ 規格は自由であるが、なるべく A4 版が望ましい。
- ・ 表紙には、提出日、論文題目等を明記すること。（別紙見本 A を参照）
- ・ 提出後は、訂正、差し替えができないので、誤字、脱字等がないように注意すること。
- ・ 外国語による論文の場合は、提出論文の扉に、論文題目とその和訳（括弧書き）を併記すること。
- ・ 共著論文のうち、次の条件を満たしているものは、学位論文として受理することができる。
 - ① 論文提出者が研究及び論文作成の主動者であること。
 - ② 学位論文の共著者から、当該論文を論文提出者の学位論文とすることについての承諾書が得られること。（別紙承諾書添付）

3 論文目録について

(1) 題目について

- ① 題目（副題を含む）は、提出論文のとおり記載すること。
- ② 外国語の場合は、題目の下にその和訳（括弧書き）を併記すること。

(2) 印刷公表の方法及び時期について	
①公表は、単行の書籍又は学術雑誌等の公刊物（以下「公表誌」という。）に登載して行うものであること。	
②論文全編をまとめて公表したものについては、その公表年月、公表誌名、(雑誌の場合は、巻・号)又は発行書名等を記載すること。また、論文を編・章等の区分により公表したものについては、それぞれの区分ごとに公表の方法・時期を記載すること。	
③学位論文（編・章）について、別の題目で公表した論文をもって公表したものとする場合は、その題目（公表題目）を（ ）を付して併記すること。	
④未公表のものについては、次の記載例を参照の上、その公表の方法、時期の予定を記載すること。 (記載例)	
イ すでに出版社等に提出し、出版が内約されている場合。	
題目	○○○○○○○○○○ ○○○出版社から平成○○年○○月 刊行予定
ロ すでに投稿し、学会等において、掲載期日が決定しているが、申請手続の時点において、印刷公表されていない場合。	
題目	○○○○○○○○○○ ○○○学会誌○巻○号 平成○○年○○月○○
日	掲載予定
ハ 現在投稿中の場合。	
題目	○○○○○○○○○○ ○○○学会誌 投稿中 平成○○年○○月○○日
投稿済み	
ニ 近く投稿する予定の場合。	
題目	○○○○○○○○○○ ○○○学会誌平成○○年○○月投稿予定
⑤共著の場合は必ず共著者名を付記すること。	
(3) 冊数について	
学位論文1通についての冊数を記載すること。	
(4) 参考論文について	
すでに学会誌等に発表した論文題目を記載し、その論文を添付すること。	
4 履歴書について (別紙見本Bを参照)	
(1) 氏名について	
戸籍のとおり記載し、通称・雅号等は一切用いないこと。	
(2) 学歴について	
①高等学校卒業後の学歴について年次を追って記載すること。	
②在籍中における学校の名称等の変更についても記載すること。	
(3) 職歴・研究歴について	
原則として常勤の職について、機関等の名称、職名等を正確に年次を追って記載すること。ただし、学歴と職歴に空白となる期間があり、非常勤等の職歴がある場合はこれを記入し、職歴等に不明な期間がないように記載すること。	
(4) 賞罰について	
特記すべきものと思われるものを記載すること。	
5 論文内容の要旨について	
記載方法については、(別紙見本C)を参照。	
以 上	

ティーチングアシスタント (TA) は、授業の必要性に応じて適宜配置している《資料24》。TA採用者に対しては「TA ハンドブック」を配布するとともに、授業担当者からのガイダンスを行っている。

《資料24：TA採用実績（平成27年度、単位：人）》

講義科目	演習・実習科目等
35	76

シラバスは、すべてウェブサイト上に公開しており、担当教員名、講義目的、授業内容、成績評価・基準、準備学習等についての具体的な指示、教科書・参考文献、履修条件等の履修情報を掲載し、学習の便宜を図っている。履修科目登録時には、指導教員が点検し、学生の意欲や関心に合った履修を促している。シラバスに参考文献や授業の履修条件を適宜示すことにより、学生の主体的学修を促している。また、オフィスアワーが各教員のシラバスに記載され、授業時間外に学修・学生生活に関する質問・相談に応じている《43頁の資料19》《44頁の資料20》。

II-4-2. 主体的な学習を促す取組

履修科目登録にあたって指導教員が点検し、学生の意欲や関心に合った履修を促している。シラバスに参考文献や授業の履修条件を適宜示すことにより、学生の主体的学修を促している。

大学院生の学習意欲を高めるために、海外で研究発表を行う機会や調査・実験を行う機会を提供している。特に後期課程の大学院生の、海外で開催される学会への参加に対して、大学院学生海外派遣援助事業などを活用して支援してきた《資料25》《資料26》。また、海港都市研究センターは、台湾・大韓民国・中華人民共和国の大学と連携して、大学院生の研究発表を中心とする国際シンポジウム（海港都市国際シンポジウム）を継続的に開催してきた。平成27年度はセンター主催の国際シンポジウムは行っていないが、今後は、提携校と連携して国際シンポジウムを開催し、大学院生の海外派遣を継続する。

《資料25：平成19年度から27年度までの、大学からの資金援助を得た海外派遣件数》

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
件数	7	8	8	7	4	14

※平成26年度までは、神戸大学基金による海外派遣件数である。

《資料26：平成27年度における大学からの資金援助を得た海外派遣》

教育研究分野	派遣先	派遣目的	発表論文名
国文学	中国 北京外国語大学	平成27年度日本語教育インターンシップ活動	
言語学	イギリス オックスフォード大学	平成27年度日本語教育インターンシップ活動	
日本史学	中国 上海大学	資料収集	
ヨーロッパ文学（2名）	ドイツ トリーア大学	資料収集	
ヨーロッパ文学	イタリア ヴェネツィア大学	研究	
ヨーロッパ文学	ドイツ ハンブルク大学	研究	
社会学（2名）	中国 香港大学	調査	
社会学	中国 北京大学、北京外国語大学	調査	
社会学	ベルギー 神戸大学ブリュッセルオフィス	International Workshop on Modern Family in Japan and Europe	Life Course and Transition to Adulthood in Contemporary Japan
社会学	中国 ハルビン市	調査	
社会学	韓国 大田市	調査	

地理学	台湾 中央研究院	第11回海港都市研究国際シンポジウム	神戸港における労働の景観と下請労働市場－造船所・倉庫・マネキンの展示をてがかりとして
-----	----------	--------------------	--

環境面では、平成19年度の学舎改修に際して学生用スペースを拡張したが、平成22年度以降にはラーニングコモンズの設置、情報処理室の拡充などを行うことで、《資料27》のように主体的な学修を促す環境を整備している。

《資料27：主体的な学習を促す環境の整備項目》

施設等	概要
図書館（日本文化資料コーナー）	本学部の人文科学図書館は書籍約30万冊を有し、毎年確実に蔵書数を増やしている。授業期間中は、平日（8時45分～20時）および土曜日（10～18時）、試験期間中は、平日の夜間（21時まで）および日祝日も開館している（10～18時）。
	「日本文化資料コーナー」を設けて資史料、貴重図書、レファランス類を集中的に配架し、複数の辞書類・資料を同時に縦覧する必要がある歴史・文学系等の学生の利便を図っている。可能な限り具体的な活用状況を入れる。
学生用共同研究室	学生が個人あるいはグループで調査・研究するために使用できる「共同研究室」を教育研究分野ごとに設置し、学生の自主学習へ配慮している。可能な限り具体的な活用状況を入れる。
コモンルーム	学生がグループ学習や研究会などのために自由に使用することのできる「コモンルーム」を3カ所設置し、学生の自主学習へ配慮している。可能な限り具体的な活用状況を入れる。
共同談話室	教員と学生が共同研究、読書会など行うために使用することができる「共同談話室」を5カ所設置し、自由な共同学習や演習等の授業に活用している。可能な限り具体的な活用状況を入れる。
情報機器	学生が利用できるパーソナル・コンピュータを「情報処理室」（平成22年度 B 棟に移転・拡充）に48台、人文科学図書館に18台を設置するとともに、各専修の共同研究室や実験室などにも適宜配置している。可能な限り具体的な活用状況を入れる。
教育機器	視聴覚機材を平成21～23年度 B 棟に、平成24年度 C 棟に設置し、ほとんどの教室で視聴覚機材（プロジェクター、スクリーン、DVD など）を使った授業ができるようになった。可能な限り具体的な活用状況を入れる。
ラーニングコモンズ	自由に机と椅子を組み合わせ、図書館資料を自由に使用し、グループで話し合いながら学習を進めることができるスペースとして、「ラーニングコモンズ」が人文科学図書館に設置された。平成25年度から運用が始まり、自主学習や演習等の授業に活用されている。

II-5. 学業の成果

II-5-1. 学生が身に付けた学力や資質・能力

本研究科博士課程前期課程の学位取得等の状況は、《資料28》のとおりである。ここ数年、人文科学研究科博士課程前期課程の入学者の標準修業年限（2年）内修了者の比率は、平均約75%となっている。本研究科博士課程後期課程の学位取得状況は《資料29》のとおりである。平成19年度の人文科学研究科への改組以後は、修業年限（3年）内の学位取得者の比率は平均約37%となっている。修士学位論文の題目は、《資料30》、博士学位論文の題目は、《資料31》および《資料32》のとおりである。また、専修教育職員免許状の取得状況は《資料33》のとおりである。

多数の学生が国際学会や全国規模の学会等で研究成果を発表し、優秀論文賞を受賞するなど、在学生の研究成果が各種学会等において高く評価されている《資料34》。

《資料28：人文学研究科（博士課程前期課程）の修士学位取得状況一覧 平成28年3月現在》

入学年度 (標準修業年度)	入学者総数 (a)	既修了者数 (b)	既修了率 (b/a)	標準年限内修 了者数 (c)	標準年限内修 了率 (c/a)
平成20年 (平成21年)	53	50	94.3%	39	73.6%
平成21年 (平成22年)	58	56	96.6%	37	63.8%
平成22年 (平成23年)	43	38	88.4%	32	74.4%
平成23年 (平成24年)	51	48	94.1%	40	78.4%
平成24年 (平成25年)	48	45	93.8%	39	81.3%
平成25年 (平成26年)	44	42	95.5%	35	79.5%
平成26年 (平成27年)	41	31	75.6%	31	75.6%

《資料29：人文学研究科（博士課程後期課程）の博士学位取得状況一覧》

入学年度 (標準修業年度)	入学者総数 (a)	既修了者数 (b)	既修了率 (b/a)	標準年限内修 了者数 (c)	標準年限内修 了率 (c/a)
平成19年 (平成21年)	25	19	76.0%	9	36.0%
平成20年 (平成22年)	25	14	56.0%	9	36.0%
平成21年 (平成23年)	23	17	73.9%	10	43.5%
平成22年 (平成24年)	26	16	61.5%	10	38.5%
平成23年 (平成25年)	21	8	38.1%	8	38.1%
平成24年 (平成26年)	11	5	45.5%	3	27.3%
平成25年 (平成27年)	19	1	5.3%	1	5.3%

《資料30：平成27年度人文学研究科博士課程前期課程修了者の修士論文題目》

専攻	教育研究分野	修 士 論 文 題 目
文化 構 造	哲学	『危機』書における「触発」の位置づけ
	国文学	能く弱法師>における説話の展開と成立背景の考察
		『平家物語』等の成立過程における後堀河・四条朝の意義についての研究
		『源氏物語』の薫造型—薫をめぐる後見関係の変化を見据えて—
		『義経記』における山科関連説話についての考察—巻第七「大津次郎の事」を中心に—
		『源氏物語』若菜巻における語りの機能
		近松門左衛門後期「心中物」研究
		古井由吉論 — 一九六八年から一九八〇年へ—
		『平家物語』巻第十二平家残党譚の生成と変容—湯浅氏、後藤氏の在京活動をめぐって—
		条件文の日中対照—反事実条件文を中心に—
		説明のモダリティの「わけだ」について—中国語母語話者への教育に向けて—
		条件表現の日中対照研究—「なら」を中心に—

社会 動 態	中国・韓国文学	聞一多の詩人から中国古典研究家への移行に関する一考察
	英米文学	J. D. Salinger's Strategic Representations of "the Orient" in <i>Nine Stories</i>
		The Influence of Greek Classics on Jeffrey Eugenides' <i>The Virgin Suicides</i> and <i>Middlesex</i>
		Disguise and Gender in <i>Twelfth Night</i>
	ヨーロッパ文学	W. G. ゼーバルト『アウステルリッツ』におけるコレクションの諸相
		縫い合わされる物語—E. T. A. ホフマン『ブランビラ王女』における Nadel と Filetzeug—
	日本史学	古代氏族の成立と展開過程の研究—巨勢氏を例として—
		国策研究会論—挙国一致内閣期における「国策」の視点から—
		二十世紀初頭中国東北地区に於ける日本の勢力拡張—安奉鉄道をめぐる交渉から見—
	西洋史学	古典期アテナイにおけるゲノスの宗教的権威
	心理学	Exploratory research on moral outrage
		関係価値が罪悪感に及ぼす影響
		パートナーからの注意が親密度や社会的交換に与える影響
	言語学	英語の同族目的語構文の研究：コーパスからのアプローチ
		日本語非対格他動詞の分析
		日本語の自発構文—その統語構造—
		日本語モダリティ表現の統語的観察—疑似モダリティを中心に—
		日本語の二重目的語動詞の種類と統語構造
		日本語学習者の映像視聴時に字幕がもたらす影響—インプットからの「気づき」に着目して—
	芸術学	「人形」を動かすこと—ブラザーズ・クエイの人形アニメーション作品についての考察—
		ゴードン・マッタークラーク研究—「残されたもの」はいかなる特性をもつか—
	社会学	ポピュラー音楽から見る日本人のグローバル意識についての実証研究—神戸・大阪のアマチュアミュージシャンを事例として—
		ライブハウスにおける複層構造—ジャズ/ロック/クラブミュージックに着目して—
		中国の大都市近郊地域における移動と社会的ネットワーク—上海市松江区A団地を事例として—
		中国における日系企業の人的現地化について—労働者の労働志向とその社会要因—
		在日中国人ニューカマーのアイデンティティ
	美術史学	綾なす絵画—印象派の装飾画とその受容—
		大倉文化財団普賢菩薩騎象像の研究
		ティツィアーノ作ヴェネツィア旧サン・ニコロ・デイ・フラーリ聖堂祭壇画—図像改変についての考察—

《資料31：平成27年度人文学研究科博士課程後期課程修了者の博士論文題目》

専攻	教育研究分野	博士論文題目
文化構造	国文学	『大鏡』研究—文人貴族の歴史認識をめぐって—
社会動態	芸術学	映画にみるナショナリティとマイノリティの狭間—アン・リー映画の「越境性」と柔軟な主体の形成—
	社会学	“Activities and Participation in the Aesthetic-Rhetoric Field of the Japanese ‘Subculture’; Focusing on the Interinstitutional System of the Japanese Animation Contents Industry, the Dōjin Culture, the Cosplay Practices and the Vocaloid Scene (日本「サブカルチャー」の美的—レトリック的なフィールドにおける活動と参加—日本アニメコンテンツ産業、同人文化、コスプレ実践とボーカロイドシーンの間制度的システムを中心に—)
	美術史学	狩野芳崖と下関—芳崖を形成したもの—

《資料32：平成27年度文化学研究科博士課程修了者の博士論文題目》

専攻	教育研究分野	博士論文題目
社会文化	表象システム論	13～14世紀におけるシエナの都市＝農村関係—マニャーティと農村—

《資料33：専修学位区職員免許取得状況》

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
取得者数	11	18	20	19	6	13

《資料34：平成22～27年度学生受賞者一覧》

氏名	所属（受賞時）	成績功績等の概要
横山武昌	人文学研究科 博士課程前期課程	喜多伸一准教授（当時）との共著論文「視線変化の知覚～眼を向けることと眼を逸らすこと」により電子情報通信学会よりヒューマンコミュニケーショングループ賞を受賞（平成22年度）
李瑩瑩	人文学研究科 博士課程後期課程	論文「上代漢字文献における「矣」の用法」が、平成23年度漢検漢字文化研究奨励賞・佳作（財団法人 日本漢字能力検定協会）を受賞した（平成23年度）。
八木彩乃	人文学研究科 博士課程前期課程	グローバルCOE「心の社会性に関する教育研究拠点」総括シンポジウム「心はなぜ、どのように社会的か？～フロンティアとアジェンダ～」(2012. 3. 17開催)で若手ポスターアワードを受賞した（平成23年度）。
大杉千尋	人文学研究科 博士課程後期課程	論文「イーゼンハイム祭壇画《キリスト復活》に関する一考察—「オランズ型」キリストの機能をめぐって」により、第12回美術史論文賞を受賞した（平成26年度）。

II-5-2. 学業の成果に関する学生の評価

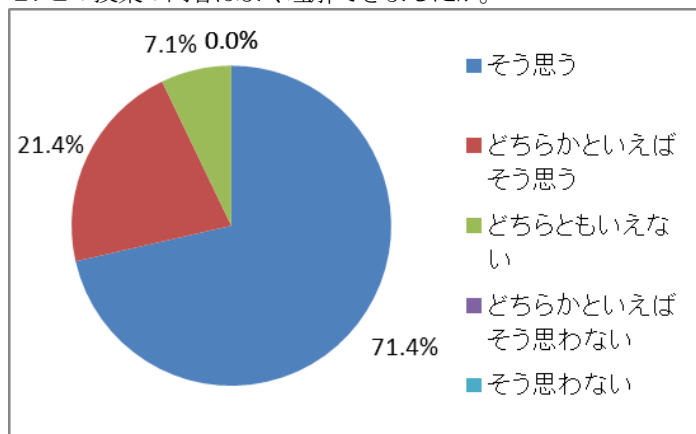
「授業振り返りアンケート」平成27年度後期の結果では、教育の成果や効果に関する質問項目の「2。この授業の内容はよく理解できましたか。」「3。シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか。」のうち、2については最上点及び次点の回答者が92.8%、3については最上点及び次点の回答者が90.8%といずれも良好な結果が得られており、いずれも極めて高いレベルを維持している《資料35》。

また、平成26年度の修了時アンケートでは、深い学識と高度の専門的知識について、身についてという回答が多く得られた。また、課題を設定して解決する能力も身についていることが確認され

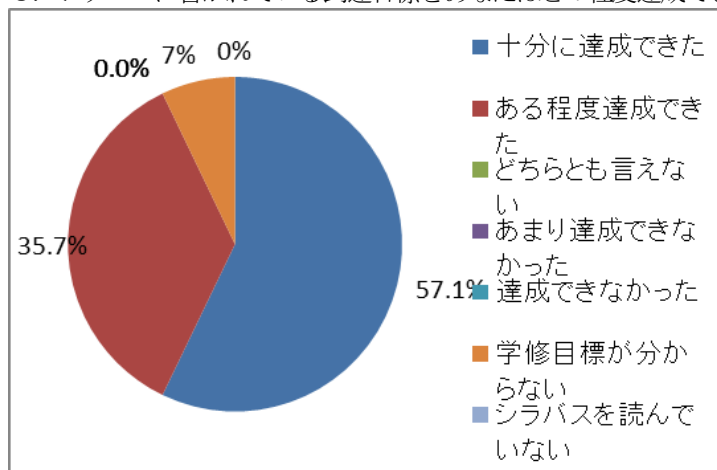
た《資料36》。

《資料35：「平成26年度前期・後期授業評価アンケート」結果（抜粋）》

2. この授業の内容はよく理解できましたか。

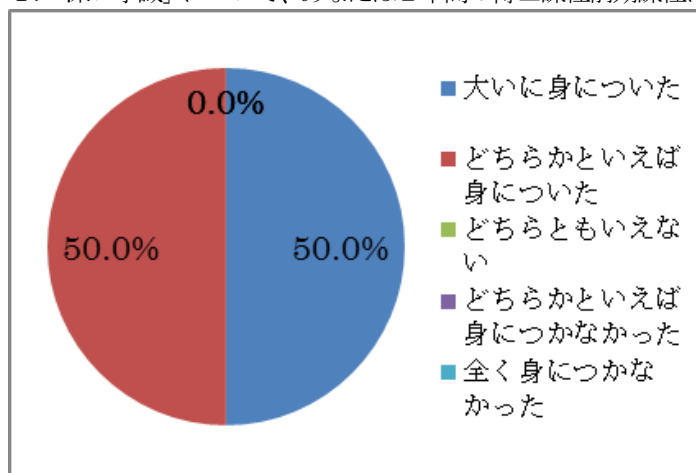


3. シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか。

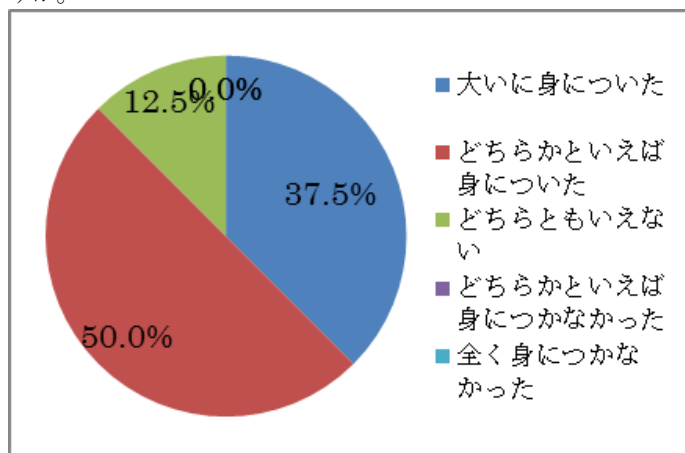


《資料36：「平成26年度人文学研究科修了時アンケート」結果（抜粋）》

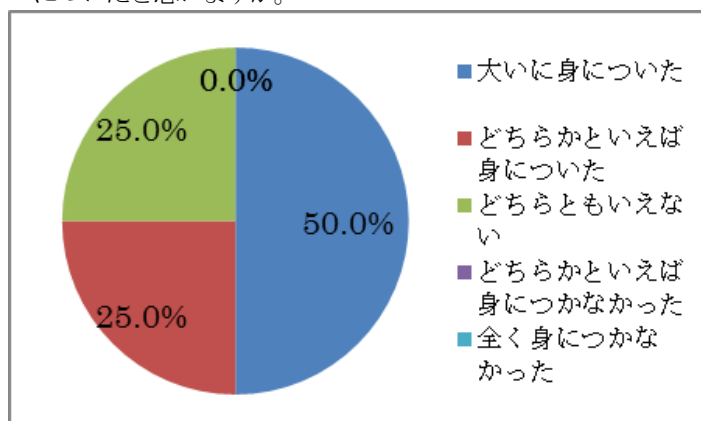
1. 「深い学識」について、あなたは2年間の博士課程前期課程において、どの程度身についたと思いますか。



3. 「高度の専門知識」について、あなたは2年間の士課程前期課程において、どの程度身についたと思いますか。



11. 「課題を設定し解決していく能力」について、あなたは2年間の博士課程前期課程において、どの程度身についたと思いますか。



Ⅱ-6. 進路・就職の状況

Ⅱ-6-1. 修了後の進路の状況

人文学研究科博士課程前期課程の就職率及び進学率は《資料37》、進路状況は《資料38》のとおりである。進路就職先としては教員や公務員など、本研究科の教育成果が活かされる職種に就く者もいるが、近年は一般企業に就職する者が増える傾向にある。

《資料37：人文学研究科（博士課程前期課程）修了者の就職率及び進学率》

修了年度	修了者数	進学者	就職者	就職希望者	進学率	就職希望者の就職率
平成22年度	45	15	21	30	33.3%	70.0%
平成23年度	51	10	19	34	19.6%	55.9%
平成24年度	47	12	17	25	25.5%	68.0%
平成25年度	51	17	20	33	33.3%	60.6%
平成26年度	39	13	14	26	35.3%	53.8%

平成27年度	41	11	18	30	26.8%	60.0%
--------	----	----	----	----	-------	-------

《資料38：人文学研究科修士（博士課程前期課程）の進路状況》

卒業年度	一般企業	学校教育・ その他教育	国家公務員・ 地方公務員	進学
平成22年度	11	6	4	17
平成23年度	7	6	3	15
平成24年度	10	6	1	11
平成25年度	8	9	2	12
平成26年度	12	1	1	13
平成27年度	9	6	3	11

人文学研究科博士課程後期課程の修了者の就職先（常勤職）は、《資料39》のようになっている。常勤職への就職は昨今、極めて困難であるが、国内外の大学の教員、各種研究機関の研究員、博物館等の学芸員、中学校・高等学校の教員など、相当数の者が専門を生かした職業に就いている。また、《資料40》に示すように日本学術振興会特別研究員（PD）に採用された者も少なくない。また本研究科は、《資料41》のように各種研究プロジェクトに優秀な大学院生を一定数、リサーチアシスタントとして採用しているほか、《資料42》のように就職難の若手研究者を支援する目的で、標準修業年限内に修了した学生を人文学研究科や文学部の非常勤講師として2年間を限度に採用している。さらに、日本学術振興会の教育改革支援プログラム等の経費によって学位取得者を学術推進研究員として採用している。このような形で、若手研究者の大学院修了後の研究を支援している。

《資料39：人文学研究科（博士課程後期課程）修了者の進路（常勤職のみ）》

修了年度	大学 教員	各種研究 機関研究 員	博物館・ 美術館等 学芸員	中学校・ 高等学校 教員	日本学術 振興会特 別研究員	本研究科 研究員	その他
平成22年度	3	2	0	3	0	3	2
平成23年度	6	2	2	0	0	1	3
平成24年度	6	2	2	1	2	1	5
平成25年度	2	2	0	0	1	3	9
平成26年度	2	1	0	0	1	4	0
平成27年度	0	0	1	0	0	3	0

《資料40：日本学術振興会特別研究員採用数》

日本学術振興会特別研究員採用者数

年度	PD	DC
平成22 年度	1	2
平成23年度	2	5
平成24年度	3	6
平成25年度	2	6
平成26年度	1	8
平成27年度	3	11

《資料41：リサーチアシスタント採用者数》

年度	採用者数	備考
平成22 年度	4	本部からの配分2名、部局負担（カシオ奨学寄付金）2名
平成23年度	6	本部からの配分のみ
平成24年度	5	本部からの配分のみ
平成25年度	4	本部からの配分のみ
平成26年度	4	本部からの配分のみ

《資料42：標準修業年限内学位論文提出者への支援（新規採用・平成26年度修了者まで）》

論文提出年度	教育研究分野	職名
平成22年度	国文学 国文学 国文学 芸術学 社会学	非常勤講師、学術推進研究員 非常勤講師、学術推進研究員 非常勤講師、学術推進研究員 非常勤講師、学術推進研究員 学術推進研究員
平成23年度	国文学 中国・韓国文学 国文学 国文学 英米文学	人文学研究科非常勤講師 学術推進研究員 学術推進研究員 学術推進研究員 人文学研究科非常勤講師
平成24年度	言語学 社会学 社会学 地理学	学術推進研究員、非常勤講師 学術推進研究員、非常勤講師 学術推進研究員、非常勤講師 学術推進研究員
平成25年度	言語学 社会学 社会学	学術推進研究員、非常勤講師 学術推進研究員、非常勤講師 学術推進研究員
平成26年度	国文学 日本史	学術研究員、非常勤講師 学術研究員

Ⅲ. 研究（文学部・人文学研究科）

Ⅲ-1. 文学部・人文学研究科の研究目的と特徴

文学部・人文学研究科は、人文学すなわち人間と文化に関わる学問を扱い、哲学・文学・史学・言語学・行動科学などの人文系諸科学を包括している。以下に文学部・人文学研究科の研究目的、組織構成、研究上の特徴について述べる。

Ⅲ-1-1. 研究目的

- 1 文学部・人文学研究科は、人類がこれまで蓄積してきた人間・文化及び社会に関する古典的な文献の原理的研究並びにフィールドワークを重視した社会文化の動態的分析を通じ、新たな社会的規範及び文化の形成に寄与する研究を行うという目的を掲げている。
- 2 この研究目的を達成するため、現行の中期目標に「卓越した研究成果を世界に発信するとともに、現代社会が抱える様々な課題にも取り組む」ことを定めている。
- 3 また「既存の学術分野の深化・発展と学際的な分野融合領域の開拓だけではなく、未来社会を見据えた重点分野における先端研究を展開し、さらに、将来これらの研究を担う、優れた若手研究者の養成・輩出に努める。」という中期目標に沿って複数の専門分野から成る教育研究組織を活用した共同研究を行うと共に、「多様で広範なレベルで国際・地域社会との連携を強め、教育研究活動の成果を広く社会に還元する。」という中期目標に沿って専門分野の業績を一般向けに解説した著書等で研究成果を広く社会へ発信する。
- 4 以上をとおして、当該分野での国内外の研究水準を引き上げ、さらに人文学のみならず他の専門分野の研究にも貢献することを目指す。

Ⅲ-1-2. 組織構成

これらの目的を実現するため、人文学研究科では《資料1》のような組織構成をとっている。

《資料1：組織構成》

専攻	講座	教育研究分野
文化構造	哲学	哲学、倫理学
	文学	国文学（国語学を含む）、中国・韓国文学、英米文学、ヨーロッパ文学
社会動態	史学	日本史学、東洋史学、西洋史学
	知識システム論	心理学、言語学（英語学を含む）、芸術学
	社会文化論	社会学、美術史学、地理学、文化資源論（連携講座：後期課程のみ）

Ⅲ-1-3. 研究上の特徴

- 1 文学部・人文学研究科の研究上の特徴は、人文学の専門分野の諸研究をたえず深化させる一方、その多様な研究方法と研究成果を地域社会の文脈に定位しながら現代日本の諸問題にも適用し、

学際的かつ国際的に展開される人文学を構築してきた点にある。

- 2 文学部・人文学研究科は「地域連携センター」「海港都市研究センター」「倫理創成研究プロジェクト」「日本文化社会インスティテュート」の4共同研究組織を設置し、様々な共同教育研究プロジェクトを異なる分野の教員が協力して実施することをおして、単独の分野のみでは不可能な幅広い視野から人文学の研究を推し進めている。
- 3 平成15年度に「地域連携センター」を設置し、日本史学、美術史学、地理学、社会学等の地域連携に関係する諸分野が協力しながら運営している。同センターの設置目的は、地域の歴史文化に関する研究成果を当該地域社会に還元し、地域の歴史的環境を生かした街づくり、里づくりを支援していくことである。
- 4 海港都市研究、国境を越える人の移動、異文化との交流による社会と文化の変容について研究するための国際的ネットワークを構築するために、平成17年に「海港都市研究センター」を設置した。同センターでは、東アジアを中心とした人と文化の接触および新しい文化創造の可能性を検討し、国という分断的な壁を乗り越えて、緩やかな公共空間を構築するための条件とプロセスを解明することを目的としている。
- 5 倫理創成研究プロジェクトを推進して、現代日本で求められている、新しい倫理システムの創成に関する研究を行っている。具体的には「リスク社会の倫理システムの構築」と「多文化共生の倫理システムの構築」の研究をおして、現代社会の倫理システムを人文学の多様な観点から分析し、科学技術のグローバル化によって特徴づけられる時代に対応した新しい倫理システムの創成を目指している。
- 6 平成26年度に共同研究組織を再編し、平成20年度に設置された「日本語日本文化教育インスティテュート」を吸収して「日本文化社会インスティテュート」を設置した。日本文化社会インスティテュートは、日本文化、社会に関する教育・研究、および日本における人文学の教育・研究を、国際交流を通じて深化・発展させることを目的とし、人文学研究科のみならず、法学研究科、EU教育府の先生方の協力を得て、運営されている。日本文化社会インスティテュートは、頭脳循環プロジェクト、日本語日本文化教育プログラム、KOJSP、グローバル人材育成などの関連諸事業を総括するとともに、上記の目的を実現するための、国際的なシンポジウムの企画、新たなプロジェクトなどを実施している。

Ⅲ-1-4. 研究をサポートする体制

文学部・人文学研究科は、平成19年度に特別研究制度（サバティカル制度）を創設し《資料2》、教育上・学内行政上、著しい貢献が認められ、当該年度に要職を免れた教員に、半年間、教育・学内行政に関する業務を免除し、研究に専念することを認めている。平成22年度から平成27年度までの間にこの制度を利用した教員の数 は《資料3》のとおりである。

《資料2：「特別研究制度に関する申合せ」平成19年6月13日制定》

人文学研究科に勤務する教員の資質向上と学部・大学院教育の発展を図るため、研究に専念する機会を与え、今後の教育研究活動に資する基盤を提供する。この機会を与えられた者は、授業及び教授会、各種委員会等の仕事を免除され、前期（4月～9月）もしくは後期（8月～1月）の半年間、国内外において研究に専念する。

＜申請資格＞

次の条件をすべて満たしていること。

1. 申請時において神戸大学文学部、神戸大学大学院文化科学研究科及び神戸大学大学院人文学研究科に3年以上在勤の者。
2. 過去5年間に於いて、夏期休業期間（8月、9月）と土曜日・日曜日・祝日を除き同一年度で通算40日以上海外出張、研修（ただし、集中講義は除く。）、休暇をとっていない者。ただし、病気休暇・産前休暇・産後休暇・忌引は上記の期間（40日）に含めないものとする。勤務年数が5年に満たない者は、神戸大学文学部、神戸大学大学院文化科学研究科及び神戸大学大学院人文学研究科着任以降の期間を対象とする。
3. 所属専修及び所属教育研究分野から教育上支障ないとの承認を受けた者。
4. 特別研究期間開始時に定年まで1年以上の在職期間を残す者。

＜選考規程＞

1. 年度ごとに若干名とする。
2. 教育上及び行政事務上の支障がないものと認定された者に限る。
3. 選考委員会において次の条件を記載順に考慮し候補者を選定する。
（ア）優れた研究計画を有する者。
（イ）行政事務において貢献度の高い者。
（ウ）「申請資格」2項の条件を長期間満たしている者。
4. 選考委員会は研究科長、副研究科長及び各講座から1名ずつの委員、教務委員（副）、以上9名により構成される。
5. 選考委員会は特別研究期間の前年7月31日に申し込みを締め切り、9月30日までに選考を行った後、その結果を10月1回目の教授会に諮る。

＜附則＞

1. 特別研究制度を利用しても、その後の授業負担は増えないものとする。
2. この制度が円滑に実施できるよう、必要に応じ、所属専修及び所属教育研究分野に対し非常勤講師枠配分等の措置を講ずるものとする。
3. 特別研究期間中の当該研究者の行政事務（委員会委員等の職務）は他の教員が代替する。
4. 特別研究期間中は国内外での非常勤講師等を禁止する。ただし、選考委員会がやむをえない事情があると認めた場合には、これを許可することがある。
5. 特別研究期間中の制度を利用した者は、研究期間終了後直ちに研究報告書を教授会へ提出する。

附 則

この申合せは、平成19年6月13日から施行する。

《資料3：制度を利用した教員数》

平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
1人	2人	なし	3人	2人	2人

*平成23年度の2人は、神戸大学の若手教員の海外派遣制度による。

文学部・人文学研究科は人文学の横断的共同研究の活性化のため、平成18年度から「グローバル化時代における価値規範のあり方」を研究主題に、30代の若手教員（15名程度）を中心に、グロー

バリエーション時代における価値規範のあり方について、人文学の諸領域を横断する共同研究を継続的に進めている。なお、平成 22 年度には、このプログラムに対して、昭和報公会からも 50 万円の奨学寄付金が寄せられている。この取り組みに対して、平成 18 年度から継続して部局による支援が行われている。平成 26 年度からは、部局長裁量経費の共同研究組織支援の一環として支援するようになった。以上の施策により、第 2 期中期計画期間にも科学研究費研究成果公開促進費に若手研究者が 3 名採択されたほか、第 11 回日本学術振興会賞受賞等、若手教員のべ 8 名の受賞者を出している。

Ⅲ-2. 研究活動の状況

文学部・人文学研究科の教育研究の性格を反映して、研究活動は論文・著書の執筆および研究発表に集中している。また、研究活動にあたっては、科学研究費補助金のみならず、各種の外部資金を積極的に獲得して、研究の水準を向上させている。

Ⅲ-2-1. 研究実績の状況

本研究科の平成 22 年度から平成 27 年度の論文、著書、研究発表の総数は年間平均 106.3 件で、1 人約 1.7 件である《資料 4》。最も多い心理学専修の研究業績は平成 26 年度で全体の 15.25%、次いで日本史学専修は平成 26 年度で全体の 12.77%を占める。研究業績は多言語で行われ、これは本研究科の特色および研究目的に合致する。研究業績の学術的意義の高さを示すものとして、《資料 5》に平成 22 年度以降の各種学会賞等の受賞者をあげる。

《資料 4：研究活動実施状況（平成 22～27 年度）》

	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平均
論文数	63	71	79	93	94	108	84.7
著書数	22	32	31	30	36	51	33.7
研究発表	113	86	84	84	152	120	106.5

《資料 5：平成 16 年度以降の受賞》

年度	受賞者	賞の名称
平成 22 年度	平井晶子 喜多伸一 野口泰基	第 12 回日本人口学会賞 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション賞 第 29 回国際臨床神経生理学会奨励賞
平成 23 年度	石井敬子	The Michael Harris Bond Award, The Asian Association of Social Psychology
平成 24 年度	嘉指信雄 喜多伸一	科学技術社会論・柿内賢信記念賞実践賞 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション賞
平成 25 年度	石井敬子 濱田麻矢 濱田麻矢	第 31 回村尾育英学術奨励賞 第 10 回太田勝洪記念中国学術研究賞 2013 年度日本中国学会賞
平成 26 年度	石井敬子 原口剛	第 11 回日本学術振興会賞 2013 年度日本地理学会賞（優秀論文部門）

平成 27 年度	大塚淳 大坪庸介 石井敬子	Marjorie Grene Prize (International Society for History, Philosophy, and Social Studies of Biology) 2015 年度日本社会心理学会賞（優秀論文賞） 平成 27 年度神戸大学学長表彰
----------	---------------------	--

研究活動は国際的な場でも積極的に行われている。平成 27 年度の論文は 4 割以上が海外で発表され、著作も平成 27 年度に 9 件あり、国際会議の研究発表が約 3 割を占める《資料 6》。国際会議の講演件数は平成 22 年度が 4 件に対し平成 26 年度から 40 件を超えており、国際的な活躍が飛躍的に増加している《資料 7》。

《資料 6：平成 26・27 年度研究活動内訳》

年度		平成 26 年度	平成 27 年度
論文数	国内	57	60
	海外	37	48
著書数	国内	31	43
	海外	5	8
研究発表	国内	105	75
	海外	47	45

《資料 7：国際会議での招待講演・基調講演件数の推移（平成 22～27 年度）》

年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
件数	4	10	3	11	47	16

Ⅲ-3. 競争的外部資金の獲得状況

競争的外部資金の獲得状況を《資料 8》に示す。平成 27 年度に 159,000 千円を超え、教員 1 人あたり約 2,560 千円となっている。第 1 期と第 2 期の中期計画の期間全体を比較すれば科学研究費補助金に関して採択率、獲得金額ともに増加傾向にある。

《資料 8：競争的外部資金の獲得状況（平成 22～27 年度）》

年度	科研費	共同研究	受託研究	寄附金	その他 競争的資金	合計
平成 22 年度	98,210	62,452	7,147	4,250	2,059	174,118
平成 23 年度	70,680	32,723	6,244	5,850	2,059	117,556
平成 24 年度	72,337	43,633	8,884	7,340	1,479	133,673
平成 25 年度	67,700	24,111	8,884	2,850	1,200	104,745
平成 26 年度	76,200	24,111	16,992	1,500	16,298	135,101
平成 27 年度	84,390	8,088	16,033	19,640	31,700	159,851

金額（千円）

Ⅲ-3-1. 科学研究費助成事業

科学研究費助成事業の申請件数が年間平均 42.8 件で、平成 27 年度の応募対象者 1 人あたりの申請件数は 0.79 件である。平成 22 年度から平成 27 年度までの獲得件数は平均 45.6 件(新規 18 件)で獲得額は平均 77,025 千円である。申請件数は平成 22 年度の 36 件に比べ平成 25 年度以降 50 件を超え、科研費獲得に積極的になった《資料 9》。また平成 26 年度には基盤研究 (S) が 1 件新規採択された。

《資料 9 : 科学研究費助成事業への申請・獲得件数、獲得額に関するデータ》

年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平均
申請件数	36	35	34	56	53	49	42.8
獲得件数 (新規)	44 (13)	47 (35)	49 (12)	45 (13)	43 (17)	51 (19)	45.6 (18)
金額(千円)	98,210	70,680	72,337	67,700	76,200	84,390	77,025

Ⅲ-3-2. 共同研究、受託研究費 の状況

平成 22 年度から平成 27 年度の共同研究、受託研究の推移を《資料 10》に示す。

《資料 10 : 共同研究、受託研究の実施件数及び金額》

年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
共同研究件数	5	3	6	2	2	3
金額(千円)	62,452	32,723	43,633	24,111	24,111	8,088
受託研究件数	8	7	7	7	9	6
金額(千円)	7,147	5,944	8,884	8,884	16,992	16,033

共同研究、その他競争的資金として学術機関や省庁からの研究費は主に日本学術振興会から受入れている。東日本大震災を契機に設立された東北大学災害科学国際研究所や国立国語研究所等からの受入れ実績もある。平成 27 度は合計 3 件 8,088 千円を受入れた《資料 11》《資料 12》。

《資料 11 : 文部科学省・日本学術振興会等からの大学改革等補助金（共同研究）》

相手方	期 間	題 目	金額 (千円)
			上段直接経費 下段間接経費
相手方	平成 20～ 22 年度	大学院教育改革プログラム (古典力と対話力を核とする人文学教育一学域横断的教育システム に基づくフュージョンプログラムの開発)	77,871 5,316
	平成 22～ 24 年度	国際共同に基づく日本研究推進事業 (日本サブカルチャー研究の世界的展開)	17,986 4,269
	平成 24～ 27 年度	国際化拠点整備事業費補助金 (グローバル人材育成推進事業)	31,710 0
			(文学部分)

日本学術振興会	平成 20～24 年度	若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム[ITP] (東アジアの共生社会構築のための多極的教育研究プログラム)	68,775 0
	平成 21～24 年度	若手研究者海外派遣事業・組織的な若手研究者等海外派遣プログラム (国際連携プラットフォームによる東アジアの未来を担う若手人文研究者等の育成)	46,200 0
	平成 25～27 年度	若手研究者戦略的海外派遣事業補助金 (頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム事業)	55,212 0
	平成 27 年度	JSPS サマー・プログラム	159 0
国際交流基金	平成 24 年度	国際交流基金・知的交流会議助成プログラム 「世界マンガ・アニメネットワーク国際会議」	2,140 0
神戸市	平成 24 年度	中国人材育成事業研修生受入 「古代日本における仏教と神道の展開についての諸問題」(方海燕)	600 0
直接経費合計			300,653
間接経費合計			9,585

《資料 12：学術機関・省庁からの受入実績（その他競争的外部資金）》

相手方	期 間	題 目	金額 (千円) 上段直接経費 下段間接経費
日本学術振興会	平成 21～23 年度	社会学理論分野に関する学術動向の調査研究	5,991 185
	平成 20～22 年度	平成 20 年度二国間交流事業共同研究・セミナー「日仏二社会の珪肺・アスベスト疾患—空間的マッピングと人文学的研究」	6,000 0
	平成 26～29 年度	社会心理学・神経科学・内分泌学の連携による文化差の遺伝的基盤の解明	7,350 0
科学技術振興機構	平成 26～28 年度	多世代視覚障害者移動支援システムにおける AR・VR 技術の社会実装	10,775 3,233
海南大学日本語学部	平成 24 年度	中国人材育成事業研修生受入 「古代日本における仏教と神道の展開についての諸問題」(方海燕)	279 0
東北大学災害科学国際研究所	平成 24～25 年度	東日本大震災の震災資料の所在調査および収集・保存の手法等に関する検討—宮城県岩沼市をフィールドとして—	2,400 0
国立国語研究所	平成 26～27 年度	統辞・意味解析情報の付与	798 0
津田塾大学	平成 26 年度	研修員受入	229 0
大阪経済大学	平成 27 年度	研修員受入	115 0
立命館大学	平成 27 年度	研修員受入	57 0
直接経費合計			33,994
間接経費合計			3,418

平成 22 年度以降に地方自治体・民間企業との間で実施した受託研究は《資料 13》のとおりである。特に日本史学分野で自治体からの研究費等の受入れが顕著である。

《資料 13：地方自治体・民間からの受入実績（受託研究）》

相手方		期 間	題 目	金額（千円） 上段直接経費 下段間接経費
自治体関係	三田市	平成 26 年度	旧三田藩主九鬼家資料の総合調査	230 1
	(財) 神戸都市問題研究所 (神戸市文書館)	平成 18～27 年度	歴史資料の公開に関する研究	13,777 1,379
	丹波市	平成 22 年度	丹波市内古文書等歴史資料調査	7,523 0
	加西市	平成 20～22 年度	鵜野飛行場関係歴史遺産基礎調査	1,535 0
	福崎町	平成 22～23 年度	①福崎町の地域歴史遺産掘り起こし ②大庄屋三木家住宅の活用案および改修	2,850 150
	小野市	平成 22～26 年度	小野市下東条地区地域歴史調査	1,500 0
	養父市	平成 22 年度	大規模史料群（明延鉦山資料）の詳細調査	496 0
	明石市	平成 23 年度	明石藩家老関係資料目録作成業務委託	1,400 0
	朝来市	平成 22～23 年度	石見銀山と生野銀山との共同研究に関する中近世史の調査研究および歴史資料の保存活用についての研究	600 0
	灘区役所	平成 23 年度	「麻耶道のとおる村の歴史」関係資料調査および講演会開催事業	600 0
	朝来市	平成 24～26 年度	朝来市枚田家文書を中心とした史料調査研究	1,500 0
	明石市	平成 24～25 年度	明石藩士黒田家関連資料調査・補修	3,100 0
	明石市	平成 26～27 年度	明石藩関連資料調査・公開業務	3,100 0
	明石市	平成 26～27 年度	明石市における地域史料の調査研究業務委託	3,100 0
	福崎町	平成 24～27 年度	福崎町の地域歴史遺産掘り起こしおよび大庄屋三木家住宅活用案の作成等	6,000 0
	丹波市	平成 24～27 年度	兵庫県丹波市における地域資源としての歴史文化遺産（古文書等）の調査および成果の刊行	7,560 0
	三木市	平成 26～27 年度	三木市史編さん事業	15,800 0

小野市	平成 27 年度	小野市市場地区地域歴史調査及び地域新聞「新東播」データベース化の研究	300 0
朝来市	平成 27 年度	朝来市石川家文書の史料調査研究並びに山田家文書調査に係る指導助言	500 0
西脇市	平成 27 年度	西脇小学校校舎改修基本計画・基本設計等業	6,514 240
加西市	平成 27 年度	青野原俘虜収容所調査委託	1,204 0
神戸市	平成 27 年度	神戸村文書の解読（翻刻）に関する研究	310 31
三田市	平成 27 年度	旧三田藩主九鬼家資料の総合調査	210 21
福崎町	平成 27 年度	辻川界限ジオラマ模型制作	100 0
その他	日本電信電話株式会社コミュニケーション科学基礎研究所 平成 26 年度	視線一致知覚範囲に関する個体密度および文化差の基礎検討	180 20
直接経費合計			79989
間接経費合計			1602

Ⅲ-3-2. 奨学寄附金の受け入れ

人文学研究科・文学部が財団・団体からの受け入れた奨学寄附金に関する平成 22 年度から平成 27 年度の金額・内容は《資料 14》のとおりであり、平成 22 年度から平成 27 年度の受け入れの推移は、《資料 15》のとおりである。平成 27 年度には、合計 6 件 16,033 千円を受入れた。

《資料 14：財団・団体からの奨学寄付金・助成金の受入件数及び金額》

年度	助成団体名等	寄付金名称	寄附目的	寄附金額
平成 22 年度	(財) 昭和報公会	昭和報公会学術研究助成金	共生学の構築に関する学術研究助成のため	500,000
	(財) 村田学術振興財団	村田学術振興財団研究助成金	人文学研究科に対する研究助成のため	200,000
	(財) 三菱財団		コータン仏教史の考古・美術史的学的研究に対する研究助成	1,400,000
	(財) 三菱財団		鉦山地域社会史確立のための基礎的研究に対する研究助成	2,100,000
	伊丹酒造組合	日本近世酒造史奨学寄付金	伊丹酒造組合文書の調査	50,000
平成 23 年	出光文化福祉 (財)	出光文化福祉財団 美術品修復助成金	美術品修復事業「絹本着色 釈迦三尊十六善神像」の修復	2,600,000
	(財) 三菱財団		コータン仏教史の好古・美術史的学的研究に対する研究助成	100,000

度	(財) 三菱財団		コータン仏教史の好古・美術史学的研究に対する研究助成 (※1)	850,000
	(財) 三菱財団		「鉾山地域社会史確立のための基礎的研究―一生野銀山石川家の分析を中心に―」に対する研究助成	300,000
	(財) 三菱財団		「鉾山地域社会史確立のための基礎的研究―一生野銀山石川家の分析を中心に―」に対する研究助成 (※1)	400,000
	(財) 三菱財団		「鉾山地域社会史確立のための基礎的研究―一生野銀山石川家の分析を中心に―」に対する研究助成 (※1)	400,000
	松下幸之助記念 (財)	松下幸之助記念財団研究助成金	謝罪スタイルの社会的基盤：適応論アプローチを用いた検討	500,000
	(財) 福武学術文化振興財団	福武学術振興財団 歴史学・地理学研究助成	「昭和初期京都の地域構造が盛り込まれた『京都市明細図』の歴史地理学的意義」に対する研究助成	700,000
平成24年度	公益財団法人稲盛財団	稲盛財団研究助成金	ポスト・モンゴル期西アジアの国際関係に関する基礎的研究：マムルーク朝・ティムール朝関係を中心に	1,000,000
	(財) 三菱財団	三菱財団助成金	コータン仏教史の好古・美術史学的研究に対する研究助成	350,000
	日本心理学会	日本心理学会「国際学会シンポジウム企画補助金」	第30回国際心理学会議において、シンポジウム“Cultural/linguistic specifications of cognitive functions for communication”を開催するため	720,000
	(財) 三菱財団	三菱財団助成金	「鉾山地域社会史確立のための基礎的研究―一生野銀山石川家の分析を中心に―」に対する研究助成	800,000
	公益財団法人 JFE21 世紀財団	JFE21 世紀財団アジア歴史研究助成	「近世ユーラシア大陸の威信言語研究にもとづく、「東洋学」の再構築」に関する研究助成	2,140,000
	公益財団法人 俱進会	科学技術社会論・柿内賢信記念賞研究助成	放射性廃棄物の軍事利用である劣化ウラン弾を巡る科学的・政治的・法的問題の再検討	400,000
	特例民法法人上廣倫理財団	上廣倫理財団研究助成金	学術研究のため	600,000
	公益財団法人 中山隼雄科学技術文化財団	中山財団研究助成金	触地図上の宝探しゲームによる中途失明者の自律移動支援用具に対する親和性の向上	1,330,000
平成25年度	公益財団法人村田学術振興財団	村田学術振興財団研究助成金	集団間葛藤から和解へ：謝罪と許しの心理メカニズムに関する実証研究に対する研究助成	1,200,000
	メトロポリタン東洋美術研究センター	メトロポリタン東洋美術研究センター助成金	「江戸時代後期から明治時代初期の光琳蒔絵に関する考察」研究にかかる研究助成	250,000
	公益財団法人上廣倫理財団	上廣倫理財団研究助成金	学術研究のため	600,000

	公益財団法人中山隼雄科学技術文化財団	中山財団研究助成金	人文学研究に対する助成	800,000
平成26年度	クリタ水・環境科学振興財団	クリタ水・環境科学振興財団助成金	研究への助成	600,000
	株式会社ユーハイム 有限会社ジャマンホームベ ーカリーエッチフロイト・リーフ 株式会社ケーニヒス クローネ	「第一次世界大戦開戦 100年と青野原捕虜収 容所」奨学寄附金	「第一次世界大戦開戦100年と青野原 捕虜収容所」に対する研究助成	300,000
	一般財団法人地域地 盤環境研究所	遺跡分布情報の整理	先史時代の遺跡分布情報への助成	300,000
	出光文化福祉財団調 査研究事業助成	出光文化福祉財団調査 研究事業助成	後白河院政期における天平絵画及び唐 宋絵画の受容に関する調査研究に対す る研究助成	300,000
平成27年度	マイアミ大学教授 Michael McCullough	ヒトと赦しの進化心理 学に関する研究助成	マイアミ大学の研究責任者 Michael McCullough からの研究分担のため	17,440,164 (※2)
	公益財団法人鹿島美 術財団	鹿島美術財団美術に関 する調査研究の助成	後白河院政期における天平絵画及び唐 宋絵画の受容に関する調査研究に対す る研究助成	540,000
	公益財団法人村田学 術振興財団	公益財団法人村田学術 振興財団 助成金	カリフ制の歴史と歴史叙述：マムルー ク朝時代を中心に	1,110,000
	出光文化福祉財団調 査研究事業助成	出光文化福祉財団調査 研究事業助成	「地獄草子並びに関連諸作品の調査・ 研究」に対する研究助成	550,000

※1 同名の奨学寄付の申込みが同一年度に複数回あったため、別の欄に分けて記している。

※2 この寄付金は精算払いとなっており、現時点で最終的にいくら入金されるかは正確に分からない。よって、あくまで見込額として、申込時の上限の金額（申込日をレート換算日とした）を記載している。

《資料15：奨学寄付金・助成金の推移》

	平成 22年度	平成 23年度	平成 24年度	平成 25年度	平成 26年度	平成 27年度
件数	5	8	8	4	4	4
金額(千円)	4,250	5,850	7,340	2,850	1,500	19,640

第2部

I. 外部資金による教育研究プログラム等の活動

I-1. 科学研究費補助金基盤研究（S）（研究代表者：奥村弘、課題番号：26220403）

「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—」

本科研（S）は、2009年度に採択された科研（S）「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」（研究代表者：奥村弘、課題番号：2122202、研究期間：平成21年度～平成25年度）に引き続き採択されたもので、「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」の成果を受けてさらなる研究の深化を狙ったものである。研究期間は平成26年度から平成30年度までとなる予定である。

[1] 研究の全体構想と具体的目的

急激な人口減、流動化の中で、日本各地で維持されてきた膨大な地域歴史資料は消失の危機にある。地震災害、大規模風水害の続発は、この事態を加速させている。我々は、科研（S）「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」で、阪神・淡路大震災以来の大災害時に集積されたデータを基本に、地域歴史資料を次世代に引き継ぎ、住民の歴史認識を豊かにする地域歴史資料学構築を進めた。研究途中、東日本大震災が起こり、広域災害、津波、放射能被曝という状況に対応することを迫られた。また、大災害が継起する日本列島の地域社会において、災害を記憶し、災害に強い「災害文化」形成が喫緊の課題となっている。これらに対応しうる地域歴史資料学を従来成果の上に確立することが研究目的である。

[2] 研究の学術的背景

① 研究動向及びその位置づけ

地域歴史資料は、歴史的アプローチを取る人文社会科学のみならず、歴史的な事象を取り扱う地震学等の自然科学においても実証研究の基礎をなす重要な資料であるとともに、住民にとっては地域文化の基礎となるものである。しかしながら中山間部（平野の周辺から山地に至る、平坦な耕地が少ない地域）を中心とする急激な人口減少、都市部での流動化、災害の多発化で、地域歴史資料は消失の危機にある。地域歴史資料を保全活用を含めて体系的に研究する学問領域としての地域歴史資料学が生まれてくるのは、阪神・淡路大震災における歴史資料ネットワークの歴史資料保全活動と、それを基礎とした歴史資料学研究がその嚆矢である。同ネット代表である研究代表者奥村は、阪神・淡路大震災に即した分析を1996年日本史研究会大会特設部会「阪神淡路大震災と歴史学」で

行い、はじめてこの課題を提起した。1998年全国歴史資料保存利用機関連絡協議会大会、2000年歴史学研究会総合部会等で報告を行うなど、現在に至るまで関係学会での議論を深め、それを論文化することで、学会における地域歴史資料学の必要性について共通認識を高めてきた(研究業績参照)。

阪神・淡路大震災以降、各地で災害が継起する中、阪神・淡路大震災以降の研究を基礎として、歴史資料保全活動とそれを支える組織が生まれ、歴史文化関係者の中で全国的な課題としていっそう強く認識されるようになった(災害対応型：山陰ネット(2000)、愛媛ネット(2001)、宮城ネット(2003)、福井ネット・新潟ネット(2004)、宮崎ネット(2005)。予防型：岡山ネット(2005)、山形ネット(2008)、福島ネット(2010)など)。

地域歴史資料をめぐる問題が集約的に問われた被災各地で、その保全にあたってきた歴史学、文化財保存科学、建築史等の研究者は、2009年から、奥村を研究代表者とする科研(S)「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」で、地域歴史資料学構築のための研究を展開している。同研究は、2012年に行われた研究進捗評価でA評価を受け、「資料保全の課題についての学界での共有認識形成への寄与は大きい」という評価を受けるなど、順調に展開している。また奥村は、本研究の成果を基礎に、『大震災と歴史資料保存』(2012)を刊行し、さらに通常時の課題について、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターでの実践的研究を総括して『「地域歴史遺産」の可能性』(2013)を刊行した。また科研の成果と関連して、東日本大震災以降に岩手ネット、茨城ネット、千葉ネット、神奈川ネット、和歌山ネット、徳島ネットが生まれた。

② 着想に至った経緯と研究の新たな展開内容

上記の科研(S)の研究期間中に東日本大震災が起こり、代表者及び分担者の多くは、本研究の中間的な成果(東日本大震災復興構想会議に提出された復興に向けた神戸大学の提言「第8章文化と歴史の継承」に集約)の上に、東日本大震災に対する実践的な対応を進めることとなった。科研(S)の研究も2011年後半から、被災地での実践的研究を重視することとなり、そこで新たな課題を突きつけられることとなった。それは、①広域災害、津波災害、放射能被曝等に対応しうる実践的方法をいかに開発するのか、②大災害が継起する日本列島において、地域社会が災害を記憶し、災害に対応しうる能力を持つ「災害文化」形成を担いうる地域歴史資料学をいかに確立するのか、という2つの課題である。代表者及び分担者は、このような危機意識を共有する中で、進行中の東日本大震災への対応及び、必ず起こる海溝型地震等の大災害を想定し、関係する研究者を加えて、この課題に対応するための研究をさらに展開しようとするに至った。

[3] 課題の設定・期間内の研究対象

本研究では、東日本大震災によって新たに突きつけられた2つの課題を4つの内容で研究し、これまでの成果を結合し、地域歴史資料学の確立をはかり、その成果を国内外に発信することを5年間の課題とする。

第1の課題は、これまでの直下型地震や大水害にはない、海溝型巨大地震が直接的に提起するもので、広域災害、津波災害、放射能被曝等に対応しうる実践的方法の開発である。これは、今後も10年を超える長期にわたる東日本大震災での実践的対応を支えるとともに、必ず起こる将来の巨大

地震への対応を可能とするものである。そのために、内容1：これまで蓄積してきた災害時の方法論を踏まえた、海溝型地震被災地での歴史資料保全活用についての具体的対応論を、東日本大震災での歴史資料保全活動のデータを基礎に研究する。内容2：巨大地震における地域歴史資料保全のためには、広域での地域歴史資料についての情報の共有と共同した被災地への対応が必要となる。地域歴史資料は、ほとんどが未指定文化財であり、個人宅やコミュニティーの集会所等、多様な保存形態がとられている。これを捕捉するために、地域歴史資料が地域社会の中に蓄積される過程そのものの研究を進め、さらに国際的な比較研究をとおして、地域歴史資料の全国的把握と共有化のための学術的な指針、さらに具体的対応論を提起することが必要である。

第2の課題は、大災害が継起する日本列島においては、地域社会が災害を記憶し、災害に対応しうる能力を持つ「災害文化」を形成することが極めて重要であり、これに資する地域歴史資料学の確立のために、新たな研究領域を開拓することである。そのために、内容3：大災害の地域での実態を明らかにする災害資料を、地域歴史資料として位置づけ、「災害文化」形成の基礎として次世代に継承していくための新たな研究領域を開拓する。歴史的イベントとなりつつある阪神・淡路大震災、さらに中越地震等について、収集され続けている資料を活用し、諸外国の事例も参照しながら、震災を記憶として繋いでいくための実践的研究を進める。またその成果も活用し、東日本大震災の記憶継承のための地域歴史資料保存について実践的研究を展開し、これらの成果をこれまで構築してきた地域歴史資料学に結合する。内容4：大災害は、日本の地域社会の歴史的展開において、現在に至るまで重要な要素として組み込まれ続けている。災害そのものを日本の地域社会の歴史と現在に位置づけ、地域社会で「災害文化」を形成していくために、災害史研究と地域歴史資料学との結合による「災害文化」形成のための新たな研究領域の開拓を進める。

[4] 学術的な特色

- ① 東日本大震災を踏まえて地域歴史資料学を確立することで、地域を基礎とした歴史的アプローチを手法とする人文社会諸科学の基礎的研究条件を維持し、災害等リスクの増大する現代社会における人文社会諸科学研究の基盤を構築する点。
- ② 国際文書館会議（ICA）や国際復興プラットフォーム（IRP）と連携することで、次世代への記憶の継承という国際的に重要な研究を日本から発信する点。

[5] 独創的な点

- ① 阪神・淡路大震災から東日本大震災に至る自然災害時の歴史資料保全活動に基づいて蓄積された膨大なデータを基礎に課題意識を共有し、歴史学研究を中心に多様な研究分野が参加して、地域歴史資料学を共同で確立していく革新的な手法をとっている点。
- ② 災害被災地において、残されてきた歴史資料と現在作られつつある災害資料を一体のものとして把握する研究手法をとる点。
- ③ 共同研究者が現状について共有認識を深めるために、被災地調査、ワークショップ、現地研究会を組み込んだ「被災地フォーラム」を毎年開催し、被災地域の特色や地域歴史資料の現状を一

体的に把握するという独創的な研究手法。

[6] 予想される結果

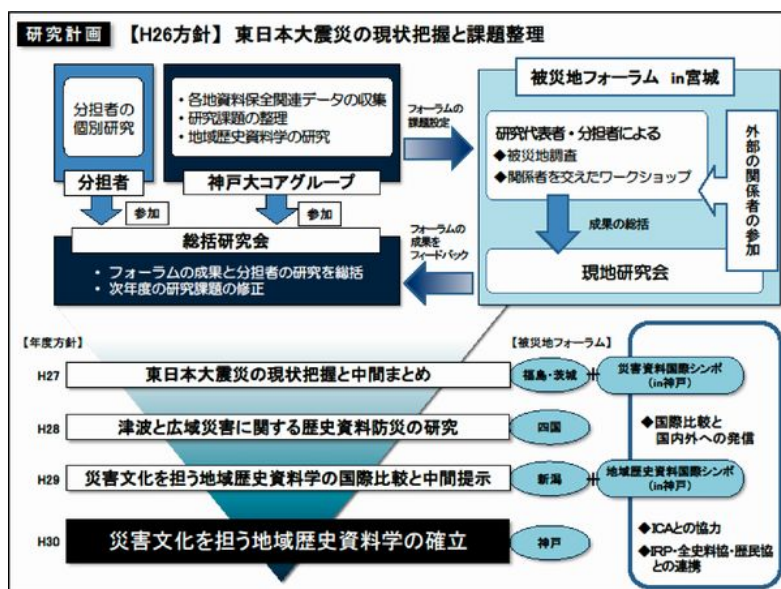
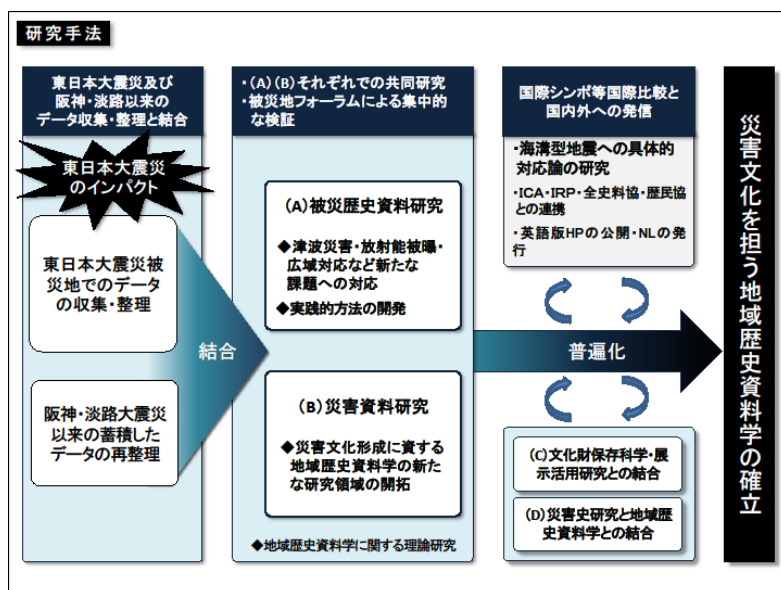
- ① 海溝型地震における広域災害、津波災害、放射能被曝等に対応しうる実践的方法を開発することで、東日本大震災で継続中の地域歴史資料保全活用を促進するとともに、必ず起こる海溝型地震に対応しうる実践的方法を研究者及び地域社会に提示しうる。
- ② 災害の記憶の継承を含む地域歴史資料学を確立することで、阪神・淡路大震災から東日本大震災に至る災害の記憶の継承に指針を与え、大災害の記憶を次世代に引き継ぎ、地域における「災害文化」形成に資するという意義を有する。
- ③ 日本の先駆的研究を世界に発信することで、世界各地の地域歴史資料を消滅の危機から救う可能性を拡大しうる。

[7] 研究の意義と波及効果

- ① 地域の歴史文化を研究するとともに、その伝統を継承するという緊急性が高く重要な課題に対して、地域歴史資料学は、それに取り組むための学問的基盤をなし、社会に対する貢献度は極めて高い。
- ② 自然災害時の歴史資料保全のための具体的かつ実践的な学術的指針を提示することによって、歴史研究者の、大規模災害時における歴史資料保全のための適切かつ迅速な対応能力を培うとともに、保全のための体制の速やかな整備を実現し、結果的に地域歴史資料の保全の面で社会的貢献を果たすこととなる。
- ③ 大規模自然災害時の日本の先駆的な研究を世界に発信することによって、国際的にも地域歴史資料を滅失の危機から救うことになる点でも大きな意義を有する。

[8] 研究計画・方法の要旨

本研究では、災害文化を担う地域歴史資料学を確立するために、東日本大震災被災地の実践的研究で蓄積されたデータと、阪神・淡路大震災以来の研究成果を結合することに焦点を当て研究を進める。そのために第1に、東日本大震災での実践的な成果を収集・蓄積し、これを現地での調査・ワークショップを含めて集中的に検証するという手法をとる。特にこれまで経験がない海溝型地震及び放射能被曝についてのデータを分析し、広域対応可能な方法論を確立する。第2に、災害の記憶を次世代に繋ぐ災害資料を地域歴史資料学の中に位置付けるために、阪神・淡路以来の実践的な研究及び東日本大震災の現状を踏まえ新たな方法論を開拓する。そのため国際比較による知見を活用し、文化財保存科学、災害史研究、歴史系博物館による展示活用研究の成果を地域歴史資料学に結合するための共同研究を展開する。そして、その成果を国内外に発信するとともに、今後想定しうる海溝型地震や大規模災害への実践的対応策を提示する。



なお、科研（S）「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」（課題番号 2122202、研究期間平成 21 年度～平成 25 年度）の成果としては、平成 25 年度に以下のように総括されている。

[9] 平成 25 年度における活動

災害資料フォーラム「阪神・淡路大震災から東日本大震災へ」（平成 25 年 10 月 20 日、神戸大学 瀧川記念学術交流会館）を開催するなど、さまざまな研究会、フォーラムでその成果を発信してきた。その間も阪神・淡路大震災や東日本大震災の被災地を中心として聞き取り調査、資料の所在調査等を進めてきた。特記すべきは、平成 22 年ラクイラ地震、平成 24 年イタリア北部地震によって多数の死者、負傷者を出したイタリアに本科研メンバーが出張したことである。その折、各被災地

の資料保存等について、有意義な意見交換が行われた。(なお、具体的な活動については、<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~chiiki/nisshi.html>参照のこと)。

さらに、平成 25 年度には本科研の最終年度ということもあり以下の 2 つの大きな企画を行った。

①国際シンポジウムの開催

5 年間にわたる研究蓄積を外部に発信する目的から、平成 25 年 12 月 1 日に神戸大学梅田インテリジェントラボラトリにて地域資料国際シンポジウム「地域の歴史資料をとりまく世界の諸相」を開催した。

このシンポジウムには、国内はもちろん、韓国国史編纂委員会の金炫榮氏、清華大学の劉曉峰氏、ボン大学の井上周平氏などを講演者として招き、国内外の地域歴史資料学のあり方について活発な意見交換が行われた。

各講演者の題目は以下のとおりである。

奥村弘 (神戸大学)「シンポジウムの趣旨と科研 S の成果」

佐藤大介 (東北大学)「宮城での資料保全の歩みー「ふるさとの歴史」を守り伝えるために」

檜山幸夫 (中京大学)「台湾における歴史資料の保存についてー日本統治期公文書資料群を中心に」

金炫榮 (韓国国史編纂委員会)「朝鮮時代の実録と歴史資料の保存」

劉曉峰 (清華大学)「収集と保存ー中国の古文書事情」

真下裕之 (神戸大学)「インドにおけるイスラーム関連資料の現状について」

井上周平 (ボン大学)「ドイツにおける歴史資料保全と文書館のあり方ーケルン市歴史文書館倒壊の事例から」

M.ウィリアム・スティーラー (国際基督教大学) コメント

②書籍の刊行

成果を書籍として刊行する企画である。東京大学出版会から、『歴史文化を大災害から守るー地域歴史資料学の構築』(2014 年 1 月)を刊行した。28 本の論文が掲載され、各論は、災害前に整えておくべき体制から、災害直後の救出方法や体験、被災資料の修復方法、救出した資料をどう利活用するかなど多岐にわたる。(内容については、<http://www.utp.or.jp/bd/978-4-13-020152-0.html>を参照のこと)。

[10] 平成 26 年度における活動

科研 (S)「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立ー東日本大震災を踏まえて」(課題番号 60185551、研究期間平成 26 年度～平成 30 年度)の初年度となる平成 26 年度は、2014 年 11 月 29 日に、被災地フォーラム「ふるさとの歴史と記憶をつなぐ」を仙台市博物館で開催した。このフォーラムは、東日本大震災の現状把握と課題整理を目的とし、岩手・宮城・福島での被災資料保全と震災記録保全の現状と課題について活発な議論がなされた。また、11 月 30 日には石巻市内において被災地巡検を行なった。

また、学内外あわせて 4 回の地域歴史資料学研究会を以下のとおり開催した。第 1 回研究会 (2014

年9月12日、仙台)、第2回研究会(兼第4被災地図書館との情報交換会、2015年1月23日、神戸大学附属図書館)、第3回研究会「2014年8月豪雨災害対応研究会」(3月24日、神戸大学文学部)、第4回研究会「淡路市地域資料調査会」(3月27日、淡路市)。これらの各研究会をとおして、東日本大震災被災地における資料の保全はもとより、2014年8月に西日本を中心に大きな被害をもたらした豪雨災害への対応について、現地で被災資料保全活動に従事した関係者らや東日本大震災被災地の研究者らを交えて検討した。なお、この2014年8月豪雨に際しては、科研メンバーが、丹波市・福知山市・広島市などでの被災資料保全活動を支援し、その実践的な災害対応を踏まえて災害時の資料保全論の検討を行った。また、阪神・淡路大震災から20年、中越地震から10年を迎えるにあたって、災害資料研究のこれまでの蓄積を踏まえて、災害資料の保全活用や災害記憶の歴史化などについて議論を深めた。

さらに、平成26年度は他団体と協力し、次のような研究事業を実施した。まず、独立行政法人国立文化財機構主催による同機構アソシエイト・フェローを対象とした研修(2014年12月8日～10日、神戸大学文学部)に科研(S)が協力した。同研修では阪神・淡路大震災における資料救出やその後の活用、南海トラフ地震への対策などがテーマとなった。また、2015年2月14～15日には、歴史資料ネットワークと独立行政法人国立文化財機構の主催による「全国史料ネット研究交流集会」(神戸国際会館3階・野村證券神戸支店アネックスホール)に、科研(S)が共催した。この研究交流集会は、阪神・淡路大震災以降、全国で地域歴史資料保全を担っている各団体が一同に会し、災害時やそれに備えた日常時のあり方を展望するとともに、各地域のネットワークの活動や情報・ノウハウを共有することを目的としたものである。2日間あわせて約240名が参加し、熱気を帯びた議論が繰り広げられ、『『地域歴史遺産』の保全・継承に向けての神戸宣言』が採択された。

特記すべきは、国際的な研究交流として、独立行政法人国立文化財機構に協力して2015年2月22～27日にかけて、研究代表者及び科研メンバーがイタリアのトリノ、フィレンツェ、ローマにおいて資料救出・修復や文化財防災に関する調査を実施したことである。現地の文書館・美術館・修復研究所の関係者と意見交換を行うとともに、この調査で得られた成果を踏まえて、平成27年度にはイタリアの研究者を招聘して国際比較を視野に置いた研究会を開催する予定である。また、2015年3月14～18日に仙台で開催された第3回国連防災世界会議に参加し、国内外の文化財防災等に関する情報収集や意見交換を行なうとともに、同世界会議のパブリックフォーラムでは、研究代表者が科研(S)の研究成果に基づき報告した。

[11] 平成27年度における活動

平成27年度は、2015年12月5日に被災地フォーラム「自然災害に学ぶ茨城の歴史―被災の記憶と教訓を未来へ」を茨城大学で開催した。このフォーラムは、東日本大震災の現状把握と中間まとめを目的とし、茨城・福島での被災資料保全と震災記録保全の現状と課題について議論を行った。同フォーラムでは、2015年関東・東北豪雨災害の水損資料保全についての現状と課題についても議論した。また、12月6日には福島県南相馬市内において被災地巡検を行なった。

また、学内外あわせて2回の地域歴史資料学会研究会を下記の通り開催した。第5回研究会(身近な

文化財を災害と日常の滅失から守る研究会、11月25日、於近大姫路大学)、第6回研究会(兼第5回被災地図書館との情報交換会、2016年1月22日、於神戸大学社会科学系フロンティア館)。被災資料・歴史資料の調査保全としては、2015年9月の関東・東北豪雨災害で被害を受けた茨城県常総市の民間所在資料や水損行政文書の保全活動を、分担者・協力者らが支援するとともに、大規模水害に対する研究の実践的な対応についても大きな成果が得られた。その実践的な災害対応を踏まえて、フォーラムや研究会等で災害時の資料保全論の検討を行った。さらに、阪神・淡路大震災以降の災害資料研究の蓄積を踏まえて、東日本大震災被災地の関係団体などと災害資料の収集保全・活用などについて議論を深めた。

特記すべきは、国際研究会議としては、10月22～27日に、本科研研究グループと東北大学災害科学国際研究所が主催する国際会議「文化財防災体制についての国際比較研究」を下記の日程で開催した。神戸会議(10月22・23日、於神戸大学文学部)、公開フォーラム(10月24日、於神戸大学瀧川記念学術交流会館、参加者約80名)、仙台会議(10月27日、於東北大学災害科学国際研究所)。この国際会議では、イタリア国立保存修復高等研究所のカルロ・カカーチェ氏を招き、イタリアで構築運用されている文化財危険地図について理解を深めるとともに、日本側から歴史学・保存科学分野のみならず、自然科学や建築学など他分野の専門家等を交えて、日伊の文化財防災体制や災害文化のあり方について比較研究の視点から議論を行った。この成果を踏まえ、文化財防災体制の構築を歴史文化・災害文化形成において位置づけていくための調査・検討をさらに進めていく予定である。また、上海大学で開催された第3回上海大学・大阪市立大学国際シンポジウム(11月14日)において、代表者が災害文化形成に関する講演を行った。

さらに、平成27年度は関係団体と協力し、次のような研究事業を実施した。独立行政法人国立文化財機構が本年度から進めている文化財防災ネットワーク推進事業の一環として、9月28～30日の3日間にわたり同機構アソシエイト・フェローを対象とした研修が福島大学及び東北大学災害科学国際研究所で開催された(科研S研究グループ協力)。同研修では東日本大震災における資料救出や文化財防災対策などがテーマとなった。また、国立文化財機構及び第2回全国史料ネット研究交流集会実行委員会が主催した「第2回全国史料ネット研究交流集会」(2016年3月19～20日、於福島県郡山市民プラザ)に共催した。これらをとおして、阪神・淡路大震災以降の資料保全及び地域歴史資料論の展開と東日本大震災の現状と課題について議論を行った。

その他の研究活動としては、阪神・淡路大震災以降の地域歴史資料保全に関するデータ整理を進めたほか、市民と協同した地域歴史資料の保全・活用実践事例の調査(主に兵庫県淡路市)などの研究を展開した。

日本には各地に多様な歴史資料が豊富に残されています。しかし、多発する自然災害や人口減少などの影響で、地域社会の歴史遺産が散逸・消失の危機にさらされています。とくに阪神淡路大震災から東日本大震災を経て、未指定文化財を含む幅広い歴史文化遺産をどのように守り、次世代へと継承していくのが大きな課題となっています。

同様に膨大な文化財を有するイタリアは、全土の様々な文化財情報を地理情報(GIS)と連動させて総合的に管理する「文化財危険地図」(文化財リスクマップ、Carta del Rischio)の構築・運用が進められています。このフォーラムでは、イタリアで進められている「文化財危険地図」など同国の文化財保護について理解を深めるとともに、日本の現状も踏まえて、国際的な視点から歴史文化・災害文化を支える市民社会のあり方について議論します。

2015.10.24 Sat 13:00~17:30 神戸大学瀧川記念学術交流会館

【ご挨拶】
北後 明彦 (神戸大学都市安全研究センター長)
栗原 祐司 (独立行政法人国立文化財機構本部事務局長)

【趣旨説明】
奥村 弘 (神戸大学文学研究科教授)

【講演】
カルロ・カカーチエ (イタリア国立保存修復高等研究所 [ISCR])
「イタリアにおける文化財危険地図システムの構築と運用について」

【コメント】
村上 裕道 (兵庫県教育委員会参事兼文化財課長)
朝賀 浩 (文化庁文化財部美術学課主任文化財調査官)

【パネルディスカッション】
コーディネーター：奥村弘、天野真志 (東北大学災害科学国際研究所)

公開フォーラム

文化防災体制についての国際比較研究

International Comparative Study about Disaster Risk Management of Cultural Heritage

参加無料
申込不要
逐次通訳あり

【主催】科学研究費基盤研究S「災害文化形成を担う地域歴史資料科学の確立——東日本大震災を踏まえて」研究グループ (研究代表者：奥村弘)
東北大学災害科学国際研究所

共催：神戸大学都市安全研究センター
協力：神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進室、神戸大学文学研究科地域連携センター
後援：独立行政法人国立文化財機構、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、
イタリア文化会館 大阪、神戸新聞社、朝日新聞神戸支局、毎日新聞神戸支局、
読売新聞神戸支局、産経新聞神戸支局、日本経済新聞社神戸支社、
サンテレビジョン、NHK神戸放送局

お問い合わせ
〒657-8501 神戸市港区六甲台町1-1 神戸大学文学研究科 (担当：吉川圭夫)
E-mail: yoshik@port.kobe-u.ac.jp TEL: 078-803-5571 / FAX: 078-803-5566

■ 講師プロフィール

カルロ・カカーチエ (Prof. Carlo Cacciari)
文化財の保存修復に携わるイタリア国立保存修復高等研究所 (Istituto Superiore per la Conservazione ed il Restauro [ISCR]) の情報システム部長。専門は情報工学。イタリアで進められている多様な文化財情報を地理情報 (GIS) と連動させて総合的に管理し、その危険度を評価した文化財のリスクマップ「文化財危険地図」(Carta del Rischio) の情報システム責任者を務める。

■ 会場のご案内
神戸大学瀧川記念学術交流会館
(神戸市港区六甲台町1-1 神戸大学六甲台第2キャンパス)
【市営バス】
阪神御影駅・浜六甲駅より、阪急六甲駅から、いずれも神戸バス36系統「橋甲田線」または「橋甲2丁目止り」行る乗車→「神大文学部前」下車
【タクシー】
阪急六甲駅より約5分、浜六甲駅より約10分、阪神御影駅より約15分

■ レセプション参加申し込み
フォーラム終了後18:00より同会場にてレセプションを開催します。こちらへの参加は要申し込みとなります。
メールまたはFAXにて、10月16日(金)までに下記までお申し込みください。(会費5000円程度)
E-mail: yoshik@port.kobe-u.ac.jp FAX: 078-803-5566 (担当：神戸大学文学研究科・吉川)
FAX: 078-803-5566 (担当：神戸大学文学研究科・吉川)

公開フォーラム「文化防災体制についての国際比較研究」

■ 講師プロフィール

カルロ・カカーチエ (Prof. Carlo Cacciari)
文化財の保存修復に携わるイタリア国立保存修復高等研究所 (Istituto Superiore per la Conservazione ed il Restauro [ISCR]) の情報システム部長。専門は情報工学。イタリアで進められている多様な文化財情報を地理情報 (GIS) と連動させて総合的に管理し、その危険度を評価した文化財のリスクマップ「文化財危険地図」(Carta del Rischio) の情報システム責任者を務める。

■ 会場のご案内
神戸大学瀧川記念学術交流会館
(神戸市港区六甲台町1-1 神戸大学六甲台第2キャンパス)
【市営バス】
阪神御影駅・浜六甲駅より、阪急六甲駅から、いずれも神戸バス36系統「橋甲田線」または「橋甲2丁目止り」行る乗車→「神大文学部前」下車
【タクシー】
阪急六甲駅より約5分、浜六甲駅より約10分、阪神御影駅より約15分

■ レセプション参加申し込み
フォーラム終了後18:00より同会場にてレセプションを開催します。こちらへの参加は要申し込みとなります。
メールまたはFAXにて、10月16日(金)までに下記までお申し込みください。(会費5000円程度)
E-mail: yoshik@port.kobe-u.ac.jp FAX: 078-803-5566 (担当：神戸大学文学研究科・吉川)
FAX: 078-803-5566 (担当：神戸大学文学研究科・吉川)

会場：神戸大学瀧川記念学術交流会館
(神戸市港区六甲台町1-1 神戸大学六甲台第2キャンパス)
【市営バス】
阪神御影駅・浜六甲駅より、阪急六甲駅から、いずれも神戸バス36系統「橋甲田線」または「橋甲2丁目止り」行る乗車→「神大文学部前」下車
【タクシー】
阪急六甲駅より約5分、浜六甲駅より約10分、阪神御影駅より約15分

国際会議「文化防災体制についての国際比較研究」(神戸会議・仙台会議)のご案内

※神戸会議、仙台会議は研究者を対象とした会議となります。

参加ご希望の方は、①お名前、②ご所属・職名、③メールアドレス、④参加希望日程を明記の上、メールまたはFAXにて下記までお申し込みください。【申し込み締め切り】10月16日(金)
E-mail: yoshik@port.kobe-u.ac.jp FAX: 078-803-5566 (担当：神戸大学文学研究科・吉川)
両会場とも定員60名(先着)。定員に達し次第、締め切らせていただきますので予めご了承下さい。

神戸会議	仙台会議
【日時】2015年10月22日(木) 13:00～17:30 10月23日(金) 9:30～15:00 【会場】神戸大学文学部C棟5階大会議室 (神戸市港区六甲台町1-1) 10月22日(木) ・開会挨拶：内田 秀実 (京都造形芸術大学名誉教授) ・講演：カルロ・カカーチエ ・報告：二神 葉子 (東京文化財研究所情報システム研究室) ・報告：永井 康雄 (山形大学地域教育文化学部) 「文化財の地域危険度評価とその活用」 10月23日(金) ・日本研究発表による報告： 小林 健一郎 (神戸大学都市安全研究センター専任教授) 前田 正明 (東北大学立地情報学専攻主任) 「和歌山県における津波被害想定地域を対象とした文化遺産所在確認調査について」 中谷 友樹 (山形大学安全都市研究センター) 「文化財防災における地理情報の活用(仮)」 久保 浩 (国立歴史民俗博物館) 「歴史資料のデータベースについて(仮)」	【日時】2015年10月27日(火) 13:00～17:30 【会場】東北大学災害科学国際研究所 (仙台市青葉区荒井青葉 468-1) ・開会挨拶：今村 文彦 (東北大学災害科学国際研究所) ・講演：カルロ・カカーチエ ・日本研究発表による報告： 小宮 竜介 (東北大学博物館) 「動産文化財の防災対策と情報収集——東日本大震災の経験と文化財保護制度の関わり」 永井 康雄 (山形大学地域教育文化学部) 「東日本大震災における「歴史的建築データベース」の活用とその状況について」 佐藤 大介 (東北大学災害科学国際研究所) 「『災害(前)』の所在確認調査」は史料を救うのか——日本・支那間の活動から」 主催：科学研究費基盤研究S「災害文化形成を担う地域歴史資料科学の確立——東日本大震災を踏まえて」研究グループ (研究代表者：奥村弘) 共催：神戸大学都市安全研究センター 協力：神戸大学震災復興支援・災害科学研究推進室 後援：独立行政法人国立文化財機構

第2回 全国史料ネット研究交流集会

1995年の阪神・淡路大震災を機に設立された歴史資料ネットワークを皮切りに、全国各地で20以上の史料ネットが立ち上がり、災害から歴史資料を保全し、「災害の記録を保存する活動」に取り組んでいます。2011年3月の東日本大震災では、国の被災文化財等救援本部の活動とともに、史料ネット同士の連携と協力によって、地域に伝えられた多くの歴史・文化遺産が救出されました。2014年10月には国立文化財機構内に「文化防災ネットワーク推進本部」が設置され、歴史・文化遺産の防災に向けた全国的な連携体制づくりの強化が望まれています。

2015年2月、阪神・淡路大震災と歴史資料ネットワークの活動開始20年の節目を迎え、神戸市内で初めての全国史料ネット研究交流集会が開催されました。全国各地の史料ネットが一堂に会し、「『地域歴史遺産』の保全・継承に向けた神戸宣言」を採択して、盛会のうちに幕を閉じました。

続く第2回は、東日本大震災5年の節目にあたる2016年3月に、被災地の一つである福島県内で開催するはじめてとなります。この5年間に東日本大震災後の被災地で取り組まれてきた活動から得られた経験を共有し、大規模災害に対する日常的な備えのあり方を展望するとともに、先の「神戸宣言」の趣旨を踏まえ、独自の活動を進める各地域のネットワーク同士の「つながり」を大切に、実践に向けた連携を発展させる場にと考えています。

ご多用中恐縮ではありますが、ぜひ全国各地から多くの関係者にお集まりいただき、議論と交流を深めていただきますよう、お願いいたします。

開催日時 2016年 **3月19日(土) 13:00～17:30(予定)**
20日(日) 9:00～13:00(予定)

会場 福島県郡山市 **郡山市民プラザ 大会議室(ビッグアイ7階)**
〒963-8002 福島県郡山市駅前二丁目11-1
※JR郡山駅北口を出てすぐ

主催 第2回全国史料ネット研究交流集会実行委員会、独立行政法人国立文化財機構
後援 科学研究費補助金基盤研究S「災害文化形成を担う地域歴史資料科学の確立——東日本大震災を踏まえて」(研究代表者：奥村弘) 研究グループ
共催 若手歴史資料ネットワーク/NPO法人宮城歴史資料保存ネットワーク/山形文化遺産防災ネットワーク/ふくしま歴史資料ネットワーク/福島県歴史資料・文化財研究所・保全ネットワーク/千葉県・自治体歴史資料ネットワーク/NPO法人歴史資料保存機構「まんがたん」/神奈川地域史料保存ネットワーク/新潟県史料館ネットワーク/福井史料ネット/長野県史料ネットワーク/地域史料保存有志の会/静岡県文化財等救済ネットワーク/歴史資料ネットワーク/歴史資料保全ネット・わかやま/岡山史料ネット/山形県歴史資料ネットワーク/愛媛県史料ネット/歴史資料保全ネットワーク・徳島/愛媛県歴史資料ネットワーク/鹿児島県史料文化ネットワーク(準備中)/福島県教育委員会・郡山市教育委員会/公益財団法人福島県文化財振興財団/福島大学つくしむくしま未来支援センター/福島県民報/福島県新聞社/河北新報社

【問い合わせ先】
第2回全国史料ネット研究交流集会実行委員会事務局
阿部 浩一 (福島大学、ふくしま歴史資料保存ネットワーク)
e-mail: shiryo-net@ipc.fukushima-u.ac.jp
facebook: https://www.facebook.com/NationalConventionShiryoNet2/

- 77 -

I-2. グローバル人材育成推進事業（平成 26 年度より「スーパーグローバル大学等事業 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に改称）

[1] 神戸大学「問題発見型リーダーシップ」を発揮できる「グローバル人材育成推進事業」（タイプ B・平成 24 年度採択）

文部科学省「グローバル人材育成推進事業」は「若い世代の「内向き志向」を克服し、国際的な産業競争力の向上や国と国の絆の強化の基盤として、グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できる「人財」の育成を図るため、大学教育のグローバル化を推進する取組を行う事業に対して、重点的に財政支援することを目的」（「日本学術振興会 HP」より抜粋）としている。

平成 24 年度に採択された、神戸大学の「問題発見型リーダーシップ」を発揮できる「グローバル人材育成推進事業（タイプ B）」（平成 26 年度より「スーパーグローバル大学等事業 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に改称）では、文学部・人文学研究科、国際文化学部、発達科学部、法学部、経済学部・経済学研究科、経営学部の人文社会系 6 部局を取組部局として、「現実の社会に伏在する問題や課題を社会に先駆けて見出し、世界に発信しうる「問題発見型リーダーシップ」を発揮できる人材の育成を目的として、海外留学等を含む教育プログラムにより、深い教養と高度な専門性、グローバルな視野と卓越したコミュニケーション能力を備えた「問題発見型リーダーシップ」を発揮できる「グローバル人材」を育成する」（「構想調書」より抜粋）ための事業を展開している。

[2] 「グローバル人文学プログラム」の概要

人文学的課題をグローバルな視点から考察し、日本文化の深い理解を基に異文化との対話を重ねながら、現代社会における諸問題を解決に導いていくリーダーシップとコミュニケーション能力を持った人材を養成するプログラム。「グローバル人文学プログラム」では、以下の 5 つの能力を修得したグローバル人材の育成を目指す。

- (1) 卓越した外国語能力
- (2) 優れたコミュニケーション能力
- (3) 主体性を発揮できる旺盛なチャレンジ精神
- (4) 異文化・日本文化への深い洞察力
- (5) 高度な国際感覚

[3] グローバル人文学プログラムの科目群

- ・「グローバル人文学科目群」：人文学をグローバルな視点で学ぶことにより、高度な国際感覚を育成する外国語授業科目群——「グローバル人文学特殊講義」「グローバル人文学演習」「比較日本社会論特殊講義」「比較日本文化産業論特殊講義」など
- ・「グローバル対話力育成科目群」：グローバル社会で活躍できる優れた外国語能力とコミュニケーション能力を育成する授業科目群——「グローバル対話力演習」「グローバル英語力強化演習Ⅰ～

Ⅱ」(人文学研究科博士課程前期課程)「アカデミック・ライティングⅠ～Ⅱ」など

科目一覧(文学部)

科目群	授業科目名	単位数	必要単位数	修了単位数
「グローバル人文学」	グローバル人文学特殊講義	2	6	合計 12 単位以上
	グローバル人文学演習	2		
	比較現代日本論特殊講義	2		
	比較日本文化産業論特殊講義	2		
	※イギリス文学特殊講義	2		
	※アメリカ文学特殊講義	2		
	※アメリカ文学演習	2		
	※英語学特殊講義	2		
	※英語学演習	2		
	※ドイツ文学演習	2		
	※ドイツ文学特殊講義	2		
	※中国語学特殊講義	2		
	※中国語学演習	2		
	※倫理学演習	2		
「グローバル対話力育成」	グローバル対話力演習	2	6	
	グローバル英語力強化演習Ⅰ	2		
	グローバル英語力強化演習Ⅱ	2		
	オックスフォード夏季プログラム	2		

科目一覧(人文学研究科博士課程前期課程)

科目群	授業科目	単位数	必要単位数	修了単位数
「グローバル人文学」	グローバル人文学特殊研究	2	4	合計 8 単位以上
	比較現代日本論特殊研究	2		
	比較日本文化産業論特殊研究	2		
「グローバル対話力育成」	グローバル対話力演習Ⅰ	2	4	
	グローバル対話力演習Ⅱ	2		
	アカデミック・ライティングⅠ	2		
	アカデミック・ライティングⅡ	2		
	オックスフォード夏季プログラム	2		

※なお、平成 27 年度には、「グローバル対話力育成」科目として、「English Summer Lectures in Humanities」(前期集中講義・1 単位)、「グローバル・アクティブ・ラーニング」(後期集中講義・1 単位)を臨時開講科目として開講した。

【4】「グローバル人文学プログラム修了証」

プログラム修了要件を満たした者には、「グローバル人文学プログラム修了証」Global Humanities Program Certificate が、卒業(修了)時に授与される。なお、プログラム修了要件は次のとおり。

- ① 「グローバル人文学プログラム」で所定の単位を取得すること。

(文学部) 12 単位以上 (人文学研究科博士課程前期課程) 8 単位以上。

② 下記の「外国語力スタンダード」をクリアすること。

(文学部) 英語 TOEIC 760、TOEFL iBt 80、IELTS 6.0、英検準1級のいずれか。または、他の外国語の場合は英語の基準に準ずる。

(人文学研究科博士課程前期課程) 英語 TOEIC 800、TOEFL iBt 88、IELTS 6.5、英検1級のいずれか。または、他の外国語の場合は英語の基準に準ずる。

[5]「グローバル人文学プログラム」専任担当教員の教育活動

アリーナ・エレナ・アントン特命助教：ルーマニア・アレクサンドル・イオン・クーザ大学大学院博士後期課程（英米文化専攻）修了（PhD）。専門はアメリカ文学（特に日系アメリカ人の文学）及び比較文化（平成27年10月着任）。

① 担当科目（平成27年度後期授業内容抜粋）

「グローバル人文学特殊研究」：日系アメリカ人・カナダ人の映像表象に見られるステレオタイプやアイデンティティの問題について考察する。講義とその後のグループ・ディスカッションにより、受講者の分析的思考法を養う。

「グローバル対話力演習」：現代の日本と東アジアにおける社会的・文化的問題をグローバルなコンテキストから取り上げる。ディスカッションの実践やエッセイ（英文レポート）の作成により、受講者の英語コミュニケーション能力をグローバルなレベルまで高める。

② グローバル人文学プログラム「オフィスアワー」

人文科学図書館ラーニングコモンズでの「オフィスアワー」（担当：アントン特命助教）。

- ・ 場所：人文科学図書館1階の「ラーニングコモンズ」（創造的学習スペース）
- ・ 回数：週2日（平成27年度後期：水曜・金曜日12:30～14:00）
- ・ 内容：グローバル人文学プログラム授業に関する質問、語学・留学相談、留学準備のための個人指導など。

[6]「オックスフォード夏季プログラム」(Oxford Summer Program at Hertford College)

オックスフォード大学（University of Oxford）のハートフォード・カレッジ（Hertford College）での3週間の夏季プログラム。英国歴史・文化・社会・文学などのトピックに基づいた英語学習を行う。プログラム期間中、参加者はキャンパス内の寮に宿泊し、オックスフォード大学生の RA（Residential Advisor、寮生活アドバイザー）による学習・生活のサポートを受ける。授業後や休日には RA が企画する課外活動などに参加し、異文化交流を行う。プログラムの前後に「事前指導」「成果発表会」「フォローアップ指導」を実施し、2単位を付与する。平成27年度は、8月30日～9月19日に実施し、18名の学生（文学部4名、国際文化学部6名、発達科学部2名、法学部1名、経済学研究科4名、および特別参加・海事科学部1名）が参加した。また、下に掲げた表のように、参加者アンケート（回答総数16名）では大半の参加者が本プログラムに対し「満足」し、「他の学生に薦めたい」と思っているという結果が出ている。

平成 27 年度前期「オックスフォード夏季プログラム」参加者アンケート集計結果（抜粋）

	大いに満足 (大いにそ う思う)	満足 (そう 思う)	どちらとも 言えない	不満 (そう 思わない)	大いに不満 (大いにそ う 思 わ ない)
夏季プログラムの全般的な満足度 は	11	5	0	0	0
夏季プログラムを他の学生に薦め たいと思いますか	13	3	0	0	0
夏季プログラムによってどのよう な成果が得られたと思いますか？	(回答より抜粋) リスニング能力・プレゼン能力・発言能力が向上 した。英語力の向上が実感できた。英語漬けの生活ができて楽しか った。グローバル社会の動向がわかった。積極性が身についた。				

【7】グローバル人文学プログラムにおけるFD活動

① グローバル FD 講演会

本プログラムは、教員の教育能力をグローバル・スタンダードにまで向上させることも目標の一つとしているが、本年度は、海外の提携大学教員を招聘し、各大学の先駆的グローバル教育の取組等についての英語による講演に基づく討論等を行う「グローバルFD講演会」を2回開催し、教員の教育能力の向上に寄与した。

開催日	テーマ	参加人数
平成 28 年 1 月 27 日	グローバル FD 講演会 “This, That, or the Other?: On Japanese Studies in Romania” (「あれか、これか、あるいはその他か？—ルーマニアの日本研究について」) 講師：ルーマニア・デミトリエ・カンテミル・キリスト教大学講師 マグダレナ・チュバンカン氏	49 人
平成 28 年 2 月 2 日	グローバル FD 講演会 “Strategy of Internationalisation at Jagiellonian University” (「ヤゲウオ大学における国際化戦略」) 講師：ポーランド・ヤゲウオ大学副学長 アンジェイ・マニア氏	41 人

② 海外大学での出張講義

グローバルな教育活動の一環として、5月18～22日に協定校であるポーランド・ヤゲウオ大学において、油井清光教授がグローバル人文学関係の出張講義を行った。

【8】グローバル産業人材育成のためのインターンシップ「文化産業関連インターンシップ」

海外における日本の文化産業、特にポピュラーカルチャー（アニメ・マンガ）など我が国の先端文化の発展に資するとともに、高度なグローバル感覚と関連知識やコミュニケーション能力を備えた文化産業関連の人材の育成を目指して、中国において北京大学文化産業学院、香港大学、日本学術振興会北京研究連携センター、神戸大学北京事務所の協力を得て、短期のインターンシップを実施している。平成 27 年度は、平成 27 年 12 月 9 日～12 日、「比較日本文化産業論特殊講義」（担当：油井教授）において優秀な成績を上げた 1 名の文学部生が参加し、北京大学・文化産業研究院（向

勇副研究科長、Hardy Yong Xiang, Professor, School of Arts, Peking University, Vice Dean, Institute for Cultural Industries, Peking University) でのワークショップに参加した後、北京市内の China Arts and Entertainment Group の事務局において所長である王亜平教授のお話を伺うとともに、インタビューを行い、中国における文化産業の現状についての知見を深めると共に、滞在期間中のインターシップ活動として、同事務局において、グループの国際連携部署に関する作業の一部に従事した。

[9]運営および広報体制

本プログラムの運営には、グローバル教育担当の副研究科長（全学グローバル委員兼務）を座長とし、副大学院委員、副学生委員、各講座代表、各語学代表、特命教員などから構成されるグローバル人文学プログラム推進WGがあたっている。同WGは原則として毎月1回の会議を開き、本プログラムに関わる諸事項について審議している。

本プログラムの広報は、「グローバル人文学プログラム・リーフレット」（平成28年3月一部改訂）および「同プログラム・ホームページ」（およびSNS）等を活用して、推進WGが人文学研究科教務学生係と連携して行っている。



[10] これまでの成果

本事業開始から4年目にあたる平成27年度は、グローバル人文学プログラムの成果が着実に表れている。たとえば、平成27年度の交換留学生（派遣）数は、全学協定による留学生5名（内人文学研究科博士課程前期課程学生0名）、部局間協定による留学生5名（内人文学研究科博士課程前期課程学生3名[ダブルディグリープログラム1名含む]）、合計10名であり、また「トビタテ！留学JAPAN」でも、1名（人文学研究科博士課程後期課程学生）が採用されるなど、本事業開始以前より大幅に増加した。また、本プログラムの開始以降、学生の語学学習に対する意識や海外留学に対する興味が高まるなど、着実に成果が出始めている。

I-3. 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「国際共同による 日本研究の革新—海外の日本研究機関との連携による若手研究者養成」

[1] 本事業について

独立行政法人日本学術振興会（JSPS）の「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」（2014 年度より「頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム」に名称変更）に神戸大学人文学研究科の「国際共同による日本研究の革新—海外の日本研究機関との連携による若手研究者養成」が採択された。実施期間は 2013 年度から 2015 年度である。

[2] 本事業の目的

本事業は、世界の日本研究をリードする海外の 3 大学（ヴェネツィア大学、オックスフォード大学、ハンブルク大学）との間でそれぞれ共同研究を立ち上げ、国立国語研究所とも協力しながら、3 大学に若手研究者を 1 年間派遣して共同研究に従事させることによって、世界的な視野に立ち、世界における日本研究を自覚した新しいタイプの日本研究者を養成することを目的とする。共同研究のテーマは、ヴェネツィア大学は日本文学・現代日本社会文化論、オックスフォード大学は言語学・日本語学（国語学）、ハンブルク大学は日本語教育学である。神戸大学がこれまでに 3 大学と築いてきた協力関係をさらに強化・発展させ、実質化することも目的である。

[3] 連携パートナー機関

- ・ヴェネツィア大学（日本文学・現代日本社会文化論）

受入代表者：ボナヴェントゥーラ・ルペルティ教授（日本文学・比較演劇論）

トシオ・ミヤケ准教授（社会学・現代日本社会文化論）

アルド・トリニ教授（言語学・日本語教育学）

マルチェラ・マリオッティ講師（日本語教育学・日本児童文学）

- ・オックスフォード大学（言語学・日本語学）

受入代表者：ビヤーク・フレスヴィック教授（日本言語学・日本語音韻論）

リンダ・フローレス准教授（日本近代文学、ジェンダー理論、比較文学）

- ・ハンブルク大学（日本語教育学）

受入代表者：ヨルク・クヴェンツァー教授（日本文学・日本精神史）

杉原 早紀講師（日本語教育・ドイツ現代文学）

※肩書はすべて 2016 年 3 月現在のものである。

[4] 本事業のメリット

- ・ヨーロッパの日本研究の拠点 3 大学との間で頭脳循環につながる継続的で恒常的な学術交流関係を維持・発展させながら、3 大学が個別に有するネットワークを活用して、人文学研究科の国際ネットワークの拡充・強化を図ることができる。

- ・本事業によって派遣された若手研究者の経験が生かされて、次世代の研究者が育つという好循環が生み出される。
- ・若手研究者は、国際共同研究に参加する機会を得るだけでなく、海外での研究継続や就職機会の可能性を広げることになる。
- ・異なる文化や学術的背景を持つ研究者を言語の壁を越えてまとめあげる力や、国際感覚および広い視野に立った思考が鍛錬される。
- ・長期の海外派遣によって自己をアピールする能力やリーダーシップを涵養して、将来日本で行われる国際共同研究を主導できる人材、あるいは幅広く社会に通用する人材として活躍することが期待される。
- ・全世界からの精鋭が集まる共同研究の場で互いに切磋琢磨することで、優秀な研究者との幅広い人脈ができる。

[5] 2015 年度の派遣プログラムの実施

以下の日程で各大学への派遣を実施した。

氏名 所属	派遣先大学	派遣期間	研究テーマ
丸山岳彦 国立国語研究所（准教授）	オックスフォード大学	2014/4/8 ～ 2015/4/7	日本語コーパスに基づく節連鎖構造の研究
梅村麦生 社会学（研究科研究員）	ヴェネツィア大学	2014/5/5 ～ 2015/5/4	イタリアにおける現代日本文化のビジュアル・イメージについての研究
松本風子 ヨーロッパ文学(D2)	ヴェネツィア大学	2014/5/5 ～ 2015/5/4	児童文学『ピノッキオ』が日伊両国で果たした役割:人形と子供をめぐる両国の文化的差異を検証する
大杉奈穂 ヨーロッパ文学(D2)	ハンブルク大学	2015/3/15 ～ 2016/3/14	日本語教材としての文学作品の可能性
アンナ・ボルディロフスカヤ 言語学（研究科研究員）	オックスフォード大学	2015/4/1 ～ 2016/2/22	日本語コーパスに基づく外来語修飾語の研究
浦野剛司 日本文学（研究科研究員）	ヴェネツィア大学	2015/4/28 ～ 2016/3/17	プリニウス『博物誌』の評価と澁澤龍彦の欧州旅行足跡調査
田中真一 言語学(人文学研究科准教授)	ヴェネツィア大学	2015/4/29 ～ 2016/3/15	日本語・イタリア語における他言語の受容と世代差・地方差に関する実証的研究

[6] シンポジウム・研究会・ワークショップ・講演会の開催

①神戸大学・国立国語研究所・オックスフォード大学合同ワークショップ：コーパスに基づく日本語研究

【日程・場所】2015年5月2日（金）、神戸大学文学部A棟1学生ホール

【報告者・題目】

Anna Bordilovskaya（神戸大学人文学研究科研究員）※スカイプによる参加

“The Analysis of the Collocation Patterns of Gairaigo Modifiers based on BCCWJ”

久屋愛美（オックスフォード大学大学院／国立国語研究所）

「コーパスに基づく外来語の社会言語学的研究」

丸山岳彦（国立国語研究所）

「コーパスに基づく節連鎖構造の分析」

※コメンテーター：石川慎一郎（神戸大学国際コミュニケーションセンター教授）

（※以下、肩書はすべてイベント開催当時のものである。）

②頭脳循環プログラム研究成果報告会・第4回日本語・日本文化教育研究会

【日程・場所】2015年5月6日（火）、文学部C棟2階プレゼンテーションルーム

【報告】

木曾美耶子（神戸大学留学生センター講師）

「文学作品を使用した授業におけるポートフォリオの可能性ーハンブルク大学日本語教育インターンシップをとおして」

※コメンテーター：鈴木義和（神戸大学人文学研究科教授）

リチャード・ハリソン（神戸大学留学生センター教授）

「日本語教育におけるポートフォリオの位置づけーE-learning、反転授業、学習環境」

③頭脳循環プログラム研究成果報告会

【日程・場所】2015年6月23日（火）、文学部A棟1階学生ホール

【報告】

梅村麦生（神戸大学人文学研究科研究員）

「イタリアの地理教科書における日本と日本文化のビジュアル・イメージについての研究：ビジュアル・イメージの再生産における「見立て」の視点から」

※コメンテーター：藤田裕嗣（神戸大学人文学研究科教授）

松本風子（神戸大学人文学研究科博士課程後期課程）

「イタリア児童文学『ピノキオの冒険』の中の子供像ー見立てられた教育関係からの分析」

※コメンテーター：河合成雄（神戸大学留学生センター教授）

④日本文化社会インスティテュート・頭脳循環プログラム第3回学術シンポジウム

【日程・場所】2015年7月16日（木）、文学部B棟132視聴覚室

講師：Marcella Mariotti（ヴェネツィア大学講師）

“Translating Hadashi no Gen into Italian: Language, Religion and Society”

討論者：トシオ・ミヤケ（ヴェネツィア大学講師）

⑤日本文化社会インスティテュート・頭脳循環プログラム第4回学術シンポジウム

【日程・場所】2015年7月31日（木）、文学部A棟1階学生ホール

講師：Griseldis Kirsch（ロンドン大学 SOAS 講師）

“Narratives of Trauma: Dresden and Hiroshima in German and Japanese Television”

講師：樋口大祐（神戸大学人文学研究科准教授）

「ヒロシマ表象における複数のトラウマについて」

討論者：松永京子（神戸市立外国語大学准教授）

⑥第1回日本語言語学研究会

【日程・場所】2015年8月15日（土）、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センター

【報告者・題目】

Anna Bordilovskaya (Kobe University)

“Collocation Patterns of Gairaigo Adjectival Modifiers: A corpus based study”

Kerri L Russell (Oxford University)

“On Noun Incorporation in Old Japanese: A corpus based study”

Shin’ichi Tanaka (Kobe University)

“Gemination and Accent in Japanese loanwords from Italian: Mitate in loanword phonology”

Thomas Jo Johansen (Oxford University)

“Infinitive and gerund clauses in Late Middle Japanese: An investigation using the Esopo no fabulas corpus”

※コメンテーター：窪菌晴夫（国立国語研究所）

⑦ブリュッセル・ワークショップ「日本研究の新たな可能性を求めて Part 2」

【日程・場所】2015年10月10・11日、神戸大学ブリュッセル・オフィス

【プログラム】

10月10日（土）

開会の辞：増本浩子（神戸大学人文学研究科長・教授）

第一部「見立て」論の新展望

浦野剛史（神戸大学人文学研究科研究員）

Shibusawa Tatsuhiko’s Pliny: On a pagan model of how to write a natural history

（澁澤龍彦のプリニウス—無神論者の世界観について）

※コメンテーター：増本浩子

Jennifer Guest（オックスフォード大学准教授）

From the Pillow Book to topical encyclopedias: textual memory in the Heian court

（『枕草子』と類書—平安朝廷の文学と記憶）

※コメンテーター：福長進（神戸大学人文学研究科教授）

市澤哲（神戸大学人文学研究科教授）

『冥土蘇生記』—「異界」の幻視

※コメンテーター：福長進

嘉指信雄（神戸大学人文学研究科教授）

白隠における「見立てと介入」—「作為」論の脱構築に向けて

※コメンテーター：市澤哲

Marcella Mariotti（ヴェネツィア大学専任講師）

被爆体験の表象と記憶の共有化ー『はだしのゲン』の世界

※コメンテーター：Linda Flores（オックスフォード大学准教授）

Toshio Miyake（ヴェネツィア大学准教授）

Methodological nationalism in Japanese Studies and Social Sciences

※コメンテーター：嘉指信雄

10月11日（日）

第二部 日本語教育の新たな方法的試み

大杉奈穂（神戸大学人文学研究科博士課程後期課程）

Literary Works as Japanese Teaching Materials（日本語教材としての文学作品）

※コメンテーター：杉原早紀（ハンブルク大学講師）

第三部 日本語研究の現在

田中真一（神戸大学人文学研究科准教授）

Loanword adaptation in Italian and Japanese: from the perspective of Mitate

（イタリア語・日本語における借用語の受入れー「見立て」の観点から）

※コメンテーター：鈴木義和（神戸大学人文学研究科教授）

Bjarke Frellesvig（オックスフォード大学教授）

Corpora and the grammar of Old Japanese

※コメンテーター：松本曜（神戸大学人文学研究科教授）

総括 司会：實平雅夫（神戸大学留学生センター教授）

閉会の辞：福長進

⑧日本文化社会インスティテュート・頭脳循環プログラム第5回学術シンポジウム

【日程・場所】2015年10月21日（水）、文学部B棟3階331教室

【講師】Elaine Scarry（ハーヴァード大学教授）

【題目】Beauty as a Call to Justice: For the Pact of Aliveness

正義への呼びかけとしての美——生存の盟約のために——

司会者：嘉指信雄（神戸大学人文学研究科教授）

討論者：奥村沙矢香（神戸大学人文学研究科准教授）、中真生（神戸大学人文学研究科准教授）、大橋完太郎（神戸大学人文学研究科准教授）

⑨New Steps in Japanese Studies (Zunōjinkan Project)

【日程・場所】2015年12月18日（金）、ヴェネツィア大学アジア北アフリカ研究学科

【報告者・題目】

田中真一（神戸大学人文学研究科准教授）

借用語音韻論と見立て：イタリア語・日本語借用語における韻律の受け入れ (Loanword phonology and mitate: the adaptation of prosody in Italian and Japanese loanwords)

浦野剛史（神戸大学人文学研究科研究員）

澁澤龍彦のプリニウス：科学的批判による思想的批判への見立て (Shibusawa Tatsuhiko's Pliny:

Mitate between Scientific Criticism and Criticism on Thought)

Discussants: Patrick Heinrich and Toshio Miyake

⑩頭脳循環プログラム講演会

【日程・場所】2016年1月28日(木)、ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所

【報告者・題目】

市澤哲(神戸大学人文学研究科教授)

もののけ姫再考ー歴史学の観点から(Re-examination of “Princess Mononoke” –From a historical viewpoint)

司会: 杉原早紀(ハンブルク大学講師)

⑪第5回日本語・日本文化教育研究会

【日程・場所】2016年1月29日(金)、ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所

【報告者・題目】

大杉奈緒(神戸大学人文学研究科博士課程後期課程)

「文学作品を用いた日本語教育ー読解力の向上と読む楽しみに着目した活動の導入」

栗田信子(ハンブルク大学講師)

「日本語教材『まるごと』の紹介とその授業例」

司会・総括: 鈴木義和(人文学研究科教授)

⑫Framing Japanese and Italian cultures as mutual Otherness

【日程・場所】2016年2月15日(月)、文学部A棟1階学生ホール

【プログラム】

開会挨拶: 増本浩子(神戸大学人文学研究科長・教授)

イントロダクション: Marco Pellitteri(日本学術振興会外国人特別研究員)

梅村麦生(文学部非常勤講師)

“Visual images of Japanese culture in geography textbooks in Italy (1912-2014)”

松本風子(神戸大学人文学研究科博士課程後期課程)

“Translations and acceptance of Pinocchio in the Japanese literary context”

Alvaro Hernandez(神戸大学人文学研究科博士課程後期課程)

“Dōjin and cosplay cultures in Japan: appropriation, activities and participation”

Marco Pellitteri

“Diminishing the Other without even realising: Japan in the Italian mainstream press”

デイスカッサント: Nissim Otmazgin(ヘブライ大学アジア研究科長)

⑬第6回日本語・日本文化教育研究会

【日程・場所】2016年3月15日(火)、文学部C棟2階プレゼンテーションルーム

【プログラム】

13:00~13:40 日本語日本文化教育インターンの活動成果と今後の課題

①木曾美耶子（人文学研究科非常勤講師）頭脳循環プログラム 2013～2014 年度派遣者

②大杉奈穂（人文学研究科博士課程後期課程）頭脳循環プログラム 2014～2015 年度派遣者

13:40～15:00 神戸大学からの日本語日本文化教育インターン派遣の現状と課題

鈴木義和（神戸大学人文学研究科教授）

15:00～15:20 休憩

15:20～15:50 ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所日本語学科における日本語日本文化教育インターンシップについて

杉原早紀（ハンブルク大学講師）

15:50～16:20 ラウンドテーブル

司会・総括：實平雅夫（留学生センター・人文学研究科教授）

⑭頭脳循環プログラム総括シンポジウム

【日程・場所】2016 年 3 月 20 日（日）・21 日（月）、文学部 A 棟 1 階学生ホール

【プログラム】

3 月 20 日（日）

10:00～10:05 開会のあいさつ 増本浩子（人文学研究科長・教授）

10:05～11:45 第 1 セッション：日本語のコーパス研究

丸山岳彦（国立国語研究所准教授）

日本語コーパスに基づく節連鎖構造の分析（Clause Linkage Structure in Contemporary Japanese: Corpus-Based Study）

アンナ・ボルディロフスカヤ（神戸大学人文学研究科研究員）

日本語コーパスに基づく外来語修飾語の研究（A Corpus-Based Study of English Loanword Modifiers in Japanese）

講評：松本曜（神戸大学人文学研究科教授）・鈴木義和（神戸大学人文学研究科教授）

11:45～13:00（昼食）

13:00～14:40 第 2 セッション：日本語教育

木曾美耶子（神戸大学人文学研究科非常勤講師）

文学作品を使用した上級学習者に対する日本語読解授業－ポートフォリオ導入の可能性（Japanese reading classes for advanced-level learners using literary works: Potential of introducing portfolios）

大杉奈穂（神戸大学人文学研究科博士課程後期課程）

文学作品を用いた日本語教育におけるワークシートの導入－読解力と読む楽しみに着目して（Introducing Worksheets into Japanese Language Education using Literature: Focus on Reading Comprehension and Pleasure of Reading）

講評：ヨルク・クヴェンツァー（ハンブルク大学教授）、杉原早紀（ハンブルク大学講師）、

實平雅夫（神戸大学留学生センター教授）、鈴木義和

14:40～15:00（休憩）

15:00～16:40 第3セッション：日本文化と「見立て」（1）

松本風子（神戸大学人文学研究科博士課程後期課程）

日本における『ピノッキオの冒険』の翻訳・翻案—子供の“見立て”としての人形の役割から見る原作との差異（Translations and adaptations of Le adventure di Pinocchio in Japan: a different perception of marionette/child between Italy and Japan）

浦野剛司（神戸大学人文学研究科研究員）

澁澤龍彦のプリニウス—作家の自己投影と見立て（Shibusawa Tatsuhiko's Pliny: Mitate in Literary Reflection）

講評：ボナヴェントゥーラ・ルペルティ（ヴェネツィア大学教授）、福長進（神戸大学人文学研究科教授）

3月21日（月）

10:00～10:50 第4セッション：日本文化と「見立て」（2）

田中真一（神戸大学人文学研究科准教授）

借用語音韻論と見立て—イタリア語・日本語における借用語の受け入れ（Loanword phonology and Mitate: Loanword adaptation in Italian and Japanese）

講評：アルド・トリニー（ヴェネツィア大学教授）、松本曜

10:50～11:00（休憩）

11:00～11:50 第5セッション：現代日本社会と「見立て」

梅村麦生（神戸大学人文学研究科研究員）

イタリアの高校地理教科書における日本と日本文化のビジュアル・イメージについての研究（Visual Images of Japan and the Japanese Culture in Italian Geography Textbooks）

講評：トシオ・ミヤケ（ヴェネツィア大学准教授）、油井清光（神戸大学人文学研究科教授）

11:50～13:00（昼食）

13:00～14:30 第6セッション：頭脳循環事業の成果と課題及び今後の取り組み

報告者：松本曜、増本浩子、油井清光、福長進

司会：鈴木義和

14:30～14:35 閉会のあいさつ 嘉指信雄（神戸大学人文学研究科教授）

⑮頭脳循環プログラム・ワークショップ「「見立て」論に据えなおす」

【日程・場所】2016年3月22日（火）、文学部C棟2階プレゼンテーションルーム

【プログラム】

13:00～13:05 開会のあいさつ：嘉指信雄（神戸大学人文学研究科教授）

13:05～13:45 福長進（神戸大学人文学研究科教授）

『源氏物語』の準拠と「見立て」

13:45～14:05 討議 コメンテーター：鈴木義和（神戸大学人文学研究科教授）

14:05～14:15 休憩

14:15～14:55 アルド・トリニー（ヴェネツィア大学教授）

「道元の思想と言葉」

14:55～15:15 討議 コメンテーター：嘉指信雄

15:15～15:45 全体討議

司会：トシオ・ミヤケ（ヴェネツィア大学准教授）

討論者：ヴェネツィア大学派遣若手研究者

15:45～15:50 閉会のあいさつ：鈴木義和

⑩頭脳循環プログラム学術座談会「「見立て」論の可能性」

【日程・場所】2016年3月24日（木）、文学部C棟2階プレゼンテーションルーム

司会：福長進（神戸大学人文学研究科教授）

討論者：ボナヴェントゥーラ・ルペルティ（ヴェネツィア大学教授）、アルド・トリニ（ヴェネツィア大学教授）、トシオ・ミヤケ（ヴェネツィア大学准教授）、増本浩子（神戸大学人文学研究科長・教授）、油井清光（神戸大学人文学研究科教授）、福長進（神戸大学人文学研究科教授）、鈴木義和（神戸大学人文学研究科教授）、浦野剛史（神戸大学人文学研究科研究員）、梅村麦生（神戸大学人文学研究科研究員）

[7] 2015 年度派遣者の業績

●木曾美耶子（神戸大学人文学研究科非常勤講師）

1. 「文学作品を使用した授業におけるポートフォリオの可能性－ハンブルク大学日本語教育インターンシップをとおして（The Potential of Portfolios in Japanese Classes using Literary Works - Internship in Teaching Japanese As a Foreign Language at The University of Hamburg）」、頭脳循環プログラム研究成果報告会／第4回日本語・日本文化教育研究会、2015年5月26日、神戸大学文学部
2. 「文学作品を使用した上級学習者に対する日本語読解授業－ポートフォリオ導入の可能性（Japanese reading classes for advanced-level learners using literary works: Potential of introducing portfolios）」、頭脳循環プログラム総括シンポジウム、2016年3月20日、神戸大学文学部
3. 「小説を使用した授業における指導項目の一考察－ドイツの大学のTA活動をとおして」、『神戸大学留学生センター紀要』第22号、2016年3月（予定）

●丸山岳彦（国立国語研究所准教授）

1. 「「通時音声コーパス」は可能か」、2015年9月1日、第8回コーパス日本語学ワークショップ、国立国語研究所
2. 「日本語コーパスに基づく節連鎖構造の分析（Clause Linkage Structure in Contemporary Japanese: Corpus-Based Study）」、頭脳循環プログラム総括シンポジウム、2016年3月20日、神戸大学文学部

●梅村麦生（神戸大学人文学研究科研究員）

1. 「イタリアの地理教科書における日本と日本文化のビジュアル・イメージについての研究：ビジュアル

- ル・イメージの再生産における「見立て」の視点から」、頭脳循環プログラム研究成果報告会、2015年6月23日、神戸大学文学部
2. 「文化社会学の視覚論的転回（ビジュアル・ターン）に関する一考察ーニクラス・ルーマンのコミュニケーション・メディア論との対比で」、第88回日本社会学会大会、2015年9月19日、早稲田大学戸山キャンパス
 3. 「Visual images of Japanese culture in geography textbooks in Italy (1912-2014)」, Framing Japanese and Italian cultures as mutual Otherness、2016年2月15日、神戸大学文学部
 4. 「イタリアの高校地理教科書における日本と日本文化のビジュアル・イメージについての研究 (Visual Images of Japan and the Japanese Culture in Italian Geography Textbooks)」, 頭脳循環プログラム総括シンポジウム、2016年3月21日、神戸大学文学部

●松本風子（神戸大学人文学研究科博士課程後期課程）

1. 「イタリア児童文学の中の子供像ー見立てられた教育関係からの分析」、頭脳循環プログラム研究成果報告会、2015年6月23日、神戸大学文学部
2. 「Translations and acceptance of Pinocchio in the Japanese literary context」、Framing Japanese and Italian cultures as mutual Otherness、2016年2月15日、神戸大学文学部
3. 「日本における『ピノッキオの冒険』の翻訳・翻案ー子供の“見立て”としての人形の役割から見る原作との差異 (Translations and adaptations of Le adventure di Pinocchio in Japan: a different perception of marionette/child between Italy and Japan)」, 頭脳循環プログラム総括シンポジウム、2016年3月20日、神戸大学文学部

●アンナ・ボルディロフスカヤ（神戸大学人文学研究科研究員）

1. 「The Analysis of the Collocation Patterns of Gairaigo Adjectival Modifiers based on BCCWJ (BCCWJ に基づく外来語修飾語コロケーションの分析)」, 日本語コーパス言語学ワークショップ、2015年5月22日、神戸大学文学部（スカイプ参加）
2. 「Gairaigo Collocations and Phrase - based Gairaigo Compounds in Contemporary Written Japanese」、The 13th International Cognitive Linguistic Conference (ICLC-13)、2015年7月22日、Northumbria University (UK)
3. 「Collocation Patterns of Gairaigo Adjectival Modifiers: A corpus based study」、第1回日本語言語学研究会、2015年8月15日、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センター
4. 「A corpus-based approach to the classification of English-origin loanword adjectives in Contemporary Japanese」、The 21st Conference of the International Association for World Englishes、2015年10月8日、Boğaziçi University (Istanbul, Turkey)
5. 「Is Shiroy Howaito? English Loanword Modifiers in Contemporary Japanese」、IAFOR 7th Asian Conference on Education、2015年10月21日～25日（Virtual presentation）、Art Center of Kobe (Japan)
6. 「English Loanword Modifiers as a Means for Native vs. Foreign Differentiation in Contemporary Japanese（伝統的な文化と海外文化の使い分けとしての外来語修飾語：現代日本語のケーススタディ）」

- イ)」、International Conference on Language Learning - Hawaii 2016、2016年1月10日、The Hawai'i Convention Center, Honolulu, Hawaii, U.S.A.
7. 「A Study of English Loanword Adjectival Modifiers in Contemporary Japanese (現代日本語における英語由来借用語修飾語の研究)」、The East Asian Linguistics Seminar、2016年1月26日、Oriental Institute, University of Oxford
8. 「日本語コーパスに基づく外来語修飾語の研究 (A Corpus-Based Study of English Loanword Modifiers in Japanese)」、頭脳循環プログラム総括シンポジウム、2016年3月20日、神戸大学文学部

●大杉奈穂 (神戸大学人文学研究科博士課程後期課程)

1. 「日本語教材としての文学作品」、ブリュッセル・ワークショップ日本研究の新たな可能性を求めて Part 2、2015年10月10日、神戸大学ブリュッセル・オフィス
3. 「文学作品を用いた日本語教育ー読解力の向上と読む楽しみに着目した活動の導入 (Activities in Japanese Language Education using Literary Works: For Drawing to Reading Comprehension and Pleasure of Reading)」、第6回日本語・日本文化教育研究会、2016年1月29日、ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所
3. 「文学作品を用いた日本語教育におけるワークシートの導入ー読解力と読む楽しみに着目して (Introducing Worksheets into Japanese Language Education using Literature: Focus on Reading Comprehension and Pleasure of Reading)」、頭脳循環プログラム総括シンポジウム、2016年3月20日、神戸大学文学部

●田中真一 (神戸大学人文学研究科准教授)

1. 「特殊モーラへのアクセント回避と位置算定: 大阪方言複合語アクセントの分析」、日本音韻論学会 2015年度春期研究発表会、2015年6月19日、首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス
2. 「The adaptation of Italian geminates and vowels in Japanese: its relation to perception」、Conference on Geminate consonants 2015 (International Congress of Phonetic Sciences 2015)、2015年8月12日、Scottish Exhibition and Conference Centre (Glasgow)
3. 「Gemination and Accent in Japanese loanwords from Italian: Mitate in loanword phonology」、第1回日本語言語学研究会、2015年8月15日、オックスフォード大学東洋学部日本語研究センター
4. 「Loanword adaptation in Italian and Japanese: from the perspective of Mitate」、ブリュッセル・ワークショップ日本研究の新たな可能性を求めて Part 2、2015年10月10日、神戸大学ブリュッセル・オフィス
5. 「借用語音韻論と見立て: イタリア語・日本語借用語における韻律の受け入れ (Loanword phonology and mitate: the adaptation of prosody in Italian and Japanese loanwords)、New Steps in Japanese Studies (Zunōjunkan Project)、2015年12月18日、ヴェネツィア大学アジア北アフリカ研究学科
6. 「借用語音韻論と見立てーイタリア語・日本語における借用語の受け入れ (Loanword phonology and Mitate: Loanword adaptation in Italian and Japanese)」、頭脳循環プログラム総括シンポジウム、

2016年3月21日、神戸大学文学部

●浦野剛司（神戸大学人文学研究科研究員）

1. 「Shibusawa Tatsuhiko's Pliny : On a pagan model of how to write a natural history」、ブリュッセル・ワークショップ日本研究の新たな可能性を求めて Part 2、2015年10月10日、神戸大学ブリュッセル・オフィス
2. 「澁澤龍彦のプリニウスー科学的批判と思想的批判（Shibusawa Tatsuhiko's Pliny - Between Scientific Criticism and Criticism on Thoughts）」、New Steps in Japanese Studies (Zunōjunken Project)、2015年12月18日、ヴェネツィア大学アジア北アフリカ研究学科
3. 「澁澤龍彦のプリニウスー作家の自己投影と見立て（Shibusawa Tatsuhiko's Pliny: Mitate in Literary Reflection）」、頭脳循環プログラム総括シンポジウム、2016年3月20日、神戸大学文学部

※ 研究会や講演会、派遣者の業績の詳しい内容については「脳循環プログラム」の HP (<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/zunou/achievement.html#events>) に記載がある。

[8] 教職員の海外パートナー機関への派遣について

上記シンポジウム・研究会等の参加以外にも、海外パートナー機関の派遣若手研究者受入のための環境整備および派遣若手研究者の教育研究に関する相手方教員との打ち合わせ等を目的として、運営委員会のメンバーを中心に、教員の海外パートナー機関への派遣を実施した。派遣者・派遣先大学・派遣期間・派遣目的は、以下のとおりである。

窪園晴夫：オックスフォード大学、2015年8月15日～8月17日、派遣者の指導、ワークショップへの参加

實平雅夫：ハンブルク大学、2015年9月7日～9月12日、派遣者の指導

福長進：ヴェネツィア大学、2015年12月14日～12月20日、派遣者の指導、研究会への参加

藤田裕嗣：ヴェネツィア大学、2015年12月16日～12月20日、派遣者の指導、研究会への参加

市澤哲：ハンブルク大学、2016年1月25日～1月30日、派遣者の指導、講演

鈴木義和：ハンブルク大学、2016年1月25日～1月31日、派遣者の指導、第6回日本語・日本文化教育研究会への参加

松本曜：オックスフォード大学、2016年2月17日～2月22日、派遣者の指導、ワークショップへの参加

[9] その他の事業実施概要

- ① 本事業の成果は、論文集（全2巻）としてヴェネツィア大学出版局から刊行する。第1巻は2016年、第2巻は2017年に出版する予定である。現在準備中の第1巻の目次は以下のとおり。

Kobe Journal of Japanese Studies, Vol. 1

Introduction：増本浩子（神戸大学人文学研究科長・教授）

Part-I：Literature & Culture

- 1) ヨルク・B・クヴェンツァー (ハンブルク大学教授)

Speaking of the Path: Conceptual Metaphors in Poetic Texts by Bashô

- 2) リンダ・M・フローレス (オックスフォード大学准教授)

War Brides as Transnational Subjects in Mori Reiko's 'The Town of the Mockingbird'

- 3) 油井清光 (神戸大学人文学研究科教授)

Multiple Modernities and Japan: NAGAI Kafû and H. G. WELLS

Part-II : Japanese Language and Japanese Language Education

- 4) 杉原早紀 (ハンブルク大学講師)・木曾美耶子 (神戸大学人文学研究科非常勤講師)

Reading Lessons for Advanced-Level Learners Using Modern Japanese Literature: From a Portfolio of Learners' and Teachers' Observations

- 5) 丸山岳彦 (国立国語研究所准教授)、ビヤーク・フレスヴィック (オックスフォード大学教授)

Multiple Clause Linkage Structure of Japanese: A Corpus-based Study

Part-III/Feature-1 : "Mitate" in Italian Theme

- 6) 松本風子 (人文学研究科博士課程後期課程)

Da "monello" a "ragazzo per bene" : la trasformazione del protagonista ne Le avventure di Pinocchio e nella loro prima traduzione giapponese

- 7) 梅村麦生 (神戸大学人文学研究科研究員)

Visual Images of Japanese Culture in Geography Textbooks in Italy (1912-2014)

Part-IV/Feature-2 : Nuclear Questions (On the 70th Anniversary)

- 8) マルチェラ・マリオッティ (ヴェネツィア大学講師)

Translating Hadashi no Gen into Italian

- 9) 嘉指信雄 (神戸大学人文学研究科教授)

Bio-Politics over Radiation: From Hiroshima, Chernobyl to Fukushima

- ② ホームページを随時更新している。(<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/zunou/index.html>)

Ⅱ．部局内センター等の活動

Ⅱ-1. 海港都市研究センター

2015 年度の海港都市研究センターでは、大学院人文学研究科における共通科目授業の開講、第 11 回・第 12 回海港都市国際会議、韓国海洋大学を中心とする WCMCI 国際シンポジウムへの参加、映画上映会、紀要『海港都市研究』第 11 号の刊行等の諸事業を行った。

[1] 人文学研究科共通科目の開講

今年度は前期に大学院博士課程前期課程の大学院生向けに「海港都市研究交流演習」、後期に大学院博士課程後期課程の大学院生向けに「海港都市研究企画交流演習」を開講した。前者では樋口准教授、佐々木准教授、大津留教授、藤田教授等を中心に、世界文学・戦争・海港都市等をテーマとして、受講生が自ら選択したテキスト（翻訳を含む）について研究発表を行い、受講生全員で討議するというスタイルをとった。一国文学的枠組みに収まりにくいテキストを選ぶという点では昨年と同様だが、今年度はさらに戦争の記憶とその変容というテーマ性を重視した。また、非常勤講師として、立命館大学の西成彦氏、大東文化大学の中村隆之氏をお招きし、ラフカディオ・ハーン及びフランツ・ファノンに関する刺激的な演習授業を行っていただいた。

後者では真下教授を中心に、昨年度同様、受講生がそれぞれの専門分野における重要な研究論文のレビューを行うことを中心に演習を行った。先行研究の的確なレビューを行うためには、当該分野における多様な問題系に対する鋭敏な関心と、幅広い知識・見識を併せ持つことが必要である。受講生が当該演習の受講を通じて、自身の専門分野の特性を理解する上で有意義な自覚をもつことに一定の成果を得たと考える。

[2] WCMCI 国際シンポジウム及び第 11 回海港都市国際会議（2015 年 4 月 24－25 日、台湾台北・中央研究院）

海港都市研究センターは例年、木浦大学・韓国海洋大学・台湾大学・中山大学・長崎大学等をパートナーとして持ち回りで国際会議を開催し、若手研究者に国際的な場における研究発表の機会を提供するとともに、韓国海洋大学を中心とする WCMCI（The World committee of Maritime Cultural Institutes）の枠組みの代表者会議及び国際学術シンポジウムにも参加してきた。2015 年度は台湾中央研究院（及び台湾大学）が 4 月に両者の枠組みを連動させる形で国際会議を開催し、神戸大学の海港都市研究センターからも奥村弘教授、樋口准教授、および大学院生 1 名（小谷真千代）が参加し、有意義な報告及び討論に参加した。

[3] 第 12 回海港都市国際会議（2016 年 3 月 20－21 日、於長崎大学）

2015 年 4 月の第 11 回海港都市国際会議に続く第 12 回海港都市国際会議は、開催機関である長崎

大学の事情により、2015 年度内である 2016 年 2 月に行われた。神戸大学の海港都市研究センターからは、樋口教授のほか若手研究者 3 名（根本俊瑠、川口ひとみ、野村雄紀）が参加した。当該会議では、これまでの交流実績を踏まえて、海港都市研究の理論構築のための積極的な意見交換が行われた。特に、いわゆるグローバル・ヒストリー研究と海港都市研究との共通点と差異に関して活発な議論が行われ、海港都市はグローバルな動きとローカルな動きの交差点であること、西洋中心史観からの脱却が別の中心を生み出すことを避ける必要があること、パワーポリティクス的な意味での「中心」に追随しないような現象を扱う際の思想的根拠（たとえば「人権」等）を鍛える必要があること、等の意見が出された。また、21 日午後に各参加機関の代表者会議が行われ、来年度の開催機関決定に至る手順について合意に達した。

[4] 映画上映会

2015 年 12 月 5 日、「知日台湾・読書青年」ネットワーク、及び台湾の高雄映画センターの主催、海港都市研究センター等の協力により、『高雄短片×日本四地：高雄短編映画で台湾を知るリレー上映会』の二日目が神戸の中華民国留日神戸華僑総会で開催された。台湾の高校野球選手の夢と挫折を描いた『黑夜来臨：暗闇の訪れ』（張凱智監督）、国際結婚で台湾に来た東南アジアの女性の夢遊的な彷徨を描く『海上皇宮：海の上の宮殿』（趙徳胤監督）、同性愛者である娘と母親の葛藤を描く『海倫她媽：北極で結婚式を』（黃靖閔監督）の三作が上映され、人文学研究科博士課程後期課程在籍の台湾人留学生（劉靈均）が司会、樋口教授がコメンテーターを務めた。高雄は台湾のみならずアジア有数の海港都市であり、1980 年代の民主化運動以来の市民文化の伝統を有している。今回上映されたフィルム群もいずれも鋭い問題提起に満ちたものばかりであり、今後の継続的な交流が望まれる。

[5] 『海港都市研究』第 11 号の刊行

2016 年 3 月、当センターの紀要『海港都市研究』第 11 号を刊行した。

[6] まとめ

2015 年度は中東から欧州への大量の難民流入、パリにおける無差別テロ事件の発生、世界の不安定化が進んだ一年であり、日本でも安全保障環境の変化を理由に、自衛隊の海外派兵を可能にする安全保障関連法が成立した年である。21 世紀が「テロと難民の世紀」と化してしまう可能性がグローバルに進行する状況の中で、その状況に対峙しうる思想的・学問的視座が求められている。他方、海港都市は一般に多くの移民との共存の経験を有しており、その「歓待と排除の歴史」から学ぶことは少なくない。今後は関心を共有する他大学・他部局の機関や NPO 等とも連携しつつ、外部資金の獲得を通じてより大きなプロジェクトを展開していくことを目指す予定である。

II-2. 地域連携センター

神戸大学大学院人文学研究科では、2002 年から本事業を開始した。これは阪神・淡路大震災以来の地域貢献活動を踏まえたもので、自治体や地域住民と連携しながら、県内各地の歴史資料の保存・活用や歴史遺産をいかしたまちづくりを支援していくことを目的としている。

2002 年に「文部科学省大学改革等推進経費」（単年度・1 千万円）の交付をうけ、この事業を発展させるための基盤整備として、同年 11 月に地域連携研究員制度を創設し、翌年の 2003 年 1 月には、文学部構内に「神戸大学文学部地域連携センター」を学内措置で設置した（2007 年度より、改組にともない、人文学研究科地域連携センターと改称）。これ以来、学内予算のほか、いくつかの外部資金（文部科学省・各自治体・国土交通省等）を受けながら、さまざまな研究活動や事業を推進している。

地域連携センターの活動は、（１）地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進、（２）歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力、（３）歴史資料・災害資料の保全・活用、（４）地域歴史遺産を活用できる人材の育成を四つの柱としている。

（１）については、「歴史文化をめぐる地域連携協議会」を毎年開催しており、本年度は「地域で歴史を学びあうことのおもしろさ」というテーマを掲げた。なお、今年度の協議会は、後述の文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」事業「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」の一環としておこなわれた。

（２）と（３）については、以前からの継続しているものも含め、本年度は、約 30 の個別事業を展開した。このうち今年度は新たな連携事業として、西脇市と本学人文学研究科との協定に基づく連携事業、大分県中津市との連携事業などが開始された。

（４）については、現代 GP 事業によって開発された「地域遺産の活用をはかる人材養成事業（学生・院生教育）」、および教員養成 GP 事業によって開発された教育プログラム「地歴科教育論 D」が引き続き実施されている。また、2012 年度まで取り組んできた特別研究プロジェクト「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」事業（文部科学省採択）で開発した市民向けの人材育成プログラム、「まちづくり地域歴史遺産活用講座」およびそのオプションプログラムである「古文書解読初級講座」も、2013 年度より文学部の公開講座などとして実施されている。

センターを基盤研究組織とするプロジェクトは、科学研究費補助金・基盤研究（S）「大規模自然災害時の史料保存論を基礎とした地域歴史資料学の構築」に続き、しかし新たに 2014 年度から 5 年間、科学研究費補助金・基盤研究（S）「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—」（研究代表者：奥村弘神戸大学教授・課題番号：26220403）がおこなわれている。また、今年度より文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」事業「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」が採択を受けた。本事業は「歴史と文化」など 5 領域で事業が進められるが、地域連携センターはとくに「歴史と文化」分野の事業を進めるための拠点となった。

さらに地域連携センター発行の年報『LINK【地域・大学・文化】』の第7号を刊行し、本年度もさまざまな情報発信をおこなうことができた。

今年度、センターが行った個別事業は、以下のとおりである。

(1) 地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

■第14回歴史文化をめぐる地域連携協議会

- ・テーマ「地域で歴史を学びあうことのおもしろさ」、於：神戸大学瀧川記念学術交流会館、105名参加
予定（2016年1月24日現在）

■第4回地域史惣寄合 in 和泉

- ・企画・報告にセンタースタッフが参加

(2) 歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力

■兵庫県との連携事業

○播磨国風土記をめぐる兵庫県教育委員会文化財課との連携

- ・平成24年度以来、センタースタッフが共同研究に従事。

○兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室における共同研究への協力

- ・平成27年度より、センタースタッフが共同研究に従事。

■神戸市における連携事業

○神戸市文書館との連携事業

- ・神戸市文書館企画展「都市と戦争―新資料に見る防空と戦災―」（平成27年11月8日（日）～21日（土）、主催：神戸市文書館、後援：NHK神戸放送局 神戸新聞社、協力：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター）。

- ・歴史資料の整理及び公開に関する研究、火～金曜日の午後、学術研究員が文書館にて史料整理とレファレンスに従事した。
- ・新修神戸市史・生活文化編（仮称）の企画への協力、センター事業責任者奥村弘が、来年度から本格的に事業が開始される新修神戸市史・生活文化編（仮称）の企画（内容及び執筆者の検討）に加わり助言した。

○神戸を中心とする文献資料所在確認調査

- ・平成28年1月24日新在家ふれあいのまちづくり協議会主催講演会に協力し、演者として河野未央氏（尼崎市立地域研究資料館）を紹介した。
- ・神戸市教育委員会と連携し、今年度より『神戸市文献史料』編纂に当センターが協力することとなった。
- ・神戸大学附属図書館社会科学図書館所蔵の郷土史料に整理作業に協力し、山本康司氏を派遣して、平成27年10月1日より12月15日まで附属図書館資料展「村上家文書の世界」へ協力した。

○財団法人住吉学園（住吉財産区）との連携事業

- ・住吉歴史資料館において地元有志と共に同館運営活動に従事した（毎週木曜日）。
- ・平成27年3月、地元民よりの聞き取りを中心とする『阪神淡路大震災資料Ⅰ』を発行した。

■大学協定に基づく小野市との連携事業

- ・小野市立好古館特別展「江戸時代の産業経済の発達～小野市市場地区」（平成 27 年 10 月 31 日（土）～12 月 20 日（日）、主催：市場地区地域づくり協議会、コミュニティセンターいちば、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター、小野市立好古館、協力：市場地区各自治会、後援：小野の歴史を知る会）。

■連携協定に基づく朝来市との連携事業

- ・生野町奥銀谷自治協議会とともに山田家文書の整理会を実施。
- ・生野書院において、石川家文書の整理会を実施。
- ・平成 28 年 3 月に、山田家文書・石川家文書整理会にかんする展示を実施。

■丹波市における連携事業

○人文学研究科との「歴史遺産を活用した地域活性化」をめざす協定（平成 19 年 8 月締結）にもとづく丹波市との連携事業

- ・6 町巡回の連続講座「丹波の歴史文化を知る・つなぐ」の開催（全 6 回）。
- ・市内自治会文書調査（春日町棚原自治会、氷上町氷上自治会）。

○丹波古文書倶楽部の開催支援

- ・毎月第 2 土曜日に開催される例会に木村修二がチューターとして参加した。

■連携協定に基づく加西市との事業

○青野原俘虜収容所関連イベントへの協力

- ・「JR 青野ヶ原駅コミュニティールーム資料展示」平成 27 年 8 月～12 日（地域連携センター主催）。
- ・「再現サッカー大会（俘虜と日本人との間で行われたサッカー大会の再現）」平成 27 年 11 月 3 日（火・祝）（地域連携センター主催）。
- ・「ウォーキング俘虜がやってきた道」平成 27 年 12 月 12 日（地域連携センター主催）
- ・「シンポジウム 加西に俘虜がいた頃—青野原収容所と世界—」平成 28 年 3 月 5 日（加西市教育委員会・小野市立好古館・地域連携センター共催）。

○青野原俘虜収容所関連冊子の発行

- ・青野原俘虜収容所について紹介・解説した『加西に俘虜がいた頃—青野原収容所と世界—』を 3 月に発行。

■篠山市との連携事業

- ・篠山市立中央図書館「地域資料整理サポーター」の活動支援（月 1 回程度）。
- ・神戸大学文学部・大学院人文学研究科「地域歴史遺産保全活用演習」の開講、市民からの一般参加もあり（於：神戸大学篠山フィールドステーション）。

■尼崎市における連携事業

- ・市制 100 周年記念事業の一環である新市史の編纂に協力。編纂の企画には、尼崎市立地域研究史料館の専門委員を務める市澤哲が協力し、執筆には村井良介、古市晃、市澤らが携わった。新市史は、平成 28 年 10 月の発刊の予定。
- ・尼崎市立文化財収蔵庫が主催した展覧会『尼崎の南北朝』の学術講演の講師を市澤が務めた（平成 27 年 10 月 31 日）。
- ・平成 28 年 1 月 24 日に開催された「尼崎市制 100 周年記念歴史遺産保存活用シンポジウム」の企画に

協力し、当日は市澤哲がコーディネーターを務めた。

■三木市との連携事業

○新三木市史編さん事業

- ・「三木市と国立大学法人神戸大学との連携に関する協定書」（平成 25 年 6 月締結）に基づき、新三木市史編さん事業に向けた受託型協力研究を実施。
- ・「市史編さんシンポジウム『新三木市史に期待する』」開催（平成 27 年 9 月 26 日、於：三木市中央公民館）。

○旧玉置家住宅文書保存事業

- ・『玉置家文書目録：古民家の史料調査研究報告書 下』の編集・刊行（平成 28 年 1 月）。

○神戸大学文学部・大学院人文学研究科「地域歴史遺産活用企画演習」

- ・平成 28 年 2 月 23 日・24 日実施。

■三田市との連携事業

- ・九鬼家資料の調査・撮影。

■明石市との連携事業

○「明石藩関連資料調査・公開業務委託」業務

- ・平成 27 年 12 月 23 日より 1 月 31 日まで、企画展「明石藩の世界Ⅲ」を明石市立博物館・明石市教育委員会とともに主催した。

○『明石市史』編纂事業関連

- ・「明石市における地域史料の調査研究業務委託」に従事し、明石市史編纂室と連携して明石市域の古文書の所在確認調査などを行った。

■たつの市に関する連携事業

○神戸大学近世地域史研究会

- ・研究会：平成 27 年 4 月 19 日（日）、5 月 17 日（日）、7 月 12 日（日）、9 月 6 日（日）、10 月 4 日（日）、11 月 1 日（日）、12 月 6 日（日）平成 28 年 1 月 11 日（月・祝）、2 月 21 日（日）、3 月 20 日（日）に実施。
- ・たつの市龍野町善龍寺所蔵史料調査：平成 27 年 5 月 25 日（月）・26 日（火）、6 月 22 日（月）・23 日（火）に実施。

○『播磨新宮町史』

- ・たつの市立図書館の新宮分館が開催した『『播磨新宮町史』を読む』連続講座に、市澤哲が 12 月 6 日の中世分野の講師を務めた。

■淡路市への協力

- ・平成 27 年 5 月 14 日、淡路市教育委員会と H 家資料の調査（奥村弘・吉川圭太・川内淳史ほか参加）。

■佐用町との連携事業

- ・市域の利神城を国指定史跡にする準備委員会に市澤哲、村井良介が委員として参加。8 月 8 日、9 月 26 日に報告書作成の会議を行い、12 月 20 日には、現地踏査を行った。

■福崎町との連携事業

- ・福崎町立柳田國男・松岡家記念館記念展への展示協力（資料調査・図録作成への協力）。記念展「松岡

鼎展～柳田國男を導いた兄～」平成27年7月25日（土）～11月23日（月・祝）（地域連携センター協力）。

- ・松岡家関連資料の調査・デジタルデータ化・目録化作業。
- ・工学研究科と共同で、福崎町辻川地区のジオラマ作成およびワークショップを実施。「辻川界限ジオラマワークショップ」平成27年8月8日（土）～8月12日（水）（地域連携センター協力）。
- ・『広報ふくさき』誌上で研究成果の報告。

■猪名川町における連携事業

- ・猪名川町・関西大学・兵庫県立歴史博物館とともに「川辺郡猪名川町における多田院御家人に関する調査研究」にプロジェクトメンバーとして参画し、N家文書および平尾家文書の調査に従事した。
- ・猪名川町中央公民館主催の歴史講座「歴史にふれる古文書を読む」（毎月第3土曜開催）に、木村修二が講師として参加した。

■姫路市香寺町における連携事業

- ・古文書講座 月2回（年24回）。
- ・香寺町史を読む会 5回・県民交流会館・共催。
- ・町内巡検 香寺町田野・12月6日・協力。
- ・土師資料展示会 香寺町土師・8月15～16日・協力。
- ・史料保存で要望 市教委訪問・8月20日・奥村弘と大槻守。

■西脇市との連携事業

- ・西脇市と人文学研究科との間で協定が締結され、連携事業を開始することとなった。

■大分県中津市との連携事業

- ・中津市と神戸大学との協定が締結にもとづき、連携事業をおこなうこととなった。中津市の新たな歴史資料館開館について、その方向性について中津市教育長等と議論を行った。

(3) 歴史資料・災害資料の保全・活用

■歴史資料ネットワークへの協力・支援

○資料レスキュー活動への支援

- ・平成27年10月、関東・東北豪雨災害につき常総市役所水損公文書のレスキュー活動に参加（吉川圭太・加藤明恵・小野塚航一）。

○奥平野村古文書勉強会

- ・毎月第2日曜日に開催される例会に、木村修二がチューターとして参加した。

■石川準吉関係資料の調査

(4) 地域歴史遺産を活用できる人材の育成

■現代GP「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダーの養成」事業の成果にもとづいて開講された大学院人文学研究科「共通教育科目」への授業提供

○地域歴史遺産保全活用基礎論A、B…地域歴史遺産の保全・活用のための基礎的講義（リレー形式。前後期とも金曜1限に開講）

○地域歴史遺産保全活用演習…篠山市内の古文書を用いた合宿形式の演習を開催（9月）

○地域歴史遺産活用企画演習…市民とともに地域文献史料の活用を図る専門的知識を得るための実践的演習を2月に開催予定（三木市にて）

■教員養成 GP「地域文化を担う地歴科高校教員の養成」事業を定着させる活動

○「地歴科教育論 C」の開講（前期）

■平成22年～24年度特別研究「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」事業を定着・普及させる活動

○まちづくり地域歴史遺産活用講座の開催

- ・神戸大学文学部公開講座、平成27年10月17日（土）・18日（日）、於：神戸大学文学部、主催：人文学研究科・地域連携センター、共催：兵庫県教育委員会、後援：神戸市教育委員会・灘区。
- ・平成28年3月13日（日）、於：県民交流会館（姫路市香寺町）、主催：地域連携センター、共催：香寺歴史研究会、後援：福崎町教育委員会。

○平成27年度まちづくり地域歴史遺産活用講座オプションプログラム古文書解読初級講座

- ・平成27年11月5日、12日、19日、26日、於：神戸大学文学部学生ホール、講師：河島裕子氏。

（5）地域連携センターを拠点とするプロジェクト

■平成26年度～30年度・科学研究費助成金・基盤研究（S）「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて—」

- ・国際会議「文化財防災体制についての国際比較研究」（平成27年10月22～23日、於：神戸大学文学部／2015年10月27日、於：東北大学災害科学国際研究所、地域連携センター協力）。
- ・公開フォーラム「文化財防災体制についての国際比較研究」（平成27年10月24日、於：神戸大学瀧川記念学術交流会館、地域連携センター協力）。
- ・第16回阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会（平成28年1月22日、於：神戸大学附属図書館フロンティア館、「第5回被災地図書館との震災資料の収集・公開に係る情報交換会」並びに科研Sグループ「第6回地域歴史資料学研究会」と共同開催）。

■地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」

- ・平成28年1月より、「歴史と文化」領域のコーディネーターに村井良介が就任し、プラットフォーム構築に向けた調査・研究事業に着手。

（6）地域連携研究と研究成果の公表

■年報『LINK【地域・大学・文化】』7号の刊行

- ・平成27年12月刊行、特集「“地域の再生”と歴史文化Ⅱ—自治体消滅論・地方創生と市民社会—」。

詳細は、平成28年3月に刊行された、平成27年度事業報告書『歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業（14）』を参照（神戸大学学術成果リポジトリにも掲載。

http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003kernel_81009355）。

Ⅱ-3. 倫理創成プロジェクト

[1] 目的：「リスク社会の倫理システム構築」と「多文化共生の倫理システム構築」

このプロジェクトは、平成 19 年度の人文学研究科改組時に、文化学研究科の旧倫理創成論講座の担当教員が中心に立ち上げた。人文学における先端的学際研究として「知識基盤社会に相応しい大学院教育」を目指して、グローバル化と科学技術時代における新しい倫理規範を研究し、21 世紀の倫理創成の可能性を学際的に探求することを目的にしている。哲学、倫理学、社会学、地理学、文学などの教員と大学院生がともにプロジェクトを推進、展開している。

[2] 研究プロジェクトと人文学研究科の共通科目の実施とその経過

平成 18 年度に「倫理創成論」講義を開始し 10 年が経過した。平成 19 年度から選択必修の研究科共通科目として「倫理創成論研究」と「倫理創成論演習」（博士課程前期課程）、「倫理創成論発展演習」（博士課程後期課程）を開講している。その特色として教員の指導のもとで院生がアクション・リサーチ、フィールドワークに従事し研究を実施し、成果を様々な機会を利用し発表することが挙げられる。神戸大学の他部局を始め、国内外の他大学、他機関の研究者、NPO や市民活動家、ジャーナリストなどと文理の枠を超えて連携協力して、教育と研究を推進してきた。

研究活動の面では、国内だけでなくアメリカ、フランス、ドイツ、韓国、台湾、アイルランド、チリなどの研究者を招聘してシンポジウム等を開催する一方、韓国、中国、台湾、香港など東アジア地域の研究者との交流も行ってきた。平成 22 年度から国立台湾大学、大連理工大学と連携し、持ち回りで毎年一回、英語を発言言語とする、若手研究者の発表を中心にした、Applied Ethics and Applied Philosophy in East Asia を共同開催している。第 1 回は平成 22 年 7 月に神戸大学で、第 2 回は平成 23 年 5 月に大連理工大学で、第 3 回は、平成 24 年 3 月に国立台湾大学でそれぞれ開催した。第 4 回神戸大学、第 5 回大連理工大学に続き、本年度は第 6 回を国立台湾大学で 4 月に開催し、韓国の慶熙大学校の大学院生と教員も参加した。会議終了後、英文の発表論文を書き改めて投稿したものが論文集として公刊されている。内容は、東アジアの仏教、儒教、道教なども含む、多様な観点から生命医療倫理、工学倫理、環境倫理、研究倫理および政治哲学あるいは応用倫理学と応用哲学の基礎などに及ぶ。大学院生レベルから英語で発表する国際会議を継続的に実施する研究交流もこのプロジェクトのひとつの特色となっている。

[3] 共通科目の実施状況

「倫理創成論演習」「倫理創成論発展演習」では、発足以来、阪神地区の公害問題（西淀川の大气汚染被害、尼崎・泉南・神戸におけるアスベスト被害など）や神戸市の地震防災、西宮市の市民による自然保護運動に関する聞き取り調査などを行い、記録作成と調査研究を行ってきた。平成 22 年度からその成果を土台に京都精華大学大学院マンガ研究科と共同しアスベスト被害に関するマンガ制作のプロジェクトを立ち上げ、共同授業の実施などを経て、平成 24 年に『石の綿 マンガで読むアスベスト問題』（かもがわ出版）を公刊した。授業は、この間、平成 20 年度後期から 22 年度に

かけ、文部科学省大学院教育改革支援プログラム「古典力と対話力を核とする人文学教育—学域横断的教育システムに基づくフュージョンプログラムの開発」と連動して錬成され、現在に至っている。

平成 24 年から 27 年度は、震災後のアスベストリスクに関連する活動を授業で行った。学内の「東北大学等との連携による震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費」を受け、NPO と連携して被災地の宮城県石巻市、女川町などで調査を行い、震災時のアスベストリスクに関する、啓発ブックレット『マンガで読む 震災とアスベスト』を作成、これを利用したリスク・コミュニケーション活動を大学院生が行った。ブックレット制作は各地方紙で報道され、平成 26 年度は神戸、東京、岩手の NPO、立命館大学、京都精華大学、神戸新聞、岩手日報と連携し、盛岡市でリスク・コミュニケーション活動（講演会、パネル展示）を行った。本年度は、さらに効果的なリスク・コミュニケーション活動を目指し、倫理創成論の一環として NPO、徳島大学等と協力し、「震災とアスベスト」に関するカードゲーム「クロスロード」を試作した。11 月に防災活動のモデル校に指定されている、徳島県海陽町立海陽中学校の 2 学年のクラスでこれを試行した。

「倫理創成論研究」は、平成 19 年度に大学内外の講師が安全やリスク論に関する講義を行ったことから始まった。パリ第 7 大学フランス人講師による産業病の社会学講義、若手教員の共同研究の成果「共生の人文学」の講義、「知識基盤社会における倫理創成の現在と課題」のフォーラム、東日本大震災以後は、災害復興、原発事故やエネルギー問題を念頭にした講義などを行った。本年度は、研究倫理の専門家も交え、科学技術、生命医療、情報、環境、精神医学、リスクの倫理学および応用倫理学の原理論的考察も講じた。以下、今年度の授業内容を挙げる。

回	日程	授業内容
1	4/14	「応用哲学としての応用倫理学」 松田毅
2	4/21	「科学技術と環境倫理 1」 松田毅
3	4/28	「科学技術と環境倫理 2」 松田毅
4	5/12	「情報倫理学 1」 加藤憲治
5	5/19	「情報倫理学 2」 加藤憲治
6	5/26	「徳倫理と生命倫理学(1)」 茶谷直人
7	6/2	「徳倫理と生命倫理学(2)」 茶谷直人
8	6/9	「精神医学の哲学・倫理学 1」 本林良章（非常勤）
9	6/16	「精神医学の哲学・倫理学 2」 本林良章（非常勤）
10/11	6/30	「研究倫理」 中村征樹・大阪大学
12	7/7	「リスクと信頼の倫理学 1」 成瀬尚志・京都光華女子大学短期大学部
13	7/14	「リスクと信頼の倫理学 2」 成瀬尚志・京都光華女子大学短期大学部
14	7/21	「解釈学的倫理学 1」（まとめに代えて） 松田毅
15	7/28	「解釈学的倫理学 2」（まとめに代えて） 松田毅

また、核兵器や劣化ウラン弾の国際的廃絶運動や放射能問題に関わってきたメンバーは、その活動の教育への還元として、平成 23 年度から広島でのフィールド学習「Discover Hiroshima」（2 泊 3 日）を企画・実施している。広島平和記念資料館などを訪れた後、現地の大学生などと意見交

換する問題発見型プログラムの試みは、参加者からとても高い評価を得ており、今年度からは、単位の取得できるグローバル人文学科目「国際アクティブ・ラーニング」として実施することとなった。とりわけ今年は、原爆投下 70 周年を記念した「世界核被害者フォーラム」に参加するなど、充実したプログラムとなった。

[4] 研究活動とその成果、アウトリーチの現状

プロジェクト立ち上げ以降、神戸の自治体や国連機関などと連携し、「防災文化」に関する公開シンポジウムあるいは NPO と協力しアスベスト問題関連の企画を行ってきた。倫理創成研究会での研究成果の公開と討議に加え、震災時のアスベスト飛散から身を守るための防塵マスクの普及活動をとおしてリスク・コミュニケーションを行う「マスクプロジェクト」(大島英利『アスベスト 広がる被害』(岩波新書) 199 頁で紹介)を通じたアウトリーチ活動を行っている。啓発ビデオの制作、震災時のアスベスト健康リスクに関する、市民向けアンケート調査(3 万枚配布、2600 ほどの回答、地元 NPO、立命館大学に協力)、イギリスの専門医を招聘し、日本のケアの専門家と協働した「中皮腫緩和ケア」のワークショップ・講演会(平成 26 年に患者の多い尼崎市で開催)などを行ってきた。

ブックレット『マンガで読む 震災とアスベスト』は、マスクメーカーの協力もあり増刷を重ね、計 13,000 冊を印刷した。岩手、宮城、福島沿岸部の公立図書館、被災地の希望者、医療関係者などに配布後、本年度は東海地震・南海トラフ地震による津波被害が想定される徳島、高知、和歌山、静岡の沿岸部および淡路島の学校、公立図書館、自治体関係者と希望者に送付している。9 月 7 日の読売新聞夕刊で報道されたこともあり、和歌山県環境政策局の依頼で県下の学校と保健所、和歌山市、田辺市、新宮市の県環境管理部門主催の「震災時の廃棄物処理セミナー」で配布された。愛知県庁資源循環推進課でも県下市町村担当者向けセミナーで使用された。このブックレットは、精華大学関係者が中文版とハングル版を完成させ、インターネットで配信されている(英語版の作成も行っている)。

なお、27 年度中に 3 度の依頼講演があった。「クボタ・ショックから 10 年 学習会」(尼崎市主催者依頼)、「予防的アスベスト・リスクコミュニケーション活動：震災後を見据え」RCUSS オープンセミナー)、「震災とアスベスト 見えない危険をどう伝えるのか? 教育とリスク・コミュニケーションをめぐって」(東京全水道会館)などの機会にブックレットと「クロスロード」とを組み合わせたリスク・コミュニケーション活動の意義を訴え、関係者から賛同を得ている。

・倫理創成研究会

平成 17 年度以降、活動してきた研究会は、研究分野や大学の枠を超えて参加する、学生、大学院生の教育と教員の研究を刺激し、動機づけている。また、市民に積極的に開放し、アウトリーチの役割も果たしている。平成 27 年度の開催は、以下とおりである。平成 26 年度以前の研究会の詳細は、ホームページを参照されたい。<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/ethics/about.html>

第61 回倫理創成研究会 講演会 “Beauty as a Call to Justice: For the Pact of Aliveness” (正義への呼びかけとしての美—生存の盟約のために—)

日時: 2015 年 10 月 21 日 (水) 17:00—19:00

主催: 日本文化社会インスティテュート

講師: イレーヌ・スキヤリー (ハーヴァード大学教授)

司会: 嘉指 信雄 (神戸大学人文学研究科)

第62 回倫理創成研究会 講演会 「荀子と現代—— 礼・共生・アリストテレス」 (共催)

日時: 2015 年 11 月 12 日 (木) 17:00—19:00

講演者: 佐藤 将之 (台湾国立台湾大学哲学系教授)

題目: 「荀子礼義論の現代的意義: アリストテレスと共生思想を手掛かりにして」

コメンテーター: 末永 高康 (広島大学文学部人文学科准教授)、

司会: 茶谷 直人 (神戸大学人文学研究科)

第63 回倫理創成研究会 講演会 「修復的正義の思想と実践」

日時: 2016 年 2 月 16 日 (火) 15:00—18:00

共催: 科学研究費補助金基盤研究(C) 「社会合意形成を実現するマンガの機能構築」

講演者: 石原 明子 (熊本大学大学院社会文化科学研究科 准教授)

司会: 松田 毅 (神戸大学人文学研究科)

[5] アウトリーチ活動の成果

上述のように、『石の綿 マンガで読むアスベスト問題』、市民向けの啓発ブックレット『マンガで読む 震災とアスベスト』は、新聞、テレビニュースなどで報道され、それを利用した社会貢献活動にも繋がった。

[6] 『21 世紀倫理創成研究』 *Journal of Innovative Ethics* 第9号の刊行

平成14年度から5号が公刊された『倫理創成論講座、ニューズレター』に代わり、平成19年度の人文学研究科改組時に、あらたに倫理創成プロジェクトの研究紀要として、院生を含む若手研究者、教員の投稿論文を中心に掲載する雑誌を刊行しており、神戸大学学術成果リポジトリ Kernel (<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/kernel/seika/NCID=AA12350231.html>) でも公開している。その第9号を平成27年度末に刊行した。論文公募を行っており、関係教員以外にも他部局、他大学および海外(アメリカ、ドイツ、フランス、香港、ボスニア、チリ、イギリス)の研究者・専門家を始め、助教、ポスドク、院生そして研究者以外からも投稿があり、審査の上、毎号数編を掲載している。平成21年4月に始まったリポジトリ Kernel のアクセス統計では本雑誌へのアクセスは、累計で平成28年1月末に23145件あった(7号まで掲載)。同性婚、スポーツ倫理学、クイア・ポリティクス、環境リスク論などに関する論文へのアクセスが上位を占め、多いものは、5000件を超えている。

[7] 今後の課題

平成 19 年度後期からの文部科学省の資金を受けた現代 GP による ESD サブコース、平成 20 年度後期からの大学院教育改革支援プログラムの実施などで活動が飛躍的に増加した時期を経て、活動は全体として落ち着いた状況にある。二つの補助金終了後も、額は大きくないが、他の民間外部資金、教員の科研費や学内予算などを継続的に得て、一定の質と量のユニークな教育研究活動を推進してきたが、今後の 5 年から 10 年を考えると、新しい担い手と発想が必要になってきている、と認識している。

Ⅱ-4. 日本文化社会インスティテュート

[1] 目的

日本文化社会インスティテュートは、人文学研究科が展開するさまざまな国際交流事業を総括するために2014年4月に発足した。日本文化、社会に関する教育・研究および日本における人文学の教育・方法を、国際交流を通じて深化・発展させることを目的とし、人文学研究科のみならず、法学研究科・EU教育府に所属する教員の協力を得て運営されている。上記の目的を実現するため、今年度は、人文学研究科が推進する頭脳循環プロジェクト、日本語日本文化教育プログラム、KOJSP、グローバル人材育成などの関連事業を総括し、様々なシンポジウム・研究会などを開催した。

[2] 活動内容

本年度の活動の詳細は、以下のとおりである。いずれの取り組みにおいても、国内外から迎えた提題者を中心に、学際的な主題をめぐって活発な議論がなされ、日本研究の新たな展開に手応えが感じられた。

1) ワークショップ「インターフェイスで考える—哲学・認知科学・文学」

日時：2015年6月20日（土）13時～18時30分

会場：神戸大学文学部B棟132（視聴覚教室）

主催：Forum for Japanese and Comparative Philosophy (FJCP)

共催：日本文化社会インスティテュート（神戸大学人文学研究科）

【パート-1】13:00～14:45

提題者：Jan Lauwereyns（九州大）

“Savoring the Data: A Challenge to Accounts of the Brain as a Prediction Machine”

ディスカッサント：喜多伸一・長坂一郎・大坪庸介・野口泰基・大塚淳（神戸大）ほか

司会：嘉指信雄（神戸大）

【パート-2：「危機の時代と主体の臨界——昭和期日本の思想と文学——」】15:00～18:30

提題者：宮野真生子（福岡大）、岩本真一（京都精華大）、梶尾文武（神戸大）

ディスカッサント：アントン・セヴィリア（九州大）、竹花祐介（大谷大）、樋口大祐（神戸大）ほか

院生（竹永知弘・松田樹・生駒由梨奈、大家慎也、小嶋恭道、劉争、陳詩雨、林遼平、古賀高雄）

司会：梶尾文武（神戸大）

2) New Steps in Japanese Studies/Part-III

“Translating Hadashi no Gen into Italian: Language, Religion and Society ”

（『はだしのゲン』をイタリア語へ訳す—言語・宗教・社会の絡み合いを考える—）

日時：2015年7月16日（木）午後5時～6時45分

場所：神戸大学文学部B棟132 視聴覚教室

共催：日本文化社会インスティテュート／頭脳循環プロジェクト

スピーカー：マルチェッラ・マリオッティ Marcella Mariotti（ヴェネチア大学講師）

ディスカッサント：マサオ・ミヤケ+人文学研究科研究院・大学院生など（梅村麦生、大川内晋、松本風子、クリスティーナ・カサティ、アルタン・クヴェールほか）

司会：嘉指信雄（人文学研究科教授）

3) 日本文化インスティテュート・頭脳循環プログラム第4回学術シンポジウム

日時：2015年7月31日（木）15:00～18:00

場所：神戸大学文学部A棟学生ホール

講師-1：Griseldis Kirsch（ロンドン大学SOAS講師）

題目：Narratives of Trauma: Dresden and Hiroshima in German and Japanese Television

講師-2：樋口大祐（神戸大学人文学研究科准教授）

題目：ヒロシマ表象における複数のトラウマについて

司会者：増本浩子（神戸大学人文学研究科教授）ほか、人文学研究科研究員、大学院生など

討論者：松永京子（神戸市立外国語大学准教授）

4) New Steps in Japanese Studies/Part V:

Toward Crossing between Japanese Studies and Public Humanities

“Beauty as a Call to Justice: For the Pact of Aliveness”

（正義への呼びかけとしての美—生存の盟約のために—）

日時：2015年10月21日（水）午後5時～7時

会場：神戸大学文学部B棟3階 B331教室

主催：日本文化社会インスティテュート（使用言語：英語）

講師：イレース・スキヤリー（ハーヴァード大学教授）

リスポンダント：奥村沙矢香、中真生、大橋完太郎ほか

司会：嘉指信雄

[3] 今後の活動

来年度4月より開始される、全学的教育プログラムである「現代日本プログラム」や、神戸大学「アジア総合学術研究センター」における国際的日本研究プロジェクトなどとも連携しながら、さまざまな教育研究プログラムやシンポジウムを企画・実行する予定である。とりわけ、神戸大学は大学共同利用機関法人・国文学研究資料館が中心となって展開する古典籍データベース構築事業（<http://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/>）の拠点大学の一つとなっているが、人文学研究科は日本文化・社会に関する教育研究の蓄積を活用しつつ、古典籍に関する国際共同研究をさらに主導していく。

II-5. ESD コース（持続可能な開発のための教育コース）

[1] ESD サブコースの実施

現代 GP「環境教育」の部門で、発達科学部・経済学部と連携して平成 19 年度に採択された「アクション・リサーチ型 ESD の開発と推進」のプログラムにおける ESD「持続可能な発展のための教育」のサブコースは平成 20 年 4 月に開始した。その目標は、アクション・リサーチの手法で学生が地域から学ぶこと、「持続可能な社会」への人文学的アプローチを試みること、他分野や実社会の様々な人々との交流を通じて、環境の複雑性を体で感じ、知的共同作業を経験することの三点にまとめられる。

このコースは、学内の複数部局が連携し、1 年生の「ESD 基礎」から 4 年生までの授業科目を開設している。当初の 3 学部であったが、平成 23 年度に農学部、平成 24 年度に国際文化学部と工学部、平成 25 年度には医学部保健学科が参加し、それに伴うカリキュラム改訂を行った。また、平成 22 年度からは学内に ESD 推進検討委員会（WG）が作られ、関係学部選出の委員によって構成されていたが、27 年度より委員会は共通教育の専門部会となった。

※「ESD」は、環境・人権・福祉・国際理解・健康などの「持続可能な社会づくり」に関わる諸問題を総合的に捉えるとともに、現場の様々なステークホルダーと連携し、多様な課題解決に様々な観点から参加できる人材の育成を目指すプログラムである。神戸大学では複数の学部が連携して、貧困・平和・正義・人権・倫理・健康問題などの幅広い観点を組み込んだ教育カリキュラムを作っている。各学部で学外組織とも連携してアクション・リサーチとフィールドワークの機会を用意して、学生が自治体や企業・NPO など地域の様々なフィールドに出て現場の人々とともに課題解決に取り組む活動を支援する。

[2] ESD サブコースの実施状況

文学部では平成 27 年度は哲学・社会学・地理学などの専修が共同して、以下の授業を行った。

平成 27 年度 文学部 ESD コース科目 授業一覧

科目名	学期・時限	担当専修（教員）	備考（読替など）
ESD 基礎	(前期)水・5	4 学部合同	1 年生対象
ESD 論	(後期)水・5	5 学部合同	1 年生対象
環境人文学講義 I	(前期)月・2	哲学・社会学・地理学など	2 年生以上
環境人文学講義 II	(後期)月・1	福島あずさ（地理学非常勤）	自然地理学
ESD 演習 I	(前期)月・4	哲学（松田）	応用倫理学演習
ESD 演習 II	(後期)水・2	地理学（藤田）	地理学演習 II

各科目の授業内容は以下のとおりである。

① ESD 基礎（持続可能な社会づくり）

本授業では、様々な学部から集まった学生が、それぞれ配属された経済学部、文学部、発達科学部において 3 人程度一組のグループを編成し、ESD の観点からマップなどを作成することで地域課題を検討

する。フィールドワークを通じて各グループで作成したマップは、合同発表会において発表する。今年度は、神戸大学生の防災ジレンマを、カードゲーム「クロスロード」で可視化することを目標に、様々な自然災害を例に「クロスロード」の課題文を各班で作成する授業を実施した。受講生がチームを作り、地震、水害、津波などについて身近な関係者からのインタビューを踏まえ、討議を繰り返し、各班5題の問題を作成し、考察の過程と結果を最後にアクション・リサーチ発表会で発表した。

平成27年度「ESD 基礎」各回の授業内容

回	日程	授業内容
1	4/15	「ESD 基礎」ガイダンス
2	4/22	なぜ ESD なのか
3	5/13	講義「ソシモ」博報堂企画事務局／（株）スコップ代表取締役 山名清隆さんの講義
4	5/20	アクションリサーチ・ガイダンス
5～10	5/27～7/1	各学部での調査ワークショップ
11	7/8	アクション・リサーチ発表会1
12	7/15	アクション・リサーチ発表会2
13	7/22	ESD の学習論
14・15	7/29	リフレクション（2コマ）

② ESD 論（持続可能な社会づくり2）

この授業では、地球環境問題だけでなく、幅広く多様な領域から「持続可能な社会」を生み出すために必要な価値観・社会システム、およびそれを明らかにするための学問的方法について検討を加える。「環境系」「開発系」「社会系」の各領域から実践・理論の実際を知り、自ら考え他者とともに行動するスタイルを学ぶとともに、自らの専門との関係性を考え大学教育への新たな動機づけを得ることを目指す。

本年度のトピックスのテーマは「神戸大学の ESD」であり、関係学部教員と外部講師の講義を始め、アクション・リサーチとしてのフィールドワークを行い、学生が発表しあう形式を取った。各回の授業内容は、以下のとおりである。

平成27年度「ESD 論」各回の授業内容

回	日程	授業内容
1	10/7	ガイダンス
2	10/14	ESD の概念・枠組み：高尾千秋（発達科学部）
3	10/21	貧困問題：原口 剛（文学部）
4	10/28	アスベスト問題：松田 毅（文学部）
5	11/4	ゴミ問題 ～体験的神戸市廃棄物行政史：北尾 進（環境カウンセラ～、元神戸市環境局） 石川雅紀（経済学部）
6	11/11	農業問題：井上泰子（林野庁計画課海外林業協力室課長補佐） 片山寛則（農学部）
7	11/18	ハンセン病問題～発展を否定された人たち：畑野研太郎（国立療養所邑久光明園名誉園長） 松岡広路（発達科学部）
8		☆篠山市農業体験ツアー～ 11月28日（土）
9		☆邑久光明園ボランティア・スタディ・ツアー

		12月11日(金)夜～13日(日)2泊3日 ☆大船渡支援プロジェクト(11月13日(金)夜～16日(月)朝) ☆ESD スタディツアープログラムで「ツアープラン活用」
10	12/16	学生企画 シンポジウム準備1：高尾千秋(発達科学部)
11	1/13	医療問題：小野 玲(医学部保健学科)
12	1/20	学生企画シンポジウム準備2：高尾千秋(発達科学部)
13/14	1/27	学生企画シンポジウム：全教員
15	2/3	リフレクション 授業全体の振り返り

③ 環境人文学講義Ⅰ

環境人文学講義Ⅰでは、ESDを専門科目とする哲学、社会学、地理学専修、および本学他学部や他大学、民間などから各回の講師を選出し、それぞれの専門領域の観点から、ESDを主題としたオムニバス形式の講義を行っている。

今年度は、「災害公害・環境と市民社会」の観点から具体的な問題解決と市民参加を視野に、現場を知る専門家、民間シンクタンク、企業の技術者も外部講師として招聘し、講義を行った。

平成27年度「環境人文学講義Ⅰ」各回の授業内容

回	日程	授業内容
1	4/13	「環境人文学入門」 松田毅・李明哲(文学部、哲学)
2	4/20	「原発問題再考」 白鳥義彦(同学部、社会学)
3	4/27	「ヴィジュアル・コミュニケーションをととした気候変動問題」 (油井清光、社会学)
4	5/11	「軍事利用される放射性廃棄物」 嘉指信雄(哲学)
5	5/18	「『環境』は誰のものか?：「生活環境主義」と「水戦争」 佐々木祐(社会学)
6	5/25	「釜ヶ崎とはどんなまちか?1」 原口剛(地理学)
7	6/1	「釜ヶ崎とはどんなまちか?2」 原口剛(地理学)
8	6/8	「ヘイトスピーチを実践的に考える1—歴史認識問題と在日コリアンの処遇をふまえて—」 李明哲(哲学)
9	6/15	「ヘイトスピーチを実践的に考える2—歴史認識問題と在日コリアンの処遇をふまえて—」 李明哲(哲学)
10	6/22	「ごみ減量最前線～日本とアジアの現場から～」 松岡夏子(三菱UFJリサーチ&コンサルティング、ゼロ・ウェイストアカデミー)
11	6/29	「災害と呼吸保護(アスベストを主体に)」 片岡克己(スリーエムヘルスケア株式会社、安全衛生製品 技術部)
12	7/6	「災害リスク・コミュニケーションについて」 矢守克也(京都大学防災研究所教授、巨大災害研究センター情報学研究科巨大災害情報システム分野)
13	7/13	震災とアスベスト：リスクを伝える試み 松田毅(哲学)

④ 環境人文学講義Ⅱ

この授業では、福島あずさ講師が、自然地理学の観点から、自然災害と環境問題をキーワードに、アジア地域を中心とした自然環境と人間の関わりについて様々な事例を取り上げた。自然地理学の基本的な知識を習得して現象のメカニズムを理解し、今後の問題解決の方向性について考察する力を養った。

⑤ ESD 演習 I

今年度は学内の「東北大学等との連携による震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費」により、震災時に生じるアスベスト曝露に関するリスク・コミュニケーションの啓発ブックレット等を用いた活動を企画・実施した。特に、2015 年が阪神淡路大震災から 20 年、アスベストの社会的報道から 10 年を迎えることを踏まえ、プロジェクト型演習を行います。震災時のアスベストリスクを例に、想像力を働かせ、問題を社会にいかに関え、表現するかを考え、実践する授業を行います。いわゆる「クロスロード」の作成に取り組んだ。

各回の授業内容は、以下のとおりである。なお、前期授業終了後も倫理創成プロジェクトの活動として、学生と大学院生の有志が、NPO、徳島大学の関係者らと協力し、「震災とアスベスト」に関するカードゲーム「クロスロード」の試作版を完成させた。徳島大学の中野晋環境防災研究センター 長、塚本章宏ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部准教授および徳島大学学生と協力して、11 月 20 日（金）に防災活動のモデル校に指定されている、徳島県海陽町立海陽中学校の 2 学年のクラスでこれを防災ワークショップ「震災とアスベスト」の模擬授業として試行した。

平成 27 年度「ESD 演習 I」各回の授業内容

回	日程	授業内容
1	4/13	導入 1
2	4/20	導入 2
3	4/27	クロスロード試行
4	5/11	事後学習（クロスロード、人と防災未来センター見学のみりかえり）
5	5/18	事後学習：意思決定ゲームの理解を深める（ブックレット持参：「ジレンマ」を考える）
6	5/25	5 月 25 日：事前学習（アスベスト被害について知る）
7	6/1	6 月 1 日：中皮腫・アスベスト疾患患者と家族の会尼崎支部訪問
8	6/8	事後学習 レフレクション 1
9	6/15	レフレクション 2・「震災とアスベスト」のジレンマを掘り下げる
10	6/22	「震災とアスベスト」版の作成へ
11	6/29	「震災とアスベスト」版試行と選出
12	7/6	クロスロード研究会代表浜さんとのコラボ
13	7/13	「震災とアスベスト」版クロスロードの暫定版制作と事後学習
14/15	7/23	暫定版完成と学期全体のレフレクション

⑥ ESD 演習 II

本授業は、実際に街や村を歩くことで、フィールドワークに対する理解を深め、「持続可能な開発」の観点から考察する際に、現地で観察することの重要性を体得することを目指すことを目標とする。今回は、統一テーマとして「災害」を掲げ、主に土日を使って、随時、地理学の観点を重視した巡検（excursion）を行った。地理学は、19 世紀における近代地理学としての確立・発展以来、「環境」に対する考察を深め、現地における人間生活との調和を図ろうとしてきた。特に「災害」は、環境に対する過剰な改変によって引き起こされる一面もあり、「持続可能な開発」に関して目配せしようとする場合、有効なテーマと考えられるからである。この授業の参加者はすべての回に参加しなくてはならないし、事前にレジュメを用意

し、担当地でプレゼンを行うものであり、ハードワークではあるが、実際に現場を視察し、その場で考え、討論を行うことには大きな意義があると考えます。

平成27年度「ESD 演習Ⅱ」各回の授業内容

回	日程	授業内容
1	10/1	第1回 授業の趣旨の徹底・確認と今後の日程調整
2	10/8	第2回 テーマ：現地 で観察することの意義を確認する。
3	10/15	第3回 藤田が展開している震災復興支援プロジェクトの構想に関して説明した。その論文を読んでレポートを課した
4～7	10/22	第4回 震災関連行事に参加してのレポートに代える。-1
5	10/29	第5回 震災関連行事に参加してのレポートに代える。-2
6	11/5	第6回 震災関連行事に参加してのレポートに代える。-3
7	11/12	第7回 震災関連行事に参加してのレポートに代える。-4
8～9	11/23	第8－9回 テーマ：申川の付け替えと甲子園の開発。半日巡検の後、レポートを課した。
10～12	12/23	第10－12回 テーマ：三宮と居留地の周辺における歴史災害。そして、六甲道周辺における阪神淡路大震災における被害と復興。半日巡検の後、レポートを課した。両日とも祝日を活用した。
13～15	1/31	第13－15回 中国における ESD に関する以下の論文を報告してもらい、それを巡って議論した。郭 明「ESD の視点を取り入れた中国の高校地理教科書の分析－人民教育出版社の必修教科書を中心に－」『新地理』63-2、2015

[3] 評価と課題

ESD サブコースは本年度で8年目を終えた。哲学・社会学・地理学専修で ESD 科目は卒業関連科目であり、受講学生数は一定水準を保っている。演習は、専門や学部が異なる学生がフィールドワークを共同で行い、特定の問題に現場で向き合う人々に出会い、考え、討議を重ね、自分の意見を説得的に伝える努力や工夫から、取り組むべき課題を見出すことを目標とする。このような現場での経験が、学生の糧となり、成長を促すことが、学生の言動の変化からも感じ取れる。このコースの授業群は、幅広い知識の獲得、豊かな経験の蓄積、専門性を深める端緒といった面で大きな役割を果たしている。取組を継続し、4 学期制導入などの神戸大学の教育制度の変化全体のなかでも、既存の学部教育や大学院の教育研究と有機的に繋げて、維持・発展させることが重要である。

東日本の震災・津波被害、福島原発事故の余波もあり、ESD コースとしての履修はしていないが、授業を受講した学生の反応からも、学生たちが「持続可能な社会の構築」に少なからず関心を寄せている実態がうかがえる。今後も、大学の教育研究と社会を人文学の見地から架橋する地道な取組を積極的に推進し、その裾野を広げてゆきたい。

運営面については、本年度も大学院博士課程後期課程の学生 1 名を関連研究の RA として雇用することができ、助力を仰いだ。当該コースの運営には経費と人材を要するので、予算措置が欠かせない。学内では当該コースに参加する学部が増え続け、平成 25 年度から工学部と医学部保健学科も参加している。ただ、コース発足以来の核となっていた教員が定年退職し、今後抜けていくなかで、どのように維持発展させていくかが大きな課題となる。

第3部

I. 外部評価

I-1. 外部評価委員会・議事録

日 時：2016 年 7 月 3 日（日）14：00～17：00

場 所：人文学研究科 A 棟学生ホール

外部評価委員：中島道男（奈良女子大学教授、人間文化研究科長）

ボナヴェントゥーラ・ルペルティ（ヴェネツィア カ・フォスカリ大学教授、国際日本文化研究センター 外国人研究員）

人文学研究科：増本浩子（文学部長・人文学研究科長）、市澤哲（副研究科長）、白鳥義彦（副研究科長）、山本英行（2015 年度副研究科長）、前川修（大学院委員）、古市晃（教務委員）中畑寛之（2015 年度教務委員）、茶谷直人（学生委員）、長坂一郎（2015 年度学生委員）、岸本秀樹（2015 年度図書委員会委員長）、奥村弘（地域連携センター）、樋口大祐（海港都市研究センター）、鈴木義和（評価委員長）

I-2. 神戸大学文学部・大学院人文学研究科 外部評価報告書

中島道男（奈良女子大学教授、人間文化研究科長）

まず、外部評価する私のスタンスについて述べておくべきだろう——。私は、勤務先で研究科長という立場にあり、大学院の定員充足問題をはじめ、すぐには改善できないさまざまな課題を抱えながらもがいているところなので、教員や院生にも知り合いがいる関係上なじみがある、とはいえ教育の中身については詳しくは存じあげていない神戸大学文学部・大学院人文学研究科の取り組みからいろいろ学ばせていただこうと、高等教育や大学経営の専門家などではまったくないにもかかわらず、このたび外部評価委員を引き受けさせていただいた。

神戸大学文学部・大学院人文学研究科では、毎年、外部評価を受けておられる。資料を作成するだけでも大変なエネルギーと時間を費やすことになるだろうが、ある意味、もはやルーティンとなっている。とはいえやりっ放しではなく、外部評価を改善につなげておられる。まずこの点に敬意を表したい。また、グローバル時代への対応という観点から、今年度からは海外の大学からも外部評価委員を招かれたということは、もちろんこれまでに国際交流の実績があるからできることだろうが、意義のあることだと思われる。

〔教育について〕

まず意外だったのは、学部定員が少ないことである。もっと人数が多いものと思い込んでいた。存在感があるということだろう。

学部のディプロマポリシーには「人類の文化的営みの蓄積としての人文学を、古典をとおして深く理解するとともに」とあり、堂々と古典の重視を謳っている。大学院についても「人文学の古典的な役割を継承しながら」とある。人文社会科学系学問への風当たりが強い現在、ぜひこの立場を堅持して、人文社会科学系の学問の——と言っても一枚岩ではないが、少なくとも研究科名称となっている人文学の——もうひとつの有用性を主張しつづけていただきたい。

手間暇をかけた教育ということがうかがえる取り組みとして、大学院でも教員相互の授業参観や、それにもとづく評価がなされていること、学修カルテの利用等があげられよう。履修登録点検までされている。大学院での履修登録点検となると、手のかけすぎという感がなきにしもあらずではあるが、留学生等のことを考えれば、そういった手当も必要なご時世かもしれない。学部の2年次でのハラスメントセミナーがおこなわれているが、これも専門に入るとハラスメントが生じる可能性が高いということを考慮した対策ということであろう。大学院生をRAのみならず非常勤講師に採用するなどの若手研究者支援は、なかなかアカデミックポストが得られにくい若手研究者の現状にあって、支援の年数が限られているとはいえ、意義のある取り組みといえよう。学部同窓会の存在も心強いだろう。大規模校においては、大学全体の同窓会よりもこうした学部単位のものの方が有効であ

ろう。

国際交流も欧米・アジアにともに積極的になされており、欧米についても派遣と受入れの非対称が生じることなく、欧米からの留学生も多い。こうした国際交流の実績からすれば、ダブルディグリー制度の導入が現在1大学のみとなっているが、今後、さらに推進されることが期待される。

定員が少ないこともあり少人数教育が売りのひとつになると思われるが、このことをさらに強くアピールするためには、アンケートを工夫して、入学直後と卒業時との満足度の違い、満足度の増加についてのデータをとることも有効だろう。

【研究について】

大手私大ではうらやましいくらいサバティカル制度が充実しているが、国立大学では神戸大学ほどの大きな大学でもサバティカルをとるのは簡単ではなさそうである。とはいえ、サバティカルがなくても、研究の成果という点ではたいへん充実していると考えられる。論文数・著書数、科研費採択数などからそのことはうかがえる。大学出版会などはまだ存在していないとのことであるが、今後、そうした出版会などから成果が出るようになれば、教員個人のではなく神戸大学の研究成果として対外的に大きくアピールできることになるだろう。

神戸大学は医学系や工学系をはじめ数多くの学部がある大規模な総合大学であり、しかも学長のリーダーシップが強調される現状では、文学部のような小さな学部——神戸大学は学部数では国立大学のなかで第2位、学部学生数では第5位にあるが、文学部は神戸大学のなかでいちばん小規模の学部である——は、舵取りがなかなか大変であろう。研究科長のもと学部がまとまって、よりよい文学部・人文学研究科をつくっていかれることを期待している。

ボナヴェントゥーラ・ルペルティ（ヴェネツィア カ・フォスカリ大学教授、国際日本文化研究センター 外国人研究員）

〔教育について〕

全員が他の教員の授業を参観して、自らの授業に活かしていくというピアレビューの制度は、非常に有意義であると言える。イタリアでは同じ大学、学部で他の教員の授業を参観することは非常に難しい。このような制度は今後とも継続し、教育の改善に役立ててほしい。

学部教育では、他学部の単位が30単位まで取得できる制度となっていることは評価できる。また、海外の大学との単位互換では60単位まで取得できるというのはすばらしいことである。

大学院の教育について、イタリアでは学生がどれだけ論文を発表しているかは、大学院の重要な評価指標となっている。今年次報告書では、大学院生の発表論文数については具体的な記述がないが、これも重要な評価項目であり、改善の必要がある。

また、学生の研究については、盗作の問題があり、これにどのように対処するかがイタリアでも重要な課題となっており、イタリアではそのためのソフトウェアで確認を行っている。神戸大学では、博士論文についてはソフトウェアによる確認を行っているとのことであるが、修士論文、卒業論文についても、盗作問題に対応することが必要だろう。ソフトウェアによる確認はもちろん、よりきめ細かい研究倫理教育を行うことも必要だろう。

〔研究について〕

教員プロフィールに示されている研究成果は申し分ないものと言える。イタリアでは、研究論文が多いほど研究費が多くなり、研究業績が少ないと学科の予算が削減される。また、国際的な研究や外国人との共同研究を行うことが研究費の配分に反映されるシステムがある。また、ヴェネチア大学では、若手研究者や優秀な研究、教育成果に対する賞がある。神戸大学でも若手研究者賞があるようだが、優れた研究に対してはそれに見合った評価と資源配分が行われる必要があるだろう。イタリアではサバティカルを10年に2回取れることになっている。文学部・人文学研究科でもサバティカル制度が活用されているが、研究の活性化のためには、これはさらに充実させることが望まれる。

〔国際交流について〕

国際交流が盛んに行われていることは大いに評価できる。我々が参加した頭脳循環プログラムも、国際共同による教育、研究ですばらしい成果を上げることができ、ヴェネチア大学にとっても大きな収穫があった。非常に多くの海外協定大学があり、様々な地域を対象としており、交換留学等で実質的な教育交流が行われていることも高く評価できる。しかし、まだ協定校が無い国、地域が存在することは改善が必要である。たとえば、文学部・人文学研究科はロシアには協定校が無いのだが、これは非常に残念なことであると考えます。今後は、さらに協定校を増やし、ロシアなどまだ協

定校がない国や地域の大学と積極的な交流をしていくことが強く望まれる。

〔評価について〕

評価については、毎年度評価報告書を作成し、外部評価を受けているのは素晴らしいことであり、今後とも継続してってもらいたい。評価報告書をインターネットで公開していることも評価できる。このように詳細な評価を行っているのだが、この評価報告書や外部評価の内容をどのように活かしていくかというのが重要な問題である。文学部・人文学研究科の問題として内部の人間が受けとめ、改善していくことが重要であることは言うまでもないが、より積極的に外部に発信していく必要もある。文学部・人文学研究科の受験生に対しても参考になるわけで、たとえば、文学部は就職に不利だと思う人がいるかもしれないが、就職率は問題はないということ、あるいは、文学部・人文学研究科ではこれだけ多くの充実したプログラムもあるということを評価報告書を通して発信していくことができる。

また、イタリアでは、自己評価、外部評価は、なにより大学本部に訴えて、我々の部局はこれだけしっかりいろいろなことをやって成果を上げており、外部からも高い評価を得ているということを示し、さまざまな要求の根拠としている。神戸大学でも、大学本部に対して、この報告書に示されているように大きな成果を上げており、外部評価委員からはこのような意見が示されているということを根拠にして、大いに主張することが必要である。

あ と が き

2015（平成 27）年度は第 2 期中期目標期間の最終年度に当たる節目の年であり、本年次報告書もこの中期目標期間中のまとめとして充実したものとするべく、評価委員会委員、執筆分担者にご尽力いただいた。また、例年お一人の先生にお願いしている外部評価委員についても、国内外からお一人ずつお二人の先生にお願いすることとした。

2016 年 7 月 3 日に奈良女子大学教授・人間文化研究科長の中島道男先生、ヴェネツィア カ・フオスカリ大学教授・国際日本文化研究センター外国人研究員のボナヴェントゥーラ・ルペルティ先生にお越しいただき、外部評価委員会を実施した。お二人の先生には、大部の年次報告書を精査いただき、神戸大学文学部・人文学研究科にとってきわめて貴重なご指摘、ご意見を頂いた。改めて深く感謝申し上げる次第である。

この年次報告書については、昨年度、一昨年度の評価委員の先生からさまざまな問題点、改善すべき点をご指摘いただいた。本年度の年次報告書では、そのご指摘を受けてより良いものにするべくいくつかの改訂を行った。しかしながら、まだまだ不十分なところが多いことを認めざるを得ない。来年度の年次報告書は第 3 期中期目標期間のはじめの年度でもあり、さらなる改訂が必要であると考えている。

最後に、この報告書を作成するに当たってご尽力いただいた多くの教員、職員の方々にお礼申し上げますとともに、諸般の事情により年次報告書の完成がたいへん遅くなってしまったことをお詫び申し上げます。

2015・2016 年度評価委員長 鈴木 義和